

ゼロ

すけのむねさん

ゼロ

第1章

芸術乞食

.....

4

第2章

大谷石と棕櫚の家

.....

71

第3章

鈴懸の径

.....

144

第4章

からっぽの世界

201

第5章

鳴けない鳥

258

第6章

絵の具と手紙

316

第7章

鎮魂歌

367

第8章

何も吞込みやしない穴

452

第1章

芸術乞食



「絵なんか描いて、生活できるわけないじゃん」

三島は、おれを一瞥いちべつしたあと、口角を少し上げて目をそらし、鼻で笑ってから、吐く様にそう言った。使える限りの顔の筋肉を駆使して、侮蔑の表情を表現してくれた。

そうなのだろう。やつはききわけがいい。

彼とは高校からのつきあいだった。同じ漫画や同じ音楽に夢中になり、下らないギャグにバカ丸だしで笑い転げた盟友だ。一緒に東京に出て来て、お互い違う道を歩んで来たものの、結婚して四十路にさしかかった今でも気兼ねなく話せる、貴重な友人の一人だ。しかし、今日は実も蓋もない。いや、解らなくはない。現実的にはそうなのだ。でもおれはききわけが悪いから、やつが何を根拠にそう

言い切るのか、やっぱり解らない。

四十歳、既婚、無職。

いや、実は肩書きはいっぱいある。デザイナー、イラストレーター、ライター、云々。でもどれもピンときていない。つきつめればね。じゃあ何か？ アーチスト？ 何かタマの裏が痒い気がする。でもこの言葉しか見つからないのだ。今のところ。それが職業か、と問われれば、そうだと開き直ることも出来ない。むしろ無職という方が気が楽なのだ。

仕事がトンと来なくなつてから、もうすぐ半年になる。今までも忙しい時と暇な時の緩急は激しかったが、ここまでは初めてだ。暇なときはなるべく焦らず、勉強に時間を費やす様にしていた。おれの場合、映画をみたり音楽を聴いたり本や漫画を読んだりする事が勉強なので、はたから見れば遊んでいる風にしか見えない。妻は日中バイトに出かけているので、最近はおれに向ける視線が日に日に鋭利になっている。

まあ、それはまあいい。今は三島だ。

「別にそんなこと聞いてないよ。今は貯金で
凌いでるし。前はさ、こんな時でもガンガン
前向きに営業したけど、何か、そんなのもし
い加減阿呆らしくなってきたよ。」

「だから！ 今更何言ってるんだよ。ろくに就
職活動もしなかったやつが。自業自得だろ。
高校生でも解ることだろ。俺、高校の時、お
まえが美大受けるって聞いてひっくりかえっ
たよ。ありえねーって。四十にもなってるまだ

そんなこと言ってるおまえを目の前にして、二度びつくりしてるよ。フリーとかなんとか言ったってフリーターみたいなもんだろ。常識で考えれば、解るんだよ。普通は。今まで何も考えなかったこと自体、聞いてて寒くなるわ」

「……で、どうしろっての？」

「とりあえず、目的だとか生き甲斐だとか、闇雲なこと言う前に現実に目を向けろってこと。俺だって、前の会社辞めて、今んとこ

来て、給料だって待遇だって前より悪いし不満だらけよ。でもしようがねえだろ。俺らの同級生だって、もう家構えてるやつもいるし、みんな妻子養って、やなこといっぱいあるけど立派にやってんだぞ。俺だって、残業だらけでさ、つまらないし荒^{すさ}むよ、仕事なんて。でもしようがねえだろ。好きなことやりたいとか、そういう甘ったれた話し、むかつくんだよ。そんなこと、今更、次元違いすぎて聞いてらんねえよ」

「でも、三島だつて前の会社、業務内容気に喰わなくてやめたんだろ。給料良かつたのに。つてことは、金の話しでどうにもなんないところだつてあんだろ」

「てか、次元違うつて言つてんじゃない！俺はいろんなやなこと我慢して、嫁喰わせてんの！一緒にすんなつて。だいたい、フリーランスつて、ようはプーだろ。現実見えてないくせに理想ばっかり掲げて偉そうなことばつか言つたあげく、喰えないつて、あたり

めえじゃん。いい気味だよ」

：だめだ。話しが通じない。常識・普通・みんな、の三段論法を掲げられると、誰と喋ってるのか解らなくなる。まあ、概要は解る。今までもさんざん、至るところで聞かされたお話しだから。でも：、とりあえず、おれは今現時点で、金に貧窮して愚痴っているわけでも、やつに無心してるわけでもないのに、なぜここまで叩かれなければいけないのか……。特段誰に迷惑かけてるわけでもなく、

やつに恨みをかけた覚えもない。今日は、高校の時、一緒にはまっていたくだらない事だとか、なんかそういうピュア(?)な感覚をとり戻したい気持ちになって、彼を呼び出した。が、何かすごくいたたまれない気持ちになったので、とつとと帰ることにした。

マルチアーチスト、と言えば聞こえは良いが、要は職業一個じゃ喰えなくて、出来る事なら何でも手を出す芸術乞食。おれの周りの人間も最初は職業一個だったけど序々に乞食^{マルチ}

が増えてった。名刺の肩書きは、モデル／ヘ
アメイクアーチストとか、脚本／映像／役者
／文筆だとか、イラスト／ペーパークラフト
／刺繍／エッセイだとか、ライター／靈感タ
ロット／水晶霊視だとか、有象無象。身近な
ところから触手（職種？）を伸ばして、収集
つかなくなっていく。やったことのない発注
が来ても、何喰わぬ顔で受注しているうち
に、こうなってしまうのだ。二つ三つならま
だ容易^{たやす}い。それ以上になると名刺を作る気も

失せてくる。その上、業種ごとにペンネームやメールアドレスを増殖させてるやつもいて、電話がかかってくる度に激しく混乱、どんどん鬱になる、だとか。

こういうめんどくさい輩は、やから一般的にはクリエイターのひと言で片付けられるけど、税務処理的には自営業。商店街のおっちゃんも弁護士もおれも一緒だっつーんだから、国つてのは大雑把なもんだ、と思う。もしくはフリーランス、自由業。常々変な言葉だと

思っていたけど、最近はこの「業」という字が「業種」のそれではなくて「業ごうが深い」の「業」に見えて何か納得がいく。何にしても、不動産屋と義理父にはひどく嫌われる職業だ。売れるものなら何でも切り売りのスピリット。ライターの仕事なんかをしていると、書けるネタ、何でも切り売りしてるうちに、趣味も生活も日常も全て仕事になっていく。時折、自分の肉片を切り売りしてる様な気分になって、ボロボロに刮こそげた自らの姿を想像し、

もう売るものが何もないんじゃないかと不安に襲われる。そうか、〃春を売る〃とはこんな気持ちか、とか勝手に納得したりして、でもこれってもしかして、資本主義の基本？

当初、絵を描いて金を貰うということとは、すごく嬉しいことだった。だって、考えてみてよ。絵なんか描いたところで、まったく誰にも顧みられないだろう世の中で、少なくとも金銭という形でしつかりした反応が返ってくるわけで。まったく反応がなくてもやり続

けられる人なんてそれこそ天才だろうけど、おれの様な凡人には無理なのだ。能力が交換されて通帳に刻まれた数字、それが食いもんなんかには化けて、おれを生きさせる。これこそ確固たるものだ、以前は満足してたのだ。でも不思議なことに、能力というものは、換金すると、肝心な何か：、字のごとく肝とか心みたいな何かが、スウツと消えてしまうのかもしれない。

以前、ハンドパワーで病気を治癒する人の

インタビューを見たことがある。お金と交換すると目的が不純になってパワーが鈍るとかなんとかで、例え謝礼と言われてもお金は絶対受け取らない、とか、そんなことを言っていた。絵を描く能力と超能力が、一緒かどうか解らない。お金が不純って考え方にも多少異存はあるけれど、何か最近ひしひしと、彼の言っていたことが解るのだ。

「平成二十一年 夏の絵画展 八月四日（火）」

く九日（日）午前九時～午後五時 ぱびよん
杉並第三展示室 企画・らいふこみゆにけー
しよん・ひやしんす／非営利団体・生きがい
サポート」

何だか場違いなダイレクトメールが投函さ
れていた。

「大変ご無沙汰しております。お元気で制作
されておりますでしょうか。是非お立ち寄り

下さい波富士夫」

：やけに達筆な直筆文字。宛先は「橋本浩孝様」つまり、おれ。だれ？これ。

バイトから帰って来た妻の夏子に聞いてみるが、全く思い当たらない。企画団体名をググって見ると、老人介護関係の似た様なサポート団体が山の様に出てくる、が、老人？の、知り合いは、いない、はず……。しかし、メッセージを見るに、おれが某かの制作

をしていることを既知の人、ということだろう。大学時代の恩師だなんだ、片っ端から思っ出してみても、皆目見当がつかず、寝つきの悪い日々を過ごし、大学時代の友人に電話をかけてみた。

「ああ、それぞれ！ おれんとも来たよ！ 実家に届いててさ、こないだ、かーちゃんが持って来てくれた。おれもさ、さっぱり解らんくてよ。誰だか解らないDMはしよっちゆう届くけど、何か妙に達筆だし、これ、

老人ホームとか、そんなんだろ？ 気になるよな。行ってみるか？」

こいつの名は国府田昌男。こくぶだ名刺にイラスト／マンガ／監督／CGクリエイター／アートディレクション／WEBデザイン／エロ話、と書いているマルチアーティスト芸術乞食の猛者もさだが、エロ話の収入は限りなく0に近い。いいのか悪いのか、三島とは違って、結婚しようとガキがいようと、学生時代のノリと寸分変わらずにつき合えている。気になる、即、行ってみる、

という行動原理もいっものながらシンプルで感心する。基本、考えるな、感じろ…というより、ただ単にイベント好きの暇人なのだ。

お互いフリーで仕事も枯渇気味、平日の昼間なら時間は腐るほど余ってる。とはいえ、夜型生活の弊害で、こういう公共施設の時間帯にはめっぽう弱く、午後三時に高円寺で待ち合わせた。

「でもよ、これ。おれと橋本ちゃんハシモツのところ
に届いてるってことは、やっぱ大学関係なん

じゃねえか？」

「いや、教授の名前とか、相当考えてみたけど、絶対いなかったよ。波、なんて」

「おれ、教授の名前、思い出せねえ。一人も。よう憶えてんな。橋本ちゃん」

ホープ軒で遅い昼飯。国府田はメタボを気にせず、というより、普段かみさんに厳しく制限されている欲求不満のはけ口か、背脂浮きまくったスープを最後の一滴まで満足げに飲み干しながらどうでも良さげに喋ってる。

「でもよ、さすがに、いつくら定年したからって、元美大の教授が老人ホームのカルチャーだか何だかで、展示ってえのはないわな。おれだったら、やだわ、その老後」

「ありうるよ。全然。だって金あるうが名誉あろうが、面倒見てくれる家族いなくて難儀したら、介護施設行きなわけだろ。そんでさ、昔とった杵柄きねづかで、老人仲間にや威張れるし、ボケ防止に手え動かせて、おばーちゃんらにもモテモテで、なんて結構悪くないんじゃないやな

い？　「画伯」なんて呼ばれちゃってさ」

「セックスもか!？」

「わはは！　「画伯」で引っ掛けて、やらせろって？　老人ホームバージョンの大久保清！」

「バックもか!？」

……。こいつとは、三島とは別の意味で、時々会話がかみ合ってるのかどうか、すっごく不安になる。

「でもよお、そんだったらいいよな。おれ

よりモテてるもんなん。おれ、デザイナーつつうのになつたら、もつとモテるもんだと、思つてたのによお」

「いつまで？」

「こないだまで！」

「……」

「モテてえよな」

……ま、実際のところ、世のデザイナーなんて、ほとんど国府田並かも解らんが、ここまです直に「モテたくてデザイナーになつた」

と言えるやつは、相当ないだろう、とか、微妙に感心してしまった。

公共施設の展示室はガランと真っ白い蛍光灯に照らされて、妙に眩しかった。そういえば、知り合い以外の美術の展示なんて、トンとご無沙汰していたかも…。

中央のベンチで数人の老人が腰掛け話し込んでいる。絵の方は、震える手を押さえつつ必至に一個描きました、みたいなトマト、の

鉛筆画もあれば、油彩や水彩でがっちり描き込んでいる気合いの一枚もあり、変にばらつきが目立つ。朝顔だの果物だの野菜だの、基本、夏っぽいモチーフってお題なのだろう。

「でもこういうの、みんな、きちんと描いてるよな。おれらの同級生なんて、今どきだけのやつが、まともに絵描いてんだろ？」

おれ達が在籍してた頃、美大の油絵学科の連中は、予備校時代に嫌というほど油絵を描かされた鬱憤からか、いざ入学すると全然

別のことをしたくなる、そんな輩が多かった。
で、何をするのかというと、げんだいびじゅ
つ。説明出来ないけど、とにかく、げんだ
いびじゅつをしてたのだ。おれ自身は、な
んだかんだ言って絵を描くという行為が好き
だったのだ、それでも平面画らしきものを描
いていたのだけれど、写真や立体やインスタ
レーションに走るやつはやたらに多く、皆ど
こかで聞きかじった様なコンセプトっちゅー
のを掲げてみたり、必死に虚勢を張っていた。

学生なりの粋がりで、まともに絵を描くなんてダサい奴、くらいの感覚があつたのだ。でも結局のところ、きちんと描かれた絵の方が見ていて面白かったりする。

「お、橋本ちゃん！これこれ、波富士夫！」
海辺の崖っぷち。白い帽子に全裸の女の後ろ姿の油彩画。タイトルは『あの夏の思ひ出』

「わははー、いかれてんじゃない！」

「やっぱ最終的にはオメコの思い出だね」

「全裸で帽子って、相当狂ってるよなー」

「エロ画伯のお・も・ひ・で！」

と、悪ふざけていたところ、

「あのう、いかなもんでしよう」の声に意表をつかれ、びびって振り向くと、快活そうな老人が真後ろに立っていた。

「あ、いえ、すいません…！ あ、いや、あの、この絵を、描かれた…？」

「ああ、ええ、お恥ずかしい。まだまだ未熟なものなので。精進しているところです」

「あ、どうも。あの、涼し気で、気持ちの良
い：絵、だと思ひます」

「美大の方ですか？」

：四十にしてまだ学生に見えるのか、と、
きもち落胆していると、国府田がいきなり小
指をたてて、

「このヒト、昔のオンナですか？」

：！何でこいつは、こう剥むき出しなのか、
と冷や汗かいたが、爺さんはひるみもせず、
「ええ、いやはやお恥はずかしい限りですが、

初めての女性です」

「やはり、オメコですか？」

「ええ、ええ、忘れられません」

「どんなお味でしたか？」

「初恋だったのでねえ、巧くは申せませんが、なんと申しますかな……。いつ、思い出しても胸の中がツーンと酸っぱくなるような……。狂おしい味とでも申しましょうか」

おれだけ、ついていけない状況で、両者は至極マジメに語りだした。

国府田は、ダイレクトメールを爺さんに見せ、「おいら、これ、貰ったんですけど、お爺さんのこと、全然憶えてないんですけど、どこかでお会いしました？」

すると爺さん、ハガキにぐぐツと目を寄せ「ああ、ああ、国府田先生！ いや、気がつかず失礼いたしました。私、以前先生方の美術展を拝見させて頂きました、波です。憶えてらっしゃらない？」

「美術展？」

「ええ、ええ、それは立派な。そう、大層立派なものが……」

「立派？」

「ええ、私のなど恥ずかしくなる様な、立派な男根……」

「あ、あれは、これ！このヒト！橋本ちゃん
のチンポコ！」

「わ！でかい声で、やめてよ！」

思ひだした。クツソ昔のこと。といって
も、いつだ？あれは。まだ大学出たばかりか

で、まだみんな、学生のノリ丸だしで、何か展示やろうよって国府田が言い出した。とは言つても、各々仕事の合間でろくなものも作れずに、パンチが弱いからって国府田が悪ノリして、一回やってみたかったチンコの型取りに挑戦しようって。もうかれこれ十五年程前：。

「ええ、ええ、憶えてますとも。橋本先生。お会い出来て光栄です。私にとっては非常に思い出深い：」

「チンコが？」国府田が聞くと

「ええ、これは話しが長くなるので…、あ、先生方、本日はお忙しいのでしょうか？もしお時間ございましたらこの後、私の仲間共々、一軒お立ち寄り頂けないでしょうか？」

おれらは顔を見合わせて、どうする？と目配せしたが、何か知らんけどこの爺さん、結構面白そうなので、ま、行ってみるか、ということに。

聞けば、『らいふこみゆにけーしょん・ひやしんす』というのは、老人ホームや在宅介護を運営している会社で『非営利団体・生きがいサポート』というのは、生涯教育などのカルチャー教室を運営、各種教室の先生等を派遣する外部の業者ということらしい。なので、メンバー全員が老人ホーム在住というわけでもなく、在宅介護を受けている独居老人なども、だいぶ混じっているとのこと。

「いや私はね、まだまだ旺盛で特に介護も必要ないから、好きでやってるだけなんですよ。基本的には、ボケ防止のリハビリが主目的なんで、派遣の先生はどちらかと言えば介護のプロの方でして。絵の方は各々自由にやらせて貰ってます。何人かは、だいぶ絵心もあるんでね。特に私ら在宅組は、家で自由に描ける時間も多いので、ちよつと差がつき過ぎてしまうのが、まあ、この展示会の毎度の課題点なんですがね」

波さんは今年で八十四歳になるというが、全くそうは見えない。携帯でレストランに電話して予約人数を増やしたり、展示施設の係員との連絡なんかも率先してやっていて、このグループのボス的存在とみえる。自分の親を考えると、七十代だがどう考えてもこんなバイタリテイはなく、老人というのは、こうまで差のつくものなのか。

この食事会には比較的元気な人だけ参加しているとのことで、波さん以外に派遣の先生、

爺さん二人、婆さん二人、という構成だった。
「さっきの話ですがね、先生方の作られた、
あの立派な男根……」

するとすかさず、おれの隣のお婆ちゃん、
「やだよ、波さん、また、そっちの話しかい、
ほんと、エッチなんだよ、この爺さんは！」
と言いながら、やたら嬉しそうに、おれの顔を
覗き込んだ。

「なんだい、芽衣ちゃんもそのくちだろうに。
そうやって、いつだって私の側に座っちゃっ

て。こそばゆくてしょうがないって、顔に書いてあるよ」と、セクシーにいう波さんの指先の、きやつきやとはしゃぐ芽衣ちゃんの顔には、皺しか見えない。この皺のどこかに、そのような文字が紛れてる、のかもしれない。「いやね、私が先生方の作品に出会ったのは、ちようと退職した七十歳の頃ですよ。私もまったく融通の利かない仕事一筋の人生でして、女房子供のために一心不乱に働いてきたっちゅうわけですよ。定年を過ぎて

も、じっとしておるなんて想像も出来んかったものですから、七十まで力いっぱい働かせて頂きました。有り難いことです。ですがね、さすが流石に七十を超えて、まだ会社の世話になるわけにもいかん。意気揚々と、第二の人生を始めようと、意気込みだけは誰にも負けんかったのですが、かといって何をして過ごして良いのやら…、いや、未熟なものだったのですね、なかなか苦悩の日々だったのですよ」

何の話しが始まつてるのか、よく解らない

まま相づちを打ちつつ、他の面子を観察して
いると、芽衣ちゃんの隣には、今日どうやつ
てここまでやってこれたのか不思議なくらい、
一番あっちの世界に片足つつこんじゃってそ
うな爺さんが、ホタルイカの沖づけを口から
ボトボトこぼしていた。

「その点、女房の方は、いろいろ日々の生活
を楽しむ術に長けとりまして……」

波さんの隣では、目のうつろな老人が十分
以上も同じスルメをクチュクチュしゃぶりな

がら、不穩な目つきでこちらを睨んでいた。が、波さんはそんなこと気づきもせず^まに捲し立てている。

「そんな女房が、私を氣の毒に思つたのか、一度も贅沢をしてこなかったから一度くらい銀ブラ^ッってもんをしてみたい、と、誘つて来たわけです。銀ブラですよ、銀ブラ。しかしあんた、銀ブラってえのは、何が楽しいのか、皆目検討つきませんな。無目的にブラブラせいつて言われましても。女房の方は、

お香屋だのあんぱん屋だの、何が楽しいのやら、忙しくてたまらない様子でしたが、私なんぞには、見るものなんて何もないのですよ」

派遣の先生は、ホタルイカのじじいの粗相の始末に必至で、食事を楽しむ余裕なぞまったくない様子。彼女にとってはこの席も、厄介な仕事のひとつなのだろう。

「それであんた、いや、先生。女房の買い物待ちのあいだ、手持ち無沙汰で外でブラブラ

していたところ、目の前の画廊がふと気になって、立ち寄ってみたのですが、そこでですよ！先生方の作品が、ガンと目に飛び込んで来たってわけです」

「あれ、銀座だったっけか？」

国府田は、おそろしく記憶力が悪い。大学時代にこいつと二人でやった楽しいあれこれの話をしようとしても、いつも愕然とするくらい憶えていない。

「お恥ずかしい話なのですが、私はあまり

に生真面目な仕事人間だったものですから、
その、なんというか、夜のいとなみ、という
ものも、もう十数年ご無沙汰だったもので
……」

「はあ……？」

この爺さん……、いったい何の話をしよう
としてるのか……？

「いやその、それと、ひとりでやる、そっち
の方でさえ、すっかりご無沙汰していたもの
ですから……」

：なんとなく思い出して来た。同級生しか
やってこないあのくだらなすぎる展示。あま
りに暇すぎて、物好きの通行人がうっかり立
ち寄る度に、寄ってたかつて餌食にして…。

「その、それですっかり忘れていた、欲情の
波の様なものが押し寄せて参りました、意を
決して国府田先生にお伺いしたんです。この
作品は、どういう意図で制作されたのか…」
「フーミン!!」

唐突に、国府田が意味不明なことを叫んだ

のでギョツとすると、波さんが、

「そう。ふみえさん。私の永遠のマドンナ。
青春の女神……」

——波さんは、絵を描くのが好きな少年
だった。子供の頃は、将来は画家か宮大工に
なりたいたいと思っていたが、青春時代は太平洋
戦争のまった中、そんな悠長な夢が叶うわ
けもなく、招集され戦地に向かったそうだ。
出兵する十七歳の頃、波さんには将来を固く
誓い合った恋人ふみえさんがおり、戻って来

たら結婚しようと最後の逢瀬で固い契りを結んだものの、南方で捕虜になった波さんが復員したのは、それから五年も後の昭和二十二年のこと。ふみえさんは、空襲で既に亡き人となっており、波さんは、失意の底に打ちのめされる。その後、数年の後に見合いで結婚し、ふみえさんのことは心の奥底にひっそりとしまい込み、家族のため一途に働き、精一杯生きてきた、ということだ。

「その時、国府田先生の『ふみえちゃんを

想つて作ったのよごととのお言葉は、まるで神かみ言ことの様に私の心に響きました。雷に打たれた様に全身硬直いたしました、忘れていた狂おしい想いが体中を駆け巡り、そうだ、私の余生は彼女のために尽くすのだ、と。もちろん、女房への気持ちは変わりません。ただ、瞼の裏に焼き付いたふみえさんの面影が、全く私の記憶から消えてしまふ前に、その繊細で美しい、か細い糸を手繰る様に、彼女の姿を刻んで行きたいと、強く心に誓ったわけです」

……実は。チンコの型取り、というのは超
難しい。腕や顔ならともかくも、こんな形状
不安定なものを、外型となるコピックという
液体が固まるまで二十分間も、勃起したまま
固定しなければならぬからだ。しかも、コ
ピックはひやつこい。あんなひやつこいもん
につけて、いろいろかき混ぜたりして手間
取っていたら、どんなにスケベな想像しよう
と、みる間もなくふにゃちんになってしまふ。
当初、国府田は一人で挑戦しようと試みたが、

こりや無理だ、とあきらめて、おれのでやらせろと言つて来た。で、型取り材料と一緒に持つて来たのが、大量のエロビデオとグラビア雑誌。いろいろ試してみたが、ビデオだと操作に気を取られてうまくいかない。そこで、やっと成功したのが、当時、グラビア雑誌で人気の細川ふみえ、だったわけ……。

波さんの話を聞いているうちに、やっとそんなアホらしい些細なことを思い出してきたのだけれど。しかし、国府田、恐るべし。

肝心なことは全て綺麗に忘れていくせに、
なんで『ブーミング』で型取った、なんて、そ
んなしょうもないデイトールだけ、くつき
り憶えているのだから。

「それからというもの、私は彼女の絵を描き
続けて、今に至つとるわけですよ。先生方に
はいくら感謝してもしたりない、私の生涯の
最終章を、彼女の輝く様な面影で飾ってくれ
たのです。先生方のおかげです。あの時持ち
帰った美術展の案内状は、大事に額に入れて

飾つとるのですが、先日、片付けの合間にふと額縁を外すと、なんと裏に先生方の住所が記してありました。矢も盾もたまらず、案内状をお送りした次第です。いや、本当にいらしてくれろとは！ワタシ、今、心の底から感激しております！」

「いえいえ、どういたしまして。お役にたてて光栄です」

国府田は「フーミン」のいきさつ等おかまいなしに、しれっと答えている。

「下らんですな！」

いきなり、ずっと寸黙っていた波さんの隣、目、うつろのスルメしゃぶり老人が横やりを入れてきた。

「また、始まった。こらっ、二代目、黙ったらんかい！ 先生、いや、失礼しました。こいつの事は放っておいて下され」

芽衣ちゃんも「そうよー！ まったくこの爺さん、野暮なんだから。浪漫ちっくな話じゃないっ！」

「二代目？」

「そう、二代目。こいつのニツクネーム……」
と、波さんが言うのを遮^{やぶ}って、

「わしゃっ！ 二代目じゃいっ！ おまーらみた
いな、どこの、馬の骨とも解らん、乞食ども
とはっ！ 根本からっ！ 違うん、じゃいっ！
こういう芸術家ぶった、生意気な小僧が、わ
しは一番っ！ 気に喰わんの、じゃいっ！ と、
とつとと、わ、わしの家から、出てっくれん
かの！」

「ボケとるのよ。この爺さん。適当に聞き流してね」

「何がボケとるもんかい、このエロっ、ばばあ！いい、淫売！」

「まー、まー、ま、ま、まっ！いい、いんばゝっば、ばばっ！」

「ま、ま、ま、ま、ケンカはやめて仲良くしましよっ！ね。二代目さんの一代目さんは、何の一代目さんなんですか？」と、国府田がラブリーに尋ねると、

「芸術家、じゃいっ！　うちは三代っ！　芸術家、じゃいっ！　み、見くびるなよっ！　小僧っ！　本物の、本物の、芸術家っ、じゃいっ！」

「いつもの発作みたいなもんでね、普段はおとなしいんだが、時々興奮すると、こうなっちゃうんだよ。申しわけない。適当にあしらってつかあつしゃい」波さんが言うのと、派遣の先生も「はい、佐原さーん、落ち着いて下さいねー、大丈夫ですかー？」と、慣れ

た様子。

「芸術家、た、たるもんはなー、こ、こんな鄙^{ひな}びた、レ、レストランで、食事はせんっ！ほ、本物は、ハ、ハイヤーで、ホ、ホテルで、い、一流な、スターと……」

「一流なスター？」

「お、お、扇千景、ア、アラン・ドロン、お、大乃国……」

微妙に昭和なセレクション……。

と、みるみる爺さんテンション落ちて、フ

ウツと大きなため息をついたかと思うと、がくつと俯きおとなしくなった。波さんは、やれやれ、といった感じで、

「二代目はねえ、私がこの会に誘ったもんだから、責任感じておるんですが、本当は気の優しい人なんですわ。老人会で知り合いましたね、絵の話しになると、やたら乗ってくるもんだから、じゃあ一緒にやろうって。でも、この人、人の描くもんにはやたら口出しするのに、自分じゃまったく描かなくてね……」

「ほんつと、五月蠅うるさいたらありやしない！
もうろくじじい
耄碌爺ぼろくじいが！ 今回だつて、結局未提出なの
よ！ 波さん優しいんだから。こんな爺さん、
ほつときやいいのよ！」と、芽衣ちゃん。

すると、一番はじの席に座つてた小じんま
りしたお婆ちゃんが、

「でもねえ、訪問介護の、ほら、何てつたっ
け？ 梅原さん？ 仰つてたわよお。佐原さん
のお宅、昔、有名な画家の大家たいかの先生が本当
に住んでいらつしたつて」

「確かにね、二代目のところ、立派なお宅だよ。でも、あんな広いお屋敷に一人じゃ寂しいだろうに。私なんぞ、ずっと貸家ですからね。女房に先立たれて寂しいけれども、まあ、絵も存分に描けるし、もともとが一人で住むのにちょうど良いくらいの間取りだったもんでね」

「タイカだかスイカだか知らないけど、この爺さんが偉いわけじゃないじゃないっ！昨日だって、みんなでせつせと準備してるのに、

何もしないでケチつけてまわつてさ。もう、来てもらわない方がいいのよ。ね、波さん」
「そういや！ 橋本先生、あんたんとこの近くだよ。二代目んちは。いや、案内状書いて気がついたんですがね、私も荻窪の南の方で、わりと近いんだが、先生のお宅、最寄りの駅はどちらで？」

「え？ あ、そーなんですか？ おれんちは、南阿佐ヶ谷と浜田山の中間くらいで、どっちの駅からも、だいぶ遠いんですけど」

おれは、引つ越す金もないまま、かれこれ二十年近くも2Kのボロアパート住まいに甘んじている。そんなだから、今回の波さんの案内状も無事届いたわけだけど。

「二代目んちは、浜田山ですよ。きつと近いですよ。先生のところからなら、おそらく徒歩圏内ですわ。これも何かの縁ですから、今度一緒におしかけましょうや」

「え…、でも。いいんですか？ だって…」

「なに、こいつのことなら、私に任せておい

て下されば、問題ないのでね。何だかんだ言つて寂しいだけなんですよ。こいつは。うん！これはいい！良かったら、国府田先生も是非！」

「あ、どーもどーも。行きます行きます。決まったら、教えて下さい」

何だか、よく解らない展開になつてしまつたが、うやむやの内に了承させられ、とりあえず今日はお開き、ということで、老人たちはそれぞれの自宅へと歸つて行つた。

第2章

お
お
や

し
ゆ
ろ
太谷石と棕櫚の家

めっぼうやる気がない。こういうと、何か悩んでいるみたいだけど、そんなんでもないのだ。とにかく、いろんなこと、特に仕事にまつわるあれこれが、バカバカしくて、まったくやる気がでないのだ。普通のサラリーマンだったら、そんなことを思いつつも、朝早

く満員電車で出勤して、つまらん同僚のギャグにのつてみせたり、誰かの尻拭い、とかそんな悲しい仕事いっぱいこなして、取引先にペコペコして、つきあいでもずい酒呑んで、そんな生活が続けるのだろう、とか考えると、そりゃ、ノイローゼだの鬱だの、そんなことにもなるだろうよ、おれの場合、嫌なら嫌で、世捨て人気分を朝から晩まで楽しめるんだから、だいぶお得だなあ、などと思う。いや、世捨て人、という程の厭世観えんせいもない。別

に「世」が嫌いなわけじゃないんだが。

大学を出て、デザイン事務所で七年勤務。

独立してフリーになつて、今年で十年目になる。社員がおれと数人だけの弱小デザイン事務所だったから、コネとかパイプとか、そんなものは一切なく、友人のツテでCDジャケットをデザインしたり、好きな雑誌の編集部に電話して、手当り次第にイラストや文を持ち込んだ。結婚したのもその頃で、そんな行き当たりばつたりの生活も結構楽しく、そんな

風に一生乗り切れるかな、と思っていた。

問題は、不況のせいか、いや、おれの怠惰のせいなのか。どっちが先だか解らない。確かに不況で仕事は少なくなっただけ、おれはその状況を、半分喜んでゐる節さえある。今までは、とりあえず仕事もあつたから、それをこなすことでそれなりの満足はしていたのだ。が、しかし、まったく仕事がなくなってみると、さてどうしたものか、何もしない自分がいいた。そして、不思議なことに、この事

態はおれだけに起こっているわけではないらしい。会社を辞めたり、仕事がなくなつた友人と会つてみると何人か似た様なやつがいて、解っちゃいるんだけどね、と皆同じノリで、一向に何もしないのだ。

それで、おれは都合良く考えた。たぶん、今、世の中全体がビートルズ解散数年後のジョン・レノン気分なんだ。ジョン・レノンは、タラタラとハウスワイフをやる数年分、いや、死ななきゃ数十年分？もつとか？と

もかく、何もしないでいいだけの貯金があつた。おれの場合、貯金とも言い難いが、百万そこらの金がある。だから、この金を使い切るまでの数カ月分は、タラタラ過ごして良いのだと、神が言っているんだと――。

やっと言葉を憶えたか、くらいの赤子が走り回ってひっくり返したウーロン茶、を拭いていたら手当たり次第に近くにあつた数珠だの箸だのを投げ散らかしたので、取り上げる、

と、小さいながらもごつつい頭突きを喰らわされ、けっこうイタイ。法事の席ではよくある光景だけど、…これだからガキは苦手だ。

「よう！ どうよ？ 仕事の方は！」

二、三度しか会ったことないわりには、やけにフレンドリーな妻の従兄弟が、やんちゃな息子をそっちのけで話しかけて来た。

「あー、全然ないです。何もないです」

「シケたこと言ってるなあ！ 浩孝君は、CGやってんだっけ？ ｸﾞﾘｯｸマｸﾞ ってあん

じゃん。今、流行ってんの！知ってる？
あーゆーのでさ、携帯の端末でダウンロード
して、アラームセットすると、オハヨウ！
とか、オナカスイタ！とか言って、癒して
くれるやつ、プロジェクト進めてるんだけど、
どお？出来んじゃない？そういうの。がつ
つり癒してくれるやつ、作ってよ！」

弱小広告代理店勤務のヤスシ。悪いやつで
はないのだが…。

「クリエイターやってんだったら、こうい

うでかいプロジェクトでガツンと一発あて
ちゃってさ、夏ちゃんも左うちわっ！なん
ちやってナ！どう？喜ばしてやんなよ！」
「ヤツちゃん、いいよ。うちは何とかやって
るからさ」

この、まっこうから噛み合ない空気にいた
たまれなくなつた夏子が、口を挟んでくれた。
おれの妻です。

「かりっ！まったく欲がないね、アーチ
ストってのは！夏ちゃんは、どうなのよ。

最近」

「どうってこともないけど……」

すると、夏子の母がバッグから何やらガサゴソ出して、

「これねえ、夏子が作ったんだけどねえ」

「やめてよ！ お母さん！ 何でこんなの持つて来てんの!？」

義母が出したのは、昨年夏子が姪っ子のために作ってあげた絵本で……

「おお!! イケるんじゃないのお? 夏ちや

ん！小さい頃から才能あったからねえ！勿体ないよ、趣味でやってちゃ！そういうことなら、ひとつ、夏ちゃん先生に発注させて頂くか!？」

夏子は必死の形相で絵本を奪い取り、「お母さんにあげたわけじゃないんだから、持ち歩かないでよ！こんなの趣味なんだから！人様に見せるもんじゃないんだから！」夏子はおれより五つ年下の三十五歳。同じデザイン事務所で出会って、つきあって、結

婚した。今は、カフェでバイトをしている。

「夏子はもつと才能あると思ったんだがなあ」

言ってる内容とは裏腹に、義父は機嫌良さげにビールを煽った。

「そうよねー、小さい頃から絵が好きでねえ、ほら、クリスマスなんか、みんなに手作りのカード作ったりしてねえ」

夏子の両親は団塊世代。自由な気風で夏子を育てて来た。将来は芸術家目指しなさい、

なんて、うちの田舎の親だったらありえない
お話しだよ、羨ましい、などとボケツと考
えて油断してたら：

「で、浩孝君はどうなんだい？ さつき、仕
事がない、とか言っていたが：

いきなり矛先が飛んで来た！

「あ、何とか今のところ大丈夫です。不況な
んで、去年のようにはいかないですけど」

「君はちよつと奥手なところがあるから、
もつと頑張つて営業に行くとか、もう少し努

力しないとダメなんじゃないか？ ヤスシが
いい仕事の話し、持つてるんだったら、進ん
で紹介して貰えばいいじゃないか」

……やれ芸術家だなんだ囃し立て、娘は育
ててみたものの、そうそう喰えるわけないわ
けで。収入の安定したサラリーマンと結婚し
てハイ、ゴールって目論んでたんだろうけど、
世の娘さんは、たいてい辻褃のあわない亭主
を選んで連れてやってくるんだよ。困ったこ
とに……。

「浩ちゃんは、しっかりやってくれてんだから、余計な口出ししないですよ」

夏子が弱いフォローを入れる。

「でもねえ、国民年金なんでしょう？ 老後のこと考えたら、厚生年金じゃないときついんじゃない？」

「心配してくれて、どーも！ でも、厚生年金だつてろくに貰えないんじゃないの？ 私たちの頃には」

「そう思うのなら、しっかり貯金してやって

いかないとな。お父さんたちだつてそんなに
長生き出来ないんだから安心させてくれよ」
「やっぱりお母さんね、就職した方がいいん
じゃないかと思うんだけど…。ね、どうかし
ら？ 浩孝さん」

「あ、はい。考えておきます…」

「ごめんねー。またお父さんたち、あんなこと
言つて」

帰りの電車で、夏子がすまなそうに言つたの

で「ああ、でも、そりや言うよ。不安だと思うよ。うん」人ごとの様におれが言うと、夏子はちよつと不満そうだった。おれの方が劣勢なので加担してくれてるけど、親御さんの言うことも最もで、半分は夏子の気持ちに代弁してくれているのかもしれない。

夏子は、ハードな残業続きで体を壊し三年前に退社した。以降、ゆるくバイトを続けて今に至るが、心のどこかじゃこのまま楽ラクしてえっ！と思ってるだろう。そりや解る。

おれだっと思うから。それに、微妙なお年頃だ。三十代半ばの女性達は、三日に一回くらいは、〃出産〃の二文字と、打ち合わせ、というか、相談、みたいなこととして生きている、と思う。たぶん。

「こないだ、曾我ちゃんと桃ちゃんに会ってさあ」

「あ、曾我ちゃん元気だった？」

「うんにゃ。死にきってた。曾我ちゃんなんて映像学科出てんのに、結局ウェブの動画シ

コシコ作ってるだけで、すっごい低賃金」

「ウェブ、多いよなー。夏子のまわりって」

「そう。みんな、たっかい学費払って美大なんか出ても、結局せつこいウェブ仕事でちまちま小銭かき集めてさあ。何だか悲しいよねえ」

「桃ちゃんは？」

「：微妙」

「何が？」

「だんなさん、写真で賞とったとか何とか。

それはいいんだけど、なんか自分の手柄みた
いにとくにとくと写真論語り始めちゃってさ、
曾我ちゃんとひきまくってただけど」

「あの子ねー。最初っから、自分で何かやる
タイプじゃないもんなー」

「そんで、だんなさんのホームページ見たら、
端の方に、桃子の部屋〴〵みたいなのがあつて
〴〵今日はカプチーノでクマさんに挑戦！〴〵と
か〴〵ビエエン失敗しちゃった、絵文字〴〵みた
いなこと、適当なイラストとともに書いてた

りしてて、…ゲンナリした」

「有望な夫の傍ら趣味で自己表現、くらいが一番オイシイツて女の子、実は多いんじゃない？ 美大にそういう学科でも作りやいいんだよ」

「サポート妻学科!？」

「そうそう！ 程良く出しゃばらない作画実習とか、かわいいブログの書き方とか！ 講師、誰呼ぶ？」

「そうねえ。黒田知永子あたりのカリスマ主

婦系？でも、夫より目立っちゃダメなのか」
「経理と電話応対と…、それから、将来有望な男子学生の見極め方と、攻略法も教えないとな」

「…でもさあ。家政科の学校とか、美大も、昔は嫁入り修業みたいなもんだっただよね。女の子にとっちゃ。結局、今でも変わらなくてことなのかね。私もこの体たらくだもん。人のこと、言えないよなあ…」

…。意地悪なことを言ってる時に、いち

いち自分のことなんか、省みなけりやいいのに、と、夏子と話していると、いつも思う。

「でもね、いんしよく飲食の仕事してるとき、これも表現なのよね。というより、こっちの方が表現なんじゃないかって思ったりするのよ。だって、デザインやってた時なんて、喜ぶ顔ってたつて、クライアントくらいで、実際に商品使う人とか、そうそう見れないじゃない。でもさ、カフェだと、珈琲飲んで至福の一時過ごしてる人だとか、久しぶりの再会に盛り

上がってる人だとか、もろに反応が見れるから、嬉しいんだよね。なんか。すごく」

まあ、確かに。雑誌で文章書こうがイラスト描こうが、頑張ったところで、一般読者の反応なんて滅多にお目にはかけられるものではない。そんなことを繰り返していると、こんな仕事、意味あるのか？なんて疑問に誰しも一度はぶちあたるのではないか。おれ自身、五里霧中ごりむちゅうな気分になることはしょっちゅうだった。

「確かにちよつと羨ましいよなあ。そのライブ感」

「だよー！この『直接』感、爽快だよ。そりゃ嫌な客もいるけど、充実感考えれば、総じて楽しいね！」

……夏子にしてみりゃ、必死の自己肯定なのかもしれない。確かに、羨ましいには羨ましいのだが、何か腑に落ちないものがあり……
「でもさ、カフェも表現とかいうと、もうきりなくない？昔の喫茶店店主が、いちいち

そんなことを考えてたか？」

「そりゃ、まあ……。最近多いもんね、そういうノリ……。でもさ、芸術ばかりが表現っていうのも何か変だな、と思つて」

「……あのさあ。芸術にしてもだよ、そもそも大学入る前って、表現したいなんて考えた？」

「……？　そーいや考えてなかった？　かな」

……やっぱり、ね。おれもそう。ものを作ったりするのはガキの頃から好きで、でもそ

れはどこか、手を動かしてれば満足出来る、手慰み程度のことだった。けれどたぶん、いろんなものを作っていくうちに、少しづつ自分の気持ちを出来上がるものに託していて、いつの間にかそれは「表現をしたい」って欲求に、変質していったのかもしれない。

どんな職業であろうとも、そんな気持ちに捉われたりはするのかも……。そう思って街ゆく人の顔を仰いでみると、日曜日の浜田山駅前には、むやみに賑わっていた。

おれがこの街にやってきた二十数年前、まだまだここは小さい沿線の長閑な駅舎のどかといった風情だったけど、最近でっかいマンションが出来たりして、いつの間にか人口が増えたのか、街の様相もだいぶ変わって来た。

おれと同じ自営業者である商店街のおっちゃんたちは、ライブな充実感なんて味わえているのだろうか。いつの間にかキャパを超えてしまったおらが街への対応に、てんてこまいになりながら、リアルなんて感じる間も

なく日々がうつろに過ぎて行く――、そんなところじゃないだろうか。一見華やいでいるだけに、逆に寂しくも感じるのだ。

そんな想いに耽^{ふけ}っていたら、未登録の電話番号から着信があり、訝しがって出てみると、「もしもし！波です！橋本先生！先日は誠にありがとうございました！」

電話、三十センチ離しても聞こえる位の元気な声……。本当に連絡くれるとは律儀な人だ。来週あたり、ご都合いかが？ということ

で、国府田と夏子も連れ立って、例の〃二代目〃のお宅に遊びに行くことにした。

「今日、うちのカアチャン、上の子の学校の交流会でさ、こいつの子守りしてろって言われちゃってさ。いいよな？」

「いいんでない？ ガキンちよいた方が和むよ、きつと」

「まーくん、久しぶり！ いくつんなった？」
夏子が聞くと、昌弘はきもち人見知りしながら

らも、おずおずと小さな指を四つ並べて見せてみた。

おれんちから歩いて十分弱。波さんの言う通り、二代目のうちはびっくりする程近かった。建て売りばかりの閑静な住宅街の奥にひっそりと、そこだけ取り残されたかのように庭の木が鬱蒼うつそうと茂った一軒家。古びた表札に「佐原茂吉」。昔よく見かけた大谷石おおやの塀は、すかすかに酸化、小歩危こぼけてて、見るにしのびない。立派な門構えだけど黒いスチール製の

門は錆び、石段の隙間からは雑草が生い茂っている。玄関脇には、枯れて縮んだ棕櫚の木が三本へたっていた。

「昔は立派な家構えだったんだろうねえ」
夏子がそう言つて、足場の悪い石段の前でひょいっと昌弘を持ち上げた。

「こんにちはー。橋本でーす」

懐かしい感じのガラスの引き戸。向こうから「ハイハイハイ、今参ります」ドタドタ足音が近づいて来て、波さんがガラッと戸を開

けた。今日はアロハシャツが眩しい。

「イヤイヤイヤ、これはこれは。お美しい奥様とお坊ちやまもご一緒で！」と、調子の良いトーク。それを遮る様に「新聞ならいらん！」テンション高いバージンの二代目が、後ろの長い廊下からドタドタ現れ、あー、ご機嫌ナナメなところに来てしまった、ついてない、と思いきや、いきなり二代目は廊下の途中で立ち止まり、というか、立ち竦み、あのうつろな目を丸々と見開き、こちらを凝視^{ぎょうし}。

「弥生!? 弥生か!」

こちらがわ、波さん含め、全員「?」マークでいっぱいになっていると、どうやら二代目が凝視しているのは夏子の様で、あ、何か間違ってる、ってことに、すぐにみんな気がついた。逆光だから? と思ったのだけど、二代目はわなわなと近づいて、至近距離から夏子を確認。夏子が「あ、いえ、私……」と言いかけるも、もう一度たたみ掛ける様に「弥生いいー!!」と叫んだものだから、こ

うなると、もうしょうがない。夏子は今日一日、〃弥生〃になるしかなくなった。続いて、昌弘を見て「孫：か!? 名は、名はなんと?。」と言ったので、国府田「あ、その子、うちの子です。名前は昌弘です」と言ったが、二代目、「そうかあ、昌弘かあ。いゝい名前じゃあ、お祖父ちゃんじゃよ」と、顔を近づけ鼻^{はなむ}咽せぶ。慣れない老人の匂いに、昌弘がウオンウオンしゃくり上げ、それを合図に、ま、ここじゃなんだから、ということで、

やつと家にあがらせてもらつた。

波さんは、慣れた様子で冷蔵庫から麦茶を出し、国府田が慌てて手伝つただけど、夏子は二代目に捕まっている。

「すまなんだ！ わしが悪かつた！」

仰々しく土下座。深々と頭を下げられて、夏子、昌弘を抱きながら、めちやくちや困つてゐる。救いの目でおれを見るので

「あの、失礼ですが、この人、僕の妻で、夏子、といいます。弥生さんとは別の者、な

のですけど」

すると、二代目、畳すれすれにつけていた頭を少し上げ、右目でこちらを凝視、というより、あきらかにおれを睨んで、ちよつと嫌な間が数十秒流れたが、何かにでつかく踏ん切りをつけたのか、ぐンツと向き直り「あんたにも申しわけないことをした！ わしも男らしく頭を下げる！」また深々と土下座した。あー、もう何だか解らんけど、とにかく別人だということとは理解してもらえないらしい。

波さんが、ちゃぶ台に麦茶を並べながら、
「ま、ほっときやいいですわ。そのうち、またトンと忘れるでしょう」

「有り難や：っ。こ、こんな愛らしい孫を連れ：、弥生が、帰って来てっ、ぐ、ぐれ：」
二代目は、涙鼻水グシユグシユさせて「ちよいと、抱かせてくれんかの？」嫌がる昌弘をおもむろに抱き寄せ、感泣。かんきゅう昌弘は、号泣。ごうきゅう
「あの一、弥生さんとはどんなことでケンカしちゃったんですか？」

国府田、もうこの際、事実関係の是正は諦めて、事情聴取を試みた。

「全てっ！ワタシの不徳の致すところっ！」

声高に叫んだかと思うと、おれの肩に手を置いて、「あんたな、今までよう弥生を守って来てくれた。見れば、だいぶ心も入れ替えて、立派な日本男児になっておる。わしには解る！あんたもよう頑張った！」

「おれが思うに、弥生さんってのは娘さんで、なんか気に喰わん外人と駆け落ちとかしたん

でない？」

国府田が得意げに推理したので、

「外人が、心入れ替えたくらいで、立派な日本男児にはならんだろうよ」と、おれが言う
と、「いや、何事も心次第！ あんたもよう頑
張った！」

：馬鹿げた推理もあながち間違ってもいな
いらしい。

すると波さんが、思い出したかの様に、
「二代目、あんた、息子さんも芸術家じゃ、

言うたらんかったかい？」

「うちはっ！だ、代々芸術家！じゃいつ！
せ、先代は、と、徳川御用達！立派な金屏
風を描いておった！わ、わしは、あとを継
ぐのが嫌で放浪の画家になつたんじやが、旅
先で出会ったんじや。絶世の美女、ボ、ボ
ニー……。阿婆擦れじゃった、か、体が弱く、
肺結核になつての。ち、乳^{ちのみ}飲み子残して逝つ
てもうた……」

時空：飛びまくつてて、誰もツツコミ様の

ない話しが延々と続くのだが、結構おもしろいので黙って聞いてみる。

「お、男手ひとつで、り、立派な芸術家に育てようと…、ミ、ミケランジェロに弟子入りさせてな、む、村上隆の兄弟子にあたり、画塾で一番の出来じゃった。わしは、じゅ、塾代を工面してやろうと、進駐軍で、ア、アルタミラの壁画なぞ描いておった、のじゃが…、ある時、耳を切りおつて…。て、天才の悩みは、孤独なん、じゃいっ！ お、おまえさん

らに、わ、解るまい!!……た、たまきの面影を残した……! 夭逝ようせいの美少年じゃった……!」
「ありやりや、死んじまったよ。弥生さんは? どこに出てくんの?」と、国府田が素朴な疑問を投げかけると、二代目、ぶるぶる興奮して、「や、弥生なんて知らん!」夏子を振り返ると同時に、「今更のこのこ帰ってきおって! この阿婆擦れがっ! 出て行かんかいつ! 今すぐ! この家からっ! 出てってくれんかのっ!」と絶叫。自分のことでは

ないにせよ、面と向かってものすごい形相で罵倒されたものだから、夏子は半泣きになり、「もうやだ……。帰ろうよ。浩ちゃん……」

すると、前回と同じパターン。ウルトラマンのカラータイマーが点滅し始めたかのようにしゆるしゆるつと電池がきれて、二代目は大きなため息と共にちゃぶ台に突っ伏した。

「奥さん、すいません。申しわけない！この頃まったくボケが酷くなつて来てしもうて。奥さん見て、娘さんのことを思い出したかと

思つて、これはいいと、つい甘えさせて頂いたのですが、ご不快な思いをさせてしもうて、本当に、この通り！勘弁して下さい！」

波さんは、平謝りに謝った。

泣き止んだ昌弘が「おなか空いたよ」と言つたので、あ、そうだ。手みやげ持つて来たんだ、みたらし団子、みんなで食べましょ、と、とりあえず一息つく。古い柱時計がポーンポーンと三回なつて、気がつけば午後三時。ちゃぶ台で、三時のおやつに団子、

なんて、何だか懐かしいなあ、なんて思ってたなら、「こんにちは」。佐原さーん。梅原です。」の声。

「あ、訪問介護の梅原さん」と言つて、波さんが慌てて立った。

「あらら、珍しい。皆さんお揃いで。佐原さん、お友達いらつしやらないから、いつも一人でぶつぶつ言つてんだけど。今日はいいわねえ、佐原さん、賑やかで」

梅原さんは五十代くらいの元気なおばちゃ

んで、せわせわ割烹着を着たかと思うとテキパキ掃除をしはじめた。「あ、何か手伝いましょうか？」おれが言うのと、「いやいや、仕事なんです。大丈夫！申しわけないけど、この部屋からやつちやうんで、ちよつと別のお部屋に移動ししてもらえます？」

おれらが団子抱えてとなりの応接間に移動すると、梅原さんはハタキをかけながら、「佐原さんのお宅、広いんで、結構時間かかるのよ。こんな広いお屋敷にお一人で。勿体

ないわよね」

「おれんとこなんか、2DKに家族四人な
んで羨ましいですよ」国府田が言うと、

「私たちが若い頃なんてね、こういうお一人
住まいのご老人が、学生さんなんかの下宿さ
せてね。けっこうそんなの多かったのよ。若
い人いた方が防犯にもなるしね。でも今は、
知らない人住ませるなんて、抵抗あるん
でしようねえ」

「このあたりの老人なんぞは、了見の狭い輩

が多くての。なに、ほんのちよつと前まで、こんなところぜーんぶ畑でしたよ。地主でもないくせに、ちいとばかり土地持ったからつて、いつ狙われるんじゃないかって、疑心暗鬼の固まりの様なやつらばかりですわい。情けない！」

「：これ、娘さんかなあ」

ピアノの上のフォトフレームを手にとって夏子が言った。写真には、七歳くらいの女の子の後ろで背広姿の真面目そうなお父さん。

女の子の両肩にそつと手を置いている。背景には、立派な門構え……。

「これ、二代目じゃない？ この家の門だよ。ほら、棕櫚の木が三本、まだ枯れてない……」おれが言くと、「あー、それ、娘さんね。今、外国いらつしやるそうよ」言うなり梅原さん、掃除機をガーガーかけ始めた。すると、唸る掃除機の音にかき消されてよく聞こえないが、二代目がぶつぶつ何かを言っていて、耳を近づけると、「弥生は、行つてしもうた……。あ

の子には何もしてやれんかった……」

「弥生さんとはあ、喧嘩なさったんですかあ！」掃除機音に負けない様、大声でおれが言うと、「……わしゃもう、誰も嫌いになりたくない……。だから、誰も好きにゃならん……」

……？

すると、掃除機音がいきなり止んで、

「佐原金造さんってご存知？ 佐原さんのお父様」と梅原さん。

「佐原金造!？」おれと夏子と国府田は同時に

声を上げた。

一般的知名度は低いだろうけど教科書なんかにも出てくる洋画家で、美大行ってた様なやつらなら、一応名前は知っている。

「今から掃除しに行くけど、こっちにね、お父様が使ってたらしやったアトリエあるのよ。ご覧になる？」

梅原さん、自分ちの様に言ってるが、当の二代目がこんだけボケてんだから、おれらも見見るっつって、梅原さんについてった。

長い廊下の一番奥。東南の日当たりの良い板張りの部屋。誰も使わなくなった二十畳はありそうなアトリエは、ほとんど物置状態で、埃をかぶった書物や画材、その他生活用品で、半分は埋まっていた。

「すごー！ 広い！ 勿体ないー！」夏子が興奮して言った。おれらは狭いアパート暮しなもんだから、おれの仕事部屋なんてすごいことになっている。去年、夏子が姪っ子に、絵本を作ってやった時だって、小さめの画用紙

に描いていたにも関わらず、乾かす為に冷蔵庫の上だの箆笥の上だのあちこち占領してしまい、寝る場所もなくなるくらいだったのだ。

「へえ！こりや驚いた」と、波さん。「わたしも今まで何度かお邪魔したが、いつも茶の間で茶あ頂いて帰るだけだったもんで、親父さんのことなんて伺ったことなかったもんだから。いや、言ってもボケ老人の戯言たわごとくらいにしか思っていなかったんでね。いやいやたまげた。佐原金造さんっちゅうのは、有名な

方なんですかね」

「街並の絵とかよく描いてて…、パリかなんか洋行してた、モダンな感じの人だったと思います。教科書なんかに載ってますよ」

「きゃー！ 見て見て！ 絵があるよ。本物の！」キャンバスに掛かっていた布をチラとめくって、夏子が興奮しまくっている。描きかけっぽく、マチエールが割れていて、吸い付いた埃でグレーがかってよく解らないけれど、確かに佐原金造の絵柄だった。

「女房の父です」

背後から、ゆらりと二代目が眩いた。

「あら？ そうなの？ 佐原さん、婿養子？」
と、梅原さん。

「義父には良くしてもらいました。大変洒落た方で。わしなどは田舎育ちでしたので、いつも恥ずかしいばかりで。義父には頭が上がりませんでした」

：この人は、いったい、どういうタイミン
グで素面になるのか全然読めないけれど、ど

うやら今まで見た中で一番まともなバージョ
ンになっている、：みたい。

「それじゃ、お掃除しまするので、皆さん、お
茶の間で休んでて下さる？」

梅原さんの号令のもとに、一同また、ぞろ
ぞろと元の茶の間へ移動した。

「奥さんは、亡くなっちゃったんですか？」
国府田が尋ねると、

「弥生がまだ幼い頃に：。病気で逝ってしも
うた。わしは、婿養子で肩身が狭い。別に家

を構えようとしたんじゃないが、爺さんが孫と一緒に暮らしたいと、そう言うんで、結局ここで一緒に暮らすことになったんじゃない」

やつとまともな話しをし始めた。またカラータイマーが点滅しないうちにいろいろ聞いちゃえ、とばかりに、みんな必死に質問した。

「で、娘さんは家出されたんで？」夏子が聞くと、

「……」

これにはどうも、答えたくないらしい。

「：わしは、絵を描かなきゃならんのじゃ」

「はあ。なんでまた？」おれが聞くと、

「描かなきゃならんっ！でも、いざ描こう

とすると、：何を描いたら良いか、解らん」

「そんじゃ、描かなくて良いと思いますよ」

と、国府田が気楽に言うのと、

「描かなきゃならんの、じゃいっ！わ、わしが絵を描いたら、や、弥生は、も、戻ってくるん、じゃいっ！」

「：あの、事情はよく解りませんが、特に何か伝えたいとか、そういう気持ちが湧かないのなら、別段、何も描かなくても良いかと思えますけど」

おれは至極まともに言つてみた。

「伝えたい：気持ち：？誰に？」

「娘さんでも、亡くなつた奥さんでも、誰でもいいし。誰も思いつかなくても、誰かにこの気持ちを伝えたいとか、この花の美しさを共感して欲しいとか、そんな動機じゃないで

しょうか。絵を描くのつて」

言っていて、自分で恥ずかしくなる。おれこそ、自分の気持ちなんて、まともに表現なんて出来ていやしないのだから。一度たりも「：父も、そんな気持ちがあつたんじやろか」

「そりやそうなんじやないですか？」

「それが、……解らんです」二代目は噛み締める様にそう言つて、俯いたまま、それから何も話さなかつた。

その後、波さんが次の絵の構想だとかを楽しみに話しているのを聞きながら、おれはぼんやりと、絵、描きたいなく、何も考えないで、果物とか、花とか、風景とか、時間かけてゆっくり描いたり、そんなこともうずっとしてないや、と思うと、どうしてか、少し泣きそうになった。

二代目は、どこぞから空気抜けまくったゴムボールやぼろぼろの羊のぬいぐるみ、昔の銀行のソフビの人形など、レトロなおもちゃ

を持ち出して、唐突に、

「こんにちは。まさひろくん。ぼく、もつくんです！」

ソフビ人形を手にした、うつろ目に猫背の二代目が、必死で「かわいい」声色を出している。だいぶ不気味だ。羊を手にした昌弘は、少し動揺しながらも、羊を縦横に振って応答すると国府田がおもむろにボールを人間に見立て、応戦に入った。

「まさひろくん、こわがらなくて、だい

じょーぶ。もっくんは、はんぶんにんげんでっす！」

昌弘はきやつきやと笑い出した。

「もっくんの、あとはんぶんは、しにんでっす」

こいつはまた何を言い出すんだ、と思つて二代目を見ると、はしゃぐ昌弘の顔を見て目尻めちやくちや垂らし、濁った目を精一杯きらさせてるので、まあ、いいのか…。

昌弘は笑いころげながら、

「まーくんの、まーくんの、あとはんぶんわ？」

「まーくんの、あとはんぶんは、ぱぱのチンポ汁じるでっす」

夏子が大笑いし始めた。

「ぱぱの、あとはんぶんわ？」

「ぱぱの、ぱぱの、チンポ汁じるでっす」

「ぱぱの、ぱぱの、あとはんぶんわ？」

「ぱぱの、ぱぱの、ぱぱの、チンポ汁じるでっす」

国府田の、裏返った声が可笑しい上に、ガキつてのは繰り返しにハマると、もうエクスタシーの頂点に達するらしく、意味も解つてないけど、永遠に質問を繰り返し、ぱぱが五回出て来たあたりで、もう泡拭きそうになったので、国府田がボールをグニグニ押し付けて、転げる昌弘をいぢくり倒した。こんな性教育もありなのか、と、国府田の子供を扱うテクには、いつも感心させられる。

梅原さんは、掃除を一巡し終わった様で、

「あの、ご夕飯どうされます？　いつも、一人分こしらえて帰るんですけど、今日は皆さんでお召し上がりになります？」

「うーん、どうしよ。こいついるからなあ」と、国府田が昌弘を見て言うのと、二代目が妙に寂しそうな顔になったので、とつさに夏子が「食べてこうよ！　私、手伝います！」と、立ち上がり、「いいのお？　じゃ、お願いしちゃおうかしらん」と、梅原さん。「んじゃまあ、カアチャンに電話しとくよ」と、国府

田も携帯をとりだした。

おれは、足りない材料の買い出しに任命されスーパーまでひとつ走り。帰ってくる、と、二代目のうちは、窓から黄色い灯りがこぼれ、昌弘や夏子のはしゃぐ声、夕飯の支度の匂いが換気扇から漏れている。さっきの寂しい門構えとはうって変わった古い家。一瞬、タイムトリップしたかの様な気分になり、唐突に、胸がきゅーっと締め付けられ、立ち竦んだ。今日は何でかセンチな自分に、どうし

たのだ、おれ、と反問しながら引き戸を開けると、みんなの笑い声が耳に飛び込んできて、「あ、おかえりー。ありがとー！」との夏子の声。茶の間に入ると、二代目は昌弘を膝に乗せ、慣れない手つきでインゲン豆のはじっこをもいでいて、それは、もんのすごく、幸せな光景だった。

「それじゃ、すいません。後はお願いしちゃうわね。私はこれで」と梅原さん、でっかいバッグをよいしょと持ち上げ、一言、「佐原

さん、今日は、良かったわねー」と言つて
歸つていった。

確かに、二代目の顔は、今日の昼間とはだ
いぶ変わっていた。後半は興奮することも、
支離滅裂な話しを言い出すこともなく、至極
まともで穏やかだった。小さなちやぶ台に、
焼き鮭、インゲン豆の胡麻和え、人参の酢の
物、冷や奴、芽かぶのみそ汁、それに、白い
ご飯がところ狭しと並んで、なぜかみんな、
無理にでもこのちやぶ台で食事をしたいのか、

六人ギユウ詰めで座り、「いただきまーす」の声。

国府田にとっては、いつものよくある光景かもしれない。おれだってもちろん、自分や夏子の実家で家族揃って食事をとったりするのだが、そんなのとは全然違う。老人と子供がいるからか、この茶の間のシチュエーションのせいなのか、理由は解らない。けれど、おれにとってその食事の時間は、まるでダ・ヴィンチの『最後の晚餐』くらい厳かなシー

ンであって、波さんや国府田の語る駄話^だしや、夏子や昌弘の笑い声、ひとつひとつまでが有り難く、まるで魔法にでもかけられたかの様なこの時間を、食事とともに、しみじみと噛み締めてしまったのだ。

何か、この部屋で眠っていた空気が、息を吹き返したかのような、そんな感じだった。

第3章

鈴懸の径

すずかけ



夏子は、ストレスが溜まると料理に凝る。

学生だった頃、デザインの課題で思う様な表現がうまく出来ずむしゃくしゃした時のストレス解消法が、お菓子作りだったそうだ。お菓子の場合、余計なことを考えず、分量や時間さえ守ってしつかり手順を踏んでいれば、

間違ひなく食べれるものは出来上がる、とのこと。何でもいいから何かを完成させる満足感を得られると、少し心が落ち着くんだとか。

新宿の画材屋のレジでむやみに待たされながら、世の中にはこんなにも、ものを作りた
い人がいるんだなー、とか考えてたら、夏子
のそんな話を思い出した。

8月31日の残金 ¥864,395

完成させる、とか、少しでも明確な答えが欲しい、とか、人にはそんな欲求があるのだと思う。でも実際世の中なんて巨大なグレーゾーンの固まりみたいなもので、そうそう答えなんて出て来やしない。この頃は、おれも解らないことがあるとすぐググる。すると、答えらしきものが出てくる。当然、そんなものが答えだとは思っていない。思っていないのだから、世の中の結論の出し方がどんどんスピードアップしているせいかな、何も結果が

出せない自分にどんどん焦る。その度に、いやいや、そもそも時間がかかるんだ、本来こんなものなのだ、と自分に言い聞かせる。そんなことの繰り返し。通帳の残高と睨めっこしながら、どんだけ焦らずタラつけるか、半ば修行僧の様なつもりで遊んで暮らしている。

大きめのスケッチブックを購入して、待ち合わせの十一時に新宿御苑新宿門に向かうと、先に到着していた波さんが「橋本先生〜!」

と大きく手を振った。こんだけ大声で先生はやめてくれ……と小声で囁き、周囲の視線を気にしながら小走りに走る。

今日の波さんは、白いウェスタンハットにおなじみのアロハ。ハワイの日系人みたいだ。「先生、ちゃんとこいつを連れて来ましたよ。いつものことですが、ひどく不機嫌ですよ！ 今日も！」と、何が嬉しいのか、いつにも増してハイテンション。一方、二代目の方は、眩しい陽光に晒されてへたり気味のドラキュ

ラつてところか。

「今日はいつに何が何でも絵を描かせますよ。こんだけ、お天道様にも恵まれてるのに、何か描かんとバチがあたるつてもんです！」

——このあいだ、二代目のうちから帰る時、二代目はひどくキュートにこう言つたのだ。

「あんたがた、また来ていただけますかね」
それで、おれは思わずその日ずっとぼんやり考えていた事を、つい口にしてしまった。

「それじゃ、この家で、絵を描かせてもらえませんか？」

唐突な、図々しいお願いに、二代目は、しばし黙って考え込んでしまったが、すかさず波さんが、「そりゃ、名案ですよ！ 二代目、あんたも一緒に描かせて貰ったらいいんですよ。いつまでも描く描かないとうじうじしてても、どうもなりやせん。先生にご指導頂けば、否が応でも描くつてもんだ」

それでも二代目は黙っている。

「そうだ！ とりあえず皆でスケッチ大会と洒落込んで如何がでしょう？ ねえ！ 先生！」――

正直なところ、指導なんて出来やしないし、老人介護もご免被る。おれは貯金が無くなるまでの数カ月、如何に有意義にタラタラ過ごすかで、これでもすごく忙しいのだ。じゃあ、なんでおれはあんなお願いをしたのか。波さんの話を聞いていて絵が描きたくなっ

たつてのもある。でも実は、ただ単に二代目の「家」自体に惚れてしまったからかもしれない。あのお茶の間が、息を吹き返した様に、あのアトリエも、そこに眠る磁場の様なものが蘇ったとしたら、とても素敵だろうな、とか、そんなファンタジックなことを、つい考へてしまったのだ。

新宿御苑でスケッチしようというのは、波さんのアイデアで、ちよつとかつたるい気もしたけれど、まあ俺も思いつきでしか喋って

ないので、それも一興かとのつてみた。各々描く場所を決めるため、軽く園内を一巡したあと、ちよつとお腹が減つて来て、

「夏子がおにぎり作つてくれたんですけど、とりあえず腹ごしらえしません？」

「愛妻弁当！ そりゃ有り難い！ ひとつおこぼれに預かりましょうや、な！ 二代目」

平日のわりに、御苑はけっこう賑わつていて、芝生の上にはいちやつくカップル、外国人観光客、老夫婦などが点在している。こち

らは、老人二人とハイキング。：何やってんだろ、おれ。

「この季節、めばしい植物はさるすべりくらいですかねえ：」

波さんはあたりを見回しつつ、入口で貰った案内図で「9月のみどころ」を確認している。

「さるすべりなんぞ、うちのアパートの庭にも咲いとりますし、他になにか：、お！たいわんほととぎす？♪鳴かぬならあ：、あ、

これは鳥の方でしたね、失礼！先生はどのタイプで？」

「は!? 何が!?」

「ほととぎす、ですよ！家康、秀吉、信長の！ほら、鳴くまで待つとか待たないとか」「あー、はいはい。やっぱり待つんじゃないですかねー」

「さすが先生！忍耐の徳川公！」

確かに、最近のおれは、ある意味忍耐の人ではある…。

「あたしや待ちきれんですよ。殺しやしませんがね。鳴かせてみせるって、秀吉さんタイプ、ですかねー」

「波さん、めちゃくちや似合ってますよ。秀吉」

「二代目は差し詰め、鳴かぬならあゝ、殺してやろうゝ！ってとこですかな？」

波さんのそんな話しは馬耳東風。二代目はおにぎりを頬張りながら、てんであっちの方向をしかめっ面で凝視していて、その視線の

先を追うと、仲の良さそうな父娘おやこがスケッチブックを見せ合って、楽し気に歓談していた。「で、どこで描くか決めました?」

「わしは、今度、油彩で描くふみえさんの背景に、と考えるとるのですが、やっぱり赤松ですかねえ」

：さつき枝振りの良い立派な赤松があつたけど、今度は赤松と全裸のふみえさん? 波さんは天国に行くや否や、ふみえさんに三行半つきつけられたりしないだろうか。

「二代目さんは？」

「…もう少し、歩いて決めようと思います」

…あ、本当に描く気あるんだ。今日はまともじゃない。

「それじゃ、閉館三十分前に大木戸休憩所で待ち合わせってことでいいですね？」

「了解しました。後でご指導のほど、よろしくお願いしますよ！先生！」

つちゅーことで、おれは一人、ふらふらと散歩しはじめた。水辺に中国チツクなかつ

ちよいい建物。これかな、と思い、良いアングルを見つけて座って描き始める。

手を動かすのは久しぶりだった。手のスプードルはゆるやかで、次第に脳のピッチもチューニングされていくのか、いつもの焦燥感までがここに流れるゆったりとした時間と空間に吸収されていく様だった。手を動かしながら考えると、心に余裕が生まれてくる。

やりたいことが見えなくなつて、頭で、ああだこうだグルグル考えてみてもドツボには

まるばかりだったけど、所詮、自分はこの鈍臭い肢したい体を使ってしか動けないのだ。そんなあたりまえのことを、どうしてもすぐに忘れてしまうのだろう。結局、誰が何を言おうと、自分の時間軸でしか動けない。脳のセンサーを麻痺させつつ、日々の仕事を淡々とこなし、ていて全然平気じゃんって思っていたのに、いつの間にか肝心要かなめのセンサーが完全にいかれてしまった。そんな感じかも。

いや実をいうと、引き金ははつきりしてい

る。おれは今年、イラスト集を出版する予定があつた。決して儲かる話しじゃなかったけれど、初めての著作になるはずだったので気合いを入れまくっていたのだ。本なんて、出しちまったもん勝ちだと、不埒にも思っていた。だから、当初は出版するためだったからゆる妥協も受け入れる覚悟があつた。でも実際初めてみると、あたりまえだけど細部に拘る自分こたわがいて、なかなか難航してたのだ。それでもなんとか漕ぎ着けて、描き下ろし分

のイラストあと数枚で完成、というところで突然担当者から電話があり、あろうことか…、

「今すぐ手を止めて下さい！」

「え？何かあったんですか？」

「今、会社が倒産しました！」

「えゝ!? 今って!? だってさつき電話で打ち合わせしたばかりじゃないですか？」

「私も寝耳に水なんですよ。私も家も買ったばかりでローン山ほど抱えてんのに、明日からの無職ですよ！ 解って下さい！」

私も被害者なんですよー！」

……なんでおれが解ってあげなきゃならん
のよ。

当然のごとく、ギャラは回収出来ず、当然
のごとく、本も出なかった。

よくよく考えてみれば、当初から話しが旨
すぎる、と思える気配は節々に感じられたの
だ。心のどこかで、半信半疑な自分もいた。
でも、そんな想いはもみ消して、ないものを
あると思つて進めてた。

倒産ばかりはどうにもならない。でも、昨
今では、進めていた仕事が頓挫しても当然み
たいな風潮が業界に蔓延^{はびこ}り過ぎていて、おれ
のまわりのフリーの奴らも、美味しい話しに
踊らされ、弄^{もてあそ}ばれて捨てられて、どうにもさ
めざまな気分になる……。

とはいえ、しばらく落ちこんで、陰々滅々
した結果、出版されなくて良かったじゃん！
と思うに至る。サラリーマンならともかくも、
社会にすり寄ったところで1円さえも貰えな

いのだったら、何を媚びる必要があつたのか。
いや、一千万円貰つたつて、ものを創ること
において、妥協する必要なんて最初つから微
塵^{じん}もなかつたんだ。そんな妥協の産物なんて、
世に出なくてほんつとに良かつた！ そう思
うに至つてしまった。このようにして、人間
はどんどん頑固になつていくのかもしれない
……。でも、それでいい。

そして、おれが本当にやりたいこと、それ
にいざ向き合つてみようとする、鈍つたセ

ンサーを再起動させるのにえらい時間がかかるのか、何をしていいのか解らない。いざその状態にシフトしてみると、社会に関わりながら表現していく方法をまるで解らない自分に直面しちゃって、愕然^{がくぜん}としているのです。チャンチャン。

予定の時間のちよつと前だけど、道具を片付けた。さつき行っていなかったバラ園の方に行ってみると、プラタナスの並木があつて、

わー、どっかの映画で見た様な、恋人同士が
片寄せて歩く様な、少女マンガの世界！こ
んなベタなところあつたんだー、と多少感動
していると、どこからともなく寂し気な歌声
が聞こえてきた…。

友と語らん

すずかけ

鈴懸の径

通いなれたる

まなびやの街

背中を丸めてベンチに座り並木をあおいで
いる男…、それは二代目だった！あのしか
めっ面が、歌を唄っている!?

やさしの小鈴こすず

葉かげに鳴れば

夢はかえるよ

鈴懸の径

あまりのことに、とても話しかけられず、

おれはそつと引き返し、待ち合わせの休憩所に行つて、ゝタバコをふかした。

「どうですか、お二方！ 名作は描けましたかな？」

たつぷり日に当たり、いつにも増してテカテカの波さんが、汗を拭き拭き話している。波さんは普段からあちこち出向いてスケッチをしているようで、使い込んだ自前のパレットを持っていた。スケッチも随分こなれてい

て、赤松の枝つぷりなんか慣れた描線で流暢に描いている。

「巧うまいですねー。おれなんかより全然巧いですよ！ おれに指導して下さい」

「何言つてんですか!? 専門家がそんなこと仰っちゃいけませんよ！ 商売はハツタりなんですからね。先生には、先生然として頂かなくっちゃ！ ささ、ご指導御願います！」

いや：、決して教える専門家ではないのだが、と思いつつも：

「ハイ…、すいません。ええつと…。まず、スケッチをどう捉えるかで見方も変わって来るかと思うんです…。おれの場合、鉛筆画として完成させたいと思って描いてるので、一応これが完成品なんですけど、波さんの場合、本画の下図なわけですよ。そういう時には、本画を描く時に、今日の臨場感をうまく憶いだせる様な記憶装置として、効率よく機能出来るのが、良いスケッチなんじゃないでしようか…」

「なるほど！で、そのポイントは如何に！」
「うゝん……。そこは人それぞれなんですけど
……。例えば音楽の演奏で、楽譜を頼りにする
人と、感覚だけで挑む人といいますよね。楽譜
の方が確実かもしれないけど、感覚を体に刻
み込んで吸収して再度挑む方が、再生した時
の音の生命力が違ってくるんじゃないかと、
個人的には思ってます」

「ほほう……」

「記憶の再生っていうのは、単なる情報とし

ての記録と違って、もう一度生きるってことだと、ぼくは思うので……。だからスケッチの役割としては、如何にその感覚を刻み込んでいるかが、ポイントなんじゃないでしょうか」

「なるほど！ そんなご意見は老人ばかりの集いではなかなか拝聴出来ませんなあ。さすが先生！ そうすると、私のスケッチは如何がなものでしょうかねえ」

おれは落ち着いて、ゆっくりと、波さんの

その描線を堪能する様に眺めてみた。赤松の枝の節部分に墨の混じった赤い絵の具が紙に沈み込むかの様に溜まっている。再度天に向かつて伸びて行くエネルギーを溜め込んでいくかの如く、そこで一旦筆が力強く沈黙し、赤松の意思の様なものさえ感じられる。決して味わい深い。でも…、ここが危ないところの様に感じるのだ…。

「あの、絵の具の溜まり具合とか、伸び具合のバランスにリズムがあつて、感受性が強く

て、とても良いと思います」

「そうですかいな！ いや、ありがたいお言葉です！ ええ、枝っぷりに躍動感があつて、なかなか爽快だったものですから！」

「どんなものを描いていても、気持ちの良いポイントつてありますよね。このスケッチでは、そういう部分がいきいきと拾えていて良いと思います。ただ、スケッチの段階でこれだけ味わい尽くしちゃうと、それで満足しちゃったり、あまり自分の気持ちよさばかり

強調しちゃうと、薄っぺらくなっちゃうことも多々あるので、そこだけ気をつけて本画に取組めると良いんじゃないでしょうか」

「味わい尽くす……ですか。なかなか淫靡いんぴな言葉ですなあ。確かに、写生している時つてのは、そんな感覚があるかもしれませんな」

「スケッチでは、モチーフの旨味を味わいながらも、冷静に分析することが出来れば良いんじゃないかと思います」

「いやいや、お見それしました！ 私はッう

まい〴〵って言葉は、技術が長けているという
意味だとばかり思っていました。が、芸術で言う
ところの〴〵うまい〴〵ってのは、味わい深い〴〵
方の〴〵旨い〴〵なのかもしれません！」

ああ、確かに……。そうなんだよね。味噌も
糞も、味だ〴〵と言って誤摩化す類いの作品は
あざとくて嫌いだけど、何度でも噛みしめれ
る様な〴〵旨味〴〵ってのは、とっても重要な
だよな。でもおれは、どこかそういう感覚と、
とんとご無沙汰していたかも……。

「二代目さんは？」おれが聞くと、二代目はちゃんとスケッチブックを差し出した。

一枚目は、すごい筆圧でゴリゴリに描いた自分の拳。

「……？」

二枚目以降は、たぶん並木道を途中まで描きかけた様な描線が何枚か続き、最後に一枚、またゴリゴリに描き込んだ葉っぱが一枚。

「すごい！全然描けるんじゃないですか。これは何の葉っぱです？」

「プラタナス…、鈴懸の葉です」

知ってたけれど、聞いてみた。

「さっき、ぼくも通ったんですけど、映画に出て来そうな綺麗な並木でしたよね」

「……」

「ずっとあそこにいらしたんですか？」

「……」

……だめだ。探りを入れようとしても何の反応もない…と、思ってたら、

「友と語らん、鈴懸の径」♪」

波さんが唄いだした。さすが波さん、ど真ん中です！

「聞いた事あるんですけど、何の曲でしたっけ？」

「通いなれたるゝ、まなびやの街ゝ♪ 灰田^{はいだ}勝彦^{かつひこ}の『鈴懸の径』ですよ。私が出兵する直前でね、あの頃に戦争を歌っていない曲は珍しいんですよ。ちようどふみえさんの想い出とだぶるので、よう憶えとります：」

波さんは珍しくしんみりと言った。

「ご存知です？」

二代目にしれっと聞くと、

「……父が、よく歌つとりました」

「へえ」

おれは白々しく言ってみて、波さんが見てないんだったらもう一回行ってみようと提案し、またプラタナス並木に戻ったのだけど、ふたりとも何かいっぱい溢れる想いがあるみたいで、ずっと黙って並木を仰いでいた。こういう時は、なにも話しかけない、よね。

御苑の周辺は開発が遅れていて、街並に昭和の面影が残っている。そそるお店が点在してるので、一杯ひっかけていきましょか、と適当な暖簾のれんを潜くぐった。

「さっきの歌、歌ってたお父さんって、佐原金造さんですか？」

おれはどうしても気になったので、また無神経にいろいろつつこんでみた。

「いや。わしの実の父の方、です」

「へえ、実のお父さんってどんな方だった

んですか？」

「……………社会の脱落者っ！」

あ、やばい。またなんか興奮して来てる…。
「どんな事情か知らんがね、あんた、お父上にそんなこと言っちゃいかなですよ。戦後なんてね、一億総脱落者、みたいなもんだったんですからね」

二代目は波さんより年下みたいだ。おれから見れば、波さんの方が元気なくらいだから、どっちが上だか下だか解らないのだけど。

「う、飢えた！ 妻子を放置してっ、げ、げ、げいじつ、な、なんてものに明け暮れる輩は、どいつもこいつもっ、しゃ、社会の屑っ！ なんじゃいっ！」

「げいじつ……？」

「あんっ、あんたみたいなの、平日の昼間っから、こうやって酒呑んでる様な、そんな輩はっ、く、屑だっって言っとするんですっ！」

……。だいぶ、むかつく。何でおれはこんな老人の面倒みるはめになっただ。

「しっ、仕事が出来なくなったら、に、人間終わりっ！そ、そう思わんかいっ！あんだ！」

「二代目、あんたな、そんな了見の狭いこと言うとなら、どうする？あんただって、わしから見れば、まだまだ若いんじゃない。あんだが思つとるより、この先まだまだ長いんですよ」

波さんは年長者らしくたしなめているけど、おれはもういいかげん腹が立って来たので、

久々にプチ・ギレした。

「じゃあ、聞きますけどね！ あんたはなんでそんな屑野郎の真似事してるんです？ あんたは佐原金造の恩恵を受けて生きて来たんじゃないんですか？ おれは誰の世話にもなってないですよ！ 少なくとも！ なんで、いつもそんなただつ子みたいなことばかりほざいてるんですか!? 娘に愛想つかされて、寂しいだけなんじゃないんですか!?」

「ぶっ!!!! つぶあ、ば!! くおぬおおお! ふ

んごつつつ！こ、小僧つ!!!!」

血流が頭頂部に凄い勢いで廻つたらしく、二代目は言葉を発せなくなっている。ざまあみろ。すつきりした。このままくたばりやがれ。

波さんに渡された水を一気に飲み干して、しばらくゼイゼイ、本当に死にそうになっていたけど、副流煙だらけの薄ーい酸素を精一杯深呼吸、スーハスーハ吸ってから、

「スー、それじゃっ！ハー、わしも、スー、

言わせて、ハ―、貰つ！わしつ、ス―、間違つとらんつ！ハ―、弥生の、ス―、幸せだつ！ハ―、願つ！ス―、生きてきつ、ハ―、んじやつ！旨いもん、喰つ！ス―、いい学校入れつ、けして金つ、不自由させずつ、…あの娘、ハ―、よくつ、ス―、勉強も、出来つ…！わしは、びじゅつつ！ハ―、なんぞ、ス―、やらせたくなかつ！ハ―、爺さんが、さはらのじじいが！びじゅつつ、なんてあくえいきよつ、クホツ！糞つ！」

息継ぎだらけで、よく解らない…。

店員に、水っ！と大きく叫んでから、

「スー、げいじっ！なんてっ、ハー、何もっ、スー、生み出さんっ、ハー、ぼんくらっ！スー、するこっ、ハー、贅沢な遊っ、スー、生活にっ！ハー、何も、スー、必要っ、ハー、なっ、スー、その上、ハー、屑っ、スー、くせに偉そっ、ハー、しくさっ、スー、ハー、スー…」

お店のお兄ちゃんが運んで来てくれた水を

奪い取り一氣に飲み干して、

「今日っ！喰うもん！も、ない！わしらっ、カアチャンツ、ハー、そんなもんっ、わしらっ、助けちゃっ、スー、くれやっ！しないっ！ハー、偉そうなっ、スー、こっ、ハー、ほざくならっ、スー、飢えっ、ハー、親子でもっ、スー、助けてっ、ハー、みんないっ！げいじっ！とやらでっ！」

「：佐原さんな、」

いきなり波さんが、〃二代目〃と言わず

「佐原さん」扱いで紳士的に話し始めた。

「そりゃ、わしらは飢えて苦しんだ。まだ子供で食べ盛りだったあんたらなんかには、地獄の苦しみだったと思いますよ。腹がひつつくほど痩せた子供が動く気力もなくなつて、路地に座り込んでる姿なんかは、悲しくて悲しくて、今でも目に焼きついとる……。どんなに豊かになつても、あれだけは忘れちゃいかん……。わしは外地から戻つて来た時の、この国の情景、ほんつとに悲しかった……。腹

が減っては戦も出来んと言うが、戦どころか、笑うことも出来ん。人を思いやるなんて、もっと出来ん。それだけは確かですわ」

波さんは一息ついて、

「でもな、さっきの歌、友と語らん、鈴懸の径。あれは、学友とともに希望に燃えて、将来を、勉学を、友情を、楽しく語り合った想い出の学路を唄ったもんじゃ。そりゃ、そんなもんじゃ腹は満たされん。でも、わしらにとって、戦争で何が一番悲しかったかって、

そういう情緒が一切合切なくのうてしもうたことなんじゃ。絵を描くのが好きっちゅうだけで、非国民の様に言われてな。日本国中がそういう緊迫した空気の中で、心ある人は、この曲に懐かしい煌めく想い出を重ねてのう。^{きら}いつの日にか、夢はかえるよ、鈴懸の径と、想いを託していた。お父上がこの曲を唄っていたのなら、あんたにどんな仕打ちをしたのか、わしや知らんが、どうであれ、やはりそんな気持ちがあつたのですよ」

おれには全く口出しの出来ないジャンルの
しんえんじゅうこう
深遠重厚な話しを、波さんがとくとくと語つてくれた。

二代目は、黙って噛み締める様に聞いてから、「…父は、絵を描いていたのです」

「え？ 佐原金造さんじゃなくって？」おれが言うのと、「実の父っ、ですよ。わしが、子供の頃にはほとんどっ、家におらんかった。写生だのっ、絵を売りっ、くだの、出かけて、ばかりで。一度だけっ、スー、房総、写生、

くっ、ハー、わしを連れっ、くっ、それが一番、楽しっ、思い出っ、スー、す、ハー」

意外だった。この爺さんの異様なまでの芸術コンプレックスの要因はここか、と、やつとでっかい「？」が解けた気がした。

「戦時中は、スー、絵なんっ、描いっ、遊んで暮らしっ、ハー、近所の者の非難っ、母が一身に背負わっ、スー、…生活も、ままならっ。ハー、終戦真近っ、スー、なつて、やつと、家におるように、なつたも、の、

ハ―、のっ、ほとんど廃人っ！ その頃っ、よく、さっきの歌を、ス―、唄って…」

二代目は、一点を見つめ一気に捲まくしし立てた。

「…わしっ、ず―っ、考えっ、おっ、た、ち、父の気持ちっ！ 子供心っ！ あの歌っ、からっ、ス―、汲み取っ、出来っ！ た。ハ―、しかっ！ その気持ちっ、汲み取っ、しまっ、ら、わ、わしの心っ、む、矛盾っ…！ 終戦後っ、進駐軍で、亜米利加アメリカのっ、漫画っ！ 絵なぞっ、壁にっ！ ス―、描いてっ！ 描い

てっ！そのままっ、入り浸っ！パン助っ、と、ハー、どこぞ消えっ、スー、ハー、スー、ハー、弟も、飢えてっ、スー、ハー、スー、ハー、スー、ハー、死んでっ、スー、父を！ハー、許すかつ！許さんかつ！スー、許さんことにつ！決めたっ！」

……重い。漬物石三百個分くらいの重たい話し。いったい、どうしろってのよ。

そこまで聞いて、波さんは、悲しそうに眉をひそめ、そして至極優しく、こう言った。

「よう解った。辛い思いしなさったな」

二代目は全身の震えを抑える様にグラスを両手で難く握り、まっ赤になった顔を硬直したまま、一点を凝視していた。

「：だけでもな、佐原さん」

波さんは一息おきつつも、力強く、

「結論から言わせてもらえばな、どんっなに辛くつても：、ものごとは許すことからしか始まらないですよ」

おれはウンともスンとも言えず：、ただ二

人のやり取りを見守るしかなかったのだ。

第4章

からっぽの世界

9月30日の残金 ¥656,291

都会の雑踏…、人々の孤独…？

桃ちゃんは、夏子の友人で、桃ちゃんの夫、坂崎潤は新進気鋭の写真家だ。だが、正直なところ、彼の作品にこれといった魅力を見い

だせず、どこかで見た様な凡庸な街の風景を前にして、おれはかなり脳死状態で眺めていた。

「橋本さーん、久しぶりー！」

振り向くと桃ちゃんが、満面の笑みで立っている。

「あ、久しぶり！ご主人、受賞、おめでとうございます！」

「やだー、改まっちゃって。大したことないよおー！今日は？夏ちゃんは？」

「ああ、バイト帰りに寄るって言ってたから、もうすぐ来るんじゃないかな」

「そっか。夏ちゃんも大変だよね。バイト先、年下ばかりだって言ってたし。そろそろ引退したいんじゃないのかなあ」

「……。桃ちゃんは？最近どうしてんの？」
「えー、うふふ、実はねえ。二人目…、出来ちゃった♪」

「えっ!! 子供!？」

「うん、どうせ育てるんなら上の子の手がか

かる時に一緒に済ませちゃった方がいいかなあつて思つて」

「そりやまた、おめでとう！ 計画性あるよねえ」

「そんなの基本だよお。橋本さんは？ 子供作んないのお？ かわいいよお」

「あー、別に、いてもいいんだけど、まあ、そのうち……」

なんとなく……、ズケズケと踏み込んで来られるのがうざくなつてきたので、おれが言葉

を濁らせていると、いいタイミングで坂崎が声をかけて来た。

「こんにちは！今日はどうも」

「あ、おめでとうございます！」

「ああ、ありがとうございます。どうでしょうか？ 作品」

え？ 感想!? こういう、別にどうとも思わない、場合、結構困る…。が、返答パターンはいくつかある。1・いいですね、とゆるい社交辞令で適当に流す 2・技法を聞いてみて

参考にするフリして誤摩化す 3・コンセプトを聞いてみて「ああ」とか「へえ」とか言ってみる 4・被写体やモチーフについて尋ねて共通の話題があれば強引にそっちへ持っていく 5・真正^ま直に「別にどうとも思わない」と言う、等々。とりあえず、5は却下。1は避けたい。2は、おれが写真無知で聞いても話し繋がらないので却下。3か4? でも、3は微妙…。目論んだ通りのコンセプトを返答されたら興ざめだし。だいたい、コンセプトな

んてのは一言で語れりゃわざわざ作品なんて作らないわけで、短時間で意思の疎通はほとんど無理。聞いたはいいが返答に困るいたたまれない空気が流れるんだよなあ、小難しいこと言われても困るしなあ、でも……、

「どういうコンセプトで撮られてるんですか？」

あー、やっぱり聞いてしまった……！ でも聞かないと話しにならない。

「コンセプトなんて関係ないよ！ 写真はね、

感じるままに見ればいいの」

答えたのは桃ちゃんだった。………なんで、このヒトに指導されてんのかよく解らんが、感じるまま、が、あまり面白くないから聞いてんだよ、こっちはっ、といった苛立ちを……必死に押さえる。

「コンセプトねえ、敢えて言えば都会の孤独感とかそういった心情風景、でしようか……」

そのまんま、じゃん！ いやそんなこと聞いたおれが野暮だったのだけど、さてどうし

たものか。で、結局のところ、いまいち、とも言えないので、「あるよねー」とか「ああ」とか「へえ」とか言ってるおれがいた。すると、近くにいた坂崎の友人だか、教え子らしき男が唐突に、

「坂崎さんの作品は911以降のメディアにおけるコンテクストの解体と再構築に果敢に挑戦しているんだと、僕は思います」

「あ?…コンチキ…?…」

「あれって衝撃的だったじゃないですか。映

像として」

「あ？ 911？ うん。映画みたいだった」

「そう、それなんですよ。皆、映画みたいって言うファイルターをペーストしてしかあの映像を認識出来なかった。でもそういった準拠基準に依存して、リアリティを欠いた状態であの映像を映像として享受するって危険なことだと思いませんか？」

「そりゃまあ……。つつても、日本のボロアパートのモニターで、簡単に当事者のあれや

これや…、理解されても、なあ」

いったい何の話しが始まってんのかさっぱり解らないまま、何故かこの青カビの様な若者に詰問されるままに答えている、おれ。

「坂崎さんは無意識の中のフィルターを解体していく作業をしていると思います」

おれのふやけた返答を丸無視して彼は独演を続け、坂崎本人はまんざらでもない風に、

「確かに、ステレオタイプ化されたコントロールを解体していった先に意識の革命を企

てていくのがデジタル全盛のゼロ年代の写真の命題かな、という意識はありますね」

「氾濫するシニフィアンをシニフィエのまま享受させる。写真の役割は大きいと思います」

……。この作品を見てようもここまで語れるものだと関心する。おそらくおれが阿呆なのだろう。が、しかし、こいつら、わざわざ解りにくい言語で喋ってないか？ つていうか、この蘊蓄^{うんちく}自体に、それこそリアリティを

微塵も感じないのだが…。

「さっきうちの奥さんが言った感じるままに見ればいい、それが僕にとってが一番ピュアな構えなんです。女性はニユートラルな感覚を保持出来ていて羨ましい。僕にはどこか、そんなこと出来ない」

坂崎の作風は、それが狙いなんだろうけれども、わざと綺麗なピントや構図をはずして撮っている。まあ、それは良いのだが、桃ちゃんがピュア？ 百歩譲ってそうだとし

も、〃僕は賢すぎてそんなこと出来ない、女性
性は阿呆でいいなあ〃としか聞こえないおれ
が、捻くれているのか…？

ともあれ、予想通りのいたたまれない状況
に陥り倦ねておちいいると夏子あぐがやって来た。この
好機を逃さず、速攻おれはその場を夏子にま
かせ彼らから逃げた。何気に会場内をほつ
き歩いていると、いきなり見慣れた顔が目
飛び込んできて…。

「オッス！」

国府田、登場。

「すげーな、坂崎君、賞とつてよお。おいらも欲っちいなあ」

「ああ、でもさ、正直、おれ、意味解んないんだけど。解る？これ？」

「おお!! 橋本ちゃん! やっぱそうか!? みんな知った様な顔で見えてっから、おれてつきり、おれだけ阿呆なのがバレると思つて黙つてたんだけどよお、でつかい声じゃ言えねえけど、やっぱわっかんねえよなあ!」と、充分にで

かい声で宣うもんだから、おれは焦って周囲を見回した。すると、

「おれ、実はな……」

国府田は神妙な面持ちで、今度は小声で話し始めた。

「今までずっと黙ってたんだけどな、この際橋本ちゃんにだけ言うわ」

そういうと、おれの耳元に手を当て、すごい秘密を暴露するかの様に囁いた。

「おれさ……、実はな、芸術って、意味わかん

ねえのよ」

「……………」

「そんでな、実はよ、デザインとか編集とかも、何のことだか意味わかんねえのよ。解るか？ 橋本ちゃん！」

マントルまで達する様な宇宙的な質問にしばしクラツとしていると、

「でもよ、実はみんな解った様なふりしてるけどよ、解んねんじゃね？ この会場にいる客一人一人に聞いてみたら、みんな答えられ

ねんじゃね？」

……そりゃ、そんなドでかい質問、子供電
話相談室の無着先生だって即答出来ねえだろ
うよ。けど、こいつのすごいところは、皆が
なんとなく思っても言わないことを言って
しまうところなんだよな、と、しばしスケー
ル感に圧倒されてたら、坂崎の受賞記念レセ
プションのスピーチが始まって、いきなり会
場が拍手で湧いた。

「それでも、いいよな」。賞とかとつたら、

仕事いっぱいきて、お金いっぱい貰えて、そ
んで、モテるんだろな」

スピーチなんて聞いちやいない国府田が、
おれの隣でまたアホなことを言い始めたが、
とりあえず無視する。

「おれも賞とか欲しいな。欲っちい欲っち
いすつごく欲ちいっ！」

悶え始めた……。正気か？ 笑いを堪えて無
視し続ける。すると、国府田の隣にいた見知
らぬ女の子が、こんなことを言った。

「国府田さんだったら貰えますよ！ CGイ
ケてますもん！」

：マジかよ。

国府田は、おれが言うのもなんだけど、自分
で言ってるからいいんだけど、ものすごく
センスが悪い。でも、ものすごくイカレてる。
イカレてるのが極限まで達すれば、誰にも負
けないクレイジーっぷりを発揮するかもしれ
ない。でも、そのクレイジーっぷりを、真面
目な仕事で半端に発揮しようとするものだか

ら、全然儲からない。誰だか知らんけど、国府田のいかなる作品を見て「イケてる」と宣のたまうのか。

「ああ、紹介遅れちゃったけど、この子な、今やってる仕事のプロデューサーのアシスタントの従兄弟の友達でさ、麻美ちゃんってえの」

なんだ、その回りくどい関係は…。

「今日は皆さんにお伺いしたいことがあつてついてきちゃったんです。よろしくです！」

おれがキョトンとしていると、

「じゃあ、早速聞いちゃいます。実は彼氏がリーマンやめてアーチストになりたいって言ってるんですが、ずばり！アーチストって、どうやってなるんですか？」

……。今日の運勢は、スケールのでかい質問の乱れ打ち攻撃にあう、とでも書いてあるのか……。多少目眩を憶えながら、「いや、どうやってなるのか、こっちが教えて欲しい」と、眩くのが精一杯だった。

「何ですかあ？ 橋本さん、イラストレーターなんですよねー？ れっきとしたアーチストじゃないですかあ！」

「……ちよつと待って。あなたにとってアーチストになるゝっていうのは、どういう状態になること？」

「そんなの解りませんよー！ 解らないから聞いているんじゃないですかー」

「イラストレーターはアーチスト？」

「違うんですか？」

「写真家は？」

「∴アーティスト、じゃ、ないんですか？」

「ミュージシャンは？」

「∴∴∴アーティスト、∴ですよね？」

「漫画家は？」

「そんなのっ、私に聞かれたって解らないですよー！　なんでそうやって意地悪するんですかあ!？」

「彼氏は何がしたいのよ」

「アーティスト∴、です∴」

「あのね、アーチストなんて職業はないの。言つてしまえば、全員、自称アーチスト」おれがそう言うのと、

「日本人つてさー、すぐそういうこと言うよね」

いきなり見知らぬ女が会話に割り込んで来た。見たところ三十代後半、ヒステリックグラーマーちっくなプリント柄のカットソーに、深々とキャップを被り、お肌はスピンカーブ並みの曲がり角。どこから見ても、紛うこと

なき日本人。

「ニュー Yorker は、そんな卑屈な言い方しないよ。今日 私はアーチスト」って思ったからお金稼いでなくたって、胸はって アーチストだ！って言ってるよ」

おれらの、誰？って反応に気がついて、スピーチを終えて通りかかった坂崎が紹介してくれた。

「あ、彼女、吉永さんって言って、あそこにいるニツクの彼女で……」

坂崎はアメリカでも活動していたので、今日はけっこう外人が多い。が、彼の紹介をさえぎる様に、彼女はたたみかけてきた。

「日本人って、稼いでるとか稼いでないとかに拘り過ぎじゃね？」

なんか知らんがやたら挑発的。

「ええっと……？ いやだから、みんな〴〵自称アーチスト〴〵でしょって言ったんですけど」「その〴〵自称〴〵ってわざわざつけるところが、自嘲的なの？ なんつか卑つ屈な感じ、す

んだよねえ」

一瞬キレそうになる。あんだ、外人？それとも外人専用売春婦？という質問を必死に呑み込んで、「外国、よく行かれるんですか？」に、変換した。

「ニューヨークで、彼がファッション関係のバイザーやってっから、しょっちゅう手伝いがてら遊びに行ってっけどお、あっちでアーティストの友達もいっぱいいるよ」

「へえ」

「みんなキてるよー。ドラッグアートとか、
イツちやつてるもんねー」

あ、出た。ドラッグの話し。

「ドラッグやったことある？」

「ないです」

あっても言うか、ボケ、と思う。

「やってみなよ。世界、変わるよ」

「そうなんですか」

既に、おれは神経の末端の配線をきって、
サイボーグに徹している。

「アートとかやってんだったら、絶対やんなくちやダメだつて！」

うざい……。いいかげん、どっかに消えてくれ。

「吉永さん……。あんまり大声でそういう話しない方がいいんじゃないかな？」

坂崎が懸命な助言。つて言うより、彼にしてみりゃ、自分の受賞記念レセプションの席で、大声でこんな話しされてもいい迷惑。

「そうなの？！ シケてんのねー。こーこー！」

つまんねー、と言いい残して、彼女は外人連中の輪の中に消えて行つた。良かった。

「いやー、びつくりしましたねー。何怒つてんですかねー」と、麻美ちゃん。

「ろくに言葉通じない人とかおつき合い出来ないんでしょ、あーいうヒト……」おれがそう言くと、一部始終を見ていた隣の白人がこつちを見て、すつごく嬉しそうに言つた。

「パンパン？」

「パンパン!?」どこで、そんな日本語憶えた

のよ!？」

びっくりしてみんな笑い出すと、それが嬉しいのか、ニヤニヤしながら何度も「パンパン！パンパン！」と繰り返した。変な外人……。

「……で、話しの途中でしたが……」

「ああ？えっと何だったけ？あ、そうそう、とにかく言ったもん勝ちなのよ。だから彼氏は既にアーチスト！いいじゃん、それで」

麻美ちゃんは全然納得のいかん顔。でも、

これ以上おれたちに言えることなんて何もな
いもんね、実際。

しかし……。しばらく引き籠りの様な生活を
していたため、今日は社会へのリハビリのつ
もりでやって来たものの、こうたて続けにま
ともな会話の一つも出来ないと妙に疲れる……。
ま、こんな立食パーティみたいな席じゃ、こ
んなもんだろうけど……。

すると、そんな気分には追い討ちをかけるか
の如く、背後からの甲高い声が耳をつんざい

た。

「なに!? もうスピーチ終っちゃったのお
ゝ!?」

「あ、曾我ちゃん! お疲れゝ!」と夏子。

「やだもう…、すっげ走って来たのに!
もうマジ過労死するよ! 七時あがりなんて
奇跡よ奇跡! 悪いけど、今日は吞ませて貰
いますっ!!」

来るなり気合い充分。坂崎の受賞だろが何
だろが、吞めりゃ何でもいいのだろ…。

「おう！桃子！ダンナおめでとう！あれ？ダンナは？」

坂崎は客の対応に追われていて、会場中、どうもどうもとお辞儀行脚で東奔西走、それどころではない様子。曾我ちゃんは、ま、いいや、とばかりに差し出されたビールをグビビツと豪快に煽った。

「ブハーツ、幸せだにゃー！」

一人悦に入るその姿には、もののあはれさえ感じる……。一息つくと、

「こんな生活では、お嫁にいけませーん！
いい人おりません？」

唐突に、横にいた初対面の国府田に聞いた
もんだから、さすがの国府田もちよつと動揺
しつつ、咄嗟に「じゃ、あの外人！」と指差
したのが、パンパン外人。

「誰？ 年収いくら？」

「年収一億！」国府田、超適当に答える。

「マジで!？」と言いながら、バッグからござ
ござタバコを出し、「あ、ここ、灰皿、外？」

「あ、曾我ちゃん、桃ちゃん、オメデタ。今日は禁煙」と、夏子。

「マジで!? 桃子、あんた、何人^{はら}孕んでんのよ!」

「え? ていうか、二人目なんですけど…」

「ああ、そう…。順調なのねえ」そう言うとな名残惜しそうにタバコをしまい、「こ・ど・も・ねえ」と、ため息まじりに呟いた。しばし沈黙のあと「あのさ…」と、何やら神妙な面持ちで語り出し、

「ベビーカーってさ、あれ、武器に見えない？」

……？ 当然解せないので、辺りを見ると、皆、同じ様に眉をしかめている。

「バズーカ砲かなんかに見えない？ あれ」

誰も共感出来ないまま、曾我ちゃんの独り語りが続いた。

「もうさっ！ 我が世の春を謳歌してます！
って感じで、もんのすごいっ自信満々に、あれ、押してる人たち見るとね、もうそれは、

黄門様のご印籠か、武器にしか見えないわけよ。私とかわいい赤ちゃんのために、あなた方しつかり働いてちょうだいね、ホホホホー、みたいな、高笑い聞こえてくんのよ！」

「曾我ちゃん、それ、ビョーキ」夏子がつっこみ、麻美ちゃんはおれに、面白いヒトですねー、と耳打ちした。

すると、「大丈夫だよ！ 曾我ちゃん！」

桃ちゃんがにつこり微笑んで、

「誰も曾我ちゃんのこと、眼中入ってないか

ら♪」

わー、出た……！生まれついでの勝ち組・

桃子ちゃんの最終兵器！弱った虫であればあるほど容赦なく叩き潰すんだよね、このヒト。

「桃子おー！！私、あんたのそういうところ、昔っから殺したい程ムカつくんだけどっ！」

「でも確かに……。余計なもの、眼中入れない人の方が幸せだよね。世の中」

夏子がぼそつと呟くと、曾我ちゃんは、

「そうなのよ！私なんか余計なものしか

入ってこないわけ！で、肝心なもん、いつも見落としてる気がする……！」

「余計なものって、例えばどんな？」

キョトンとしてる桃ちゃんに、

「この話しの流れで言うのと、……曾我ちゃん？」

夏子が天然のボケを綺麗にかました。

「ちよっと待ってよ、夏子まで！違うでしょ！他人と自分の身の上を、比べてしまうのが不幸だって話しでしょ！」

「あわわ、そ、そうそう……！ ほら、女ってこの年になると、境遇変わって来るからさ、みんな、どうしてるのか、結構気になっちゃうよね！」

「私なんか、こんなしがない派遣社員でさ、出会いもないしさ、先、見えないじゃん……、全っ然！ この先ひとり取り残されてくのかなあ……。気がつけば老いさらばえた両親と、私ひとり、みたいな……」

「……………」

一気に誰もを黙らせる寒く空つ風が吹き荒れて、慌てて夏子がフォローを入れた。

「そ、そんなことないって。立派に仕事してんだから！結婚なんて大したことないし、私なんかバイトよバイト！子供もいなければ仕事もない。一番中途半端なのは私だって！」

「……………持てる者の、余裕の発言」

曾我ちゃんが、恨みがましい目で夏子を見据えたもんだから、

「ち、違うよ！結婚してたつてさ、やっぱりやるべきことやつてないんじゃないか、とか、私なんか考えちゃうもん！そういう充足感ないと、出産にだつてなかなか踏み出せないもんだより！」

「やるべきことつて？なに？」

桃ちゃんは、尚も空気の読めない質問を繰り返す。

「平たく言えば、仕事とか、夢とかとの兼ね合いかねえ」との夏子の言葉に、桃ちゃんは、

な―んだ、そんなことか、と軽く言つて退け、
「夢なんて、子供に託しちゃえばいいのよ
♪」と、コロコロ笑つた。

強いですねゝ、と耳打ちしてきたのは麻美ちゃん。おれも激しく同意。夏子と曾我ちゃん程度じゃとても太刀打ち出来んだろう。おれなら絶対やりあわない。

「桃子おゝ！」曾我ちゃんは懲りずに、尚もこの巨大な敵に挑もうとしている。

「あんたねっ！ まがりなりにも芸術の最高

学府出として、その志の低さは何なのよ！」

この三人の中で唯一桃ちゃんだけが、東京芸大出身なのだ。

「でも、夢なんていつ叶うか解らないものに足掬われてるんだったら、先産んじやう方が賢くない？」

「だがらっ……！ 後回しにするには、ゼニ銭がいのよ！」

「そのために、良いダンナさん見つけるんでしょ？」

「その他力本願っぷりが理解出来んっ！」

「しょうがないじゃない。女にしか産めないんだから」

「だいたいね！愛情なんてそんな危ういものに一生を委ねるなんて、リスク高過ぎ！」

「あ、それなら大丈夫。潤クン、私にゾッコンだから♪」

「そんなの解んないじゃない！」

「大丈夫より！潤クン、小心者だから大層なこと出来ないって」

すると、「どうもどうも、曾我さん！ お久しぶりです！」と、[〃]潤クン[〃]が絶妙なタイミングで現れて、「潤クンおっそ〜い！」とクネリを入れる桃ちゃんに「ごめんごめん！怒んないで。桃ちゃん」と平謝り。その姿を見て皆、さもありなん、と納得するが、集まる視線に気がついて、ん？ 何か？ と聞く坂崎に、いえいえなんでも、とシラをきり、桃ちゃんは、ネ♪と、最強の笑みを見せた。ダメだこりゃ。一人勝ちだ。

子供に夢を託しちゃえ、：こんなのもちろん論外だけど、桃ちゃんの言っていることつてのも、ある部分、すごくストレートにおれには響く。社会も国家も、自己責任〴〵の大合唱しかしなくなつて久しい今となっちゃ、身近な愛情を信賴している彼女の姿勢つてのは、シンブルで揺るぎなく、今のおれには、そんなものが、どこか羨ましくも感じるのだ。

すると、ずっとパンパン外人の傍らにいた

日本人らしき女性が、坂崎が来たのに気がついて話しかけて来た。

「こんにちは。私、シューマツハーと申します。つい最近ドイツでギャラリーを開設して、日本人のアーティストも紹介していきたくて、今、活躍されている方々の作品展なんかを見て廻っているんです」

坂崎は慌てて名刺を出し、また深々と頭を下げた。それなら彼らもアーティストなので、と、おれと国府田をわざわざ紹介してくれた。

あんまりおれたちに縁のある話しでもねーだろよ、と思いながら、お義理で名刺を頂いたので、こちらもお義理でお返しする。

「国際結婚ですか？」坂崎が尋ねると、

「ええ、あそこにいるのが夫です」と、パンパン外人を指差した。

「あいつ！結婚出来てんだ！」

国府田が驚愕しながら耳打ちしてきたので、お姉さんの顔を再確認すると相当の和製美人。世の不条理に二人で頭を抱えこむ。

パンパン外人夫妻の周辺では、アメリカ人や坂崎の友人らが、流暢な英語で国際的な芸術論に湧いている風。おれらとはレベルも違いそうなので、あまり交わることなく宴が続き、夏子たちは半ば同窓会のノリで盛り上がっていた。

目を凝らすと、会場の端々で、自分の著作物を見せたり、今後の活動予定の話しをしたり、それとなく、ではあるけれど、皆、営業活動に余念がない。おれも、以前はそんなこ

と、さりげにしてたつけ。こんな風に、業界人が集まって名刺の交換だの売り込みだの、そんな風景を何度見て来たことだろう。坂崎の作品は特に何を指摘されるでもなく、その空間を虚しく取り囲んでいた。

……………。

麻美ちゃんじゃないけれど、本当に「アーティスト」って、何なんだったつけ？ もしかして、桃ちゃんにとつての「赤ちゃん」と同じで、ただ単にみんな、「アート」ってもん

で間^まを持たせたいって、だけ？

……おれも？

グルンツ、

一瞬目眩がして、何でここにいるのか、解らなくなった。

いやおれだけじゃない。本気で喋って、本当に楽しいと思ってる人なんてこの空間に何人もいない。ただ単に義理でやってきて

適度にやり過ごす、それだけのどうつてことのない日常的一幕。それはそれでいい。

ただ、いざという時に足を掬われない様に、世間の人よりほんの少しだけ、自分の時間軸を庇護して生きている――、アーチストって、そんな程度のものなのじゃないだろうか。

でもおれは…、ここにいて多くの業界人よりしく、ただただ辺りの空気を読んで、小賢く立ち回ってきただけで、結局のところ、アートとしても、エンターテイメントとして

も中途半端な作品を、大量に仕上げてきただけ、なのかもしれない。

第5章

鳴けない鳥



おれは迷っている。

二代目の家のアトリエを使わせてくれと申し出たものの、御苑の一件以降、連絡しづらくなつて既に一カ月がたっていた。あの爺さんにつき合うのも相当厄介なので、まあもういっかと、その件は半ば投げていたのだ。

けれども、ここのところ、ちよつと居たたまれない焦燥を感じている…。

自分で言うのも何だが、おれは、結構空気が読める。しかも、それを長所だと思っていた。特にこの仕事において、クライアントの求めてるイメージを直感的に見抜く力は必要絶対条件だから、天職だとも自負していた。でも最近思うのだ。KY って言葉があるけれど、空気読んでるだけの奴、KYD するのも絶対ある。こいつらはひたすら空気を読

んで、オートマチックなオウム返しを繰り返
し、結局何も生み出さない。まるで台風の目
の様に、何かを回避し続けて、肝心要の魂が
ぽっかり空になっている。昨今では、そんな
ものの方が、何故か重宝されるのだ。おれも
知らずにそうなっていて、ひたすら何かを回
避した。だから結局届かない。おれの絵には、
倅ソツがない。だけどそこには、旨味もない。

おれはこのことに、ずっとどこかで気づい
ていた。でも、締め切りに追われつつ、仕事

なんだからこんなもんだと言い聞かせ、頭を麻痺させ続けてたのだ。頓挫したイラスト集でも、作りながらどこか物足りなさを感じていた。もつと出来るはず。でも、そこまで行ききれていない現実を直視したくもなくて、誤摩化して、自分に嘘をついてきた。

金がなくなるまでの間に、自分の表現を確立したいと、焦燥に駆られはするのだが、この狭いアパートで、今まで仕事してきた同じ環境で描いてみても、どうにも気分を一新出

来ず、やっぱり二代目のアトリエを使わせてもらえないだろうか：、そんな思いに再び苛まれる様になったのだ。

それにもう一つ。バイトから帰って来た時の、夏子の視線。それが、もうほとんど、生ゴミを見るかのごとく冷ややかになってきて、さすがのおれもちよつと耐えられなくなってきた。

「ただいま」

毎晩、夏子が帰って来ると、大抵おれは、本かネットかDVDを見ながら目をあわせず「あ、おかえり」と、言う。夏子はおれを一瞥し、鼻の穴をひくつとさせる。見てなくとも、気配で解る。そのあと、バッグの置き方、とか、着替えの置き方、とか、一挙一動いちいち乱暴で、思いつきり何事かを無言であてつけてくる。最近は、ほとんど床に叩き付けている。

ガスポンツ！

そこまで、派手な音がしても、おれは動じないフリをする。実は、ものすごく怖い。

バンツ、ズガンツ、ジュー、ガシユツ、ドスツ、バシユツ、等々、幾十かの音が鳴り止むとご飯が出来上がる。夏子の料理は基本、美味しいのだけれど、最近はある意味すごく気合いを入れて作ってくれていて、嫌な気をいっぱい盛り込んでくれている。そして、対面で無言で差し出されるもんだから……何の味もしない。

そして、ある時、沸点に達したのだろう。

ガスポンツ！

帰宅後、いつもの音がしてから、夏子は寝室に直行。それから数十分出てこなかった。ただならぬ気配を感じて、呼びかける。

「夏子く？ ご飯、…食べない？ 食べに行く？」

すると、すごい剣幕で「いらない!!」

「何か作ろつか？」

実はおれは、わりと料理が好きだ。でも、

手出しすると怒られるので、いつも任せてる。

「ほつといて!!!!」

うわゝ。嫌だゝ。この展開……。生理？

しょうがないので、ありものの具材で炒飯を作り、そして、もう一度呼びかけた。

「ご飯出来たよゝ。食べよう？」

もそもそと寢室から現れた夏子の^{まぶた}瞼はまっ

赤に腫れ上がり、鼻の下は鼻をかみ過ぎてボソボソに荒れている。おれとは目をあわせずに無言でダイニングチェアに座った。

おれも黙って食べ、夏子も黙って食べ、食べ終わる直前に、夏子が何ごとか呟いた。

「……いつま……?」

聞こえないので聞き返すと、十倍くらいの音量で「いつまで!! こうしてるの!？」

「……:……:」

…家賃は八万五千円。おれは事務所としても使っているの、六万円出している。生活費は適当に折半で、光熱費はおれの方が居住時間が長いから全額払っている。…なので、

金銭的にはそれほど、負担をかけているわけでもない、はず。正直なところ、なんで怒られていいのか、今ひとつ理解出来ない。

「仕事ないんだったら、営業とか行ったりすればいいじゃん！」

狭い家の中、解りやすい労働をして帰って来る夏子にとって、おれのやっていることは全て、遊びにしか見えない、：そりやそうだ。「朝からバイトして、疲れて帰って来てっ！　　いつつもそうやってだらだらしてるの視界に

入る……と、ものすごく苛々ッ……!! そんな自分もすごく嫌! もうっ! どうしていいか解らない……!!」

「……、でも、解るんだけど、解ってよ。おれだって、今までみたいな営業繰り返したところ、で、先、見えちゃうし」

「だからって、何にもしないでいても、しょうがないじゃない!」

「何もしてないわけじゃない! ……これでも、考えてるよ」

「ネットみたり、漫画読んだりするのが!?
何、考えてるっての!? 教えて!」

「だって、何か作る仕事って、そういう時間
が必要だって、そのくらいのこと、夏子に
だって解るでしょ!」

「そのくらいだったら、解るわよ!」そう言
いながら夏子は立ち上がり、おもむろにマウ
スを握った。

「そんじゃ、これも、その一環!」と言って、
開いたのは…、おれがダウンロードした秘蔵

の海外エロ動画。

この、状況……。よりによって、……金髪美人
がお尻を扇情的に突き出して、アナルを開い
たり閉じたりする……。その動画。この緊迫し
た空気の中で、それは、マヌケにも、きゅぽ
り、きゅぽり、と、開閉を繰り返し、……。こ
の状態で何を言っても通じるわけもなく

………いたたまれない！

おれはたまらず財布とタバコを握り外に飛
び出した。そして逃げる様に走った。恥ずか

しい！いや違う！情けない！これも違う！
自分が嫌になる……こともない！巨大なマヌ
ケ？ そんな言葉が頭に浮かび、分析不可能
なこのくだらない状況に、なぜか頭に血が上
り、顔が火照るので闇雲に走った。公園のベ
ンチで息を切らしたものの、まだ……脳が充
血してて何も考えられない。十分ほど、火照
りを冷し、少し落ち着いたらなんだか虚しく
なってきたので、タバコに火をつける。

「……」

春になると花見客でごったがえすこの公園も、この季節のこの時間には、人っこ一人見かけない。整備が行き届いてる分だけに、妙に薄ら寒いな、と思つたら、荷物を堆く積んだママチャリの脇で浮浪者らしき人が寝ていて、ここからだただの黒い固まりにしか見えなけれど、微かに息づかいが感じられた。

……ここにいてもしょうがないじゃん。

なんでか冷静にそう思つたので、立って歩き始めたのだけれど、すぐ帰る気にはならず、

しばし川沿いを散歩。いつも行かないところまで、どんどん歩いてみた。暑くもなく寒くもない、一年のうちで最も心地の良い気候。微かに蒸せる。リーリーリーと鈴虫が寂し気に鳴き続ける公園を抜け、川沿いの住宅街の坂を登ると、夕食後のくつろぎの光が漏れていて、この一画だけで、どんぐらいの人間が生息してるのかな。外から見たらひっそりとした住宅街だけど、全部の壁と屋根をひっばがして透視したら、どんだけの密度で人間

がごっさりいるんだろう。その中には、おれらみたいにくだらないう夫婦喧嘩をしてるものもいれば、セックスしてんのもいれば、ひとりぼっちもいれば、平和にガキを叱ってる家族もあるのだよ。あーあ。

気がつくと方南町に出て、コンビニに立ち寄ると週刊誌は、ミュージシヤンの自殺の記事で盛り上がっていた。

——今の世の中には本当に音楽が必要なのだろうか

置き土産に、こんな素敵なお土産を捨て台詞。：しみじみと虚無な気分になり、しかし、セブン・イレブンは何故こんな独特の匂いが漂うのか、いつも疑問に思う。

ブックオフで、買おうと思っていた根本敬の新著をゲット、マクドに入って夢中で読み耽っていると、すぐに閉店時間で追い出され、近くにまたあったセブン・イレブンで再び匂いを確認。仄かなおでんのスチームサウナ：？そんなところか。

丸ノ内線の車庫が見えた。地下鉄なのに休む時は剥き出しなんだ。なんとなく……、無意味に深夜徘徊するはめに陥っている、ほぼ引き籠りの自分と境遇を重ね、勝手に愛着を感じしばし眺めて見たのだけど、空に感じる夜の密度とは裏腹に、整然と並ぶシルバーの車体は少し素っ気なく、おれのつまらん共感なんか軽くあしらい跳ね返してた。そういえば、昔はワインレッドに白いグルグルした模様がついていて、あの車体だったらもう少し話し

の出来る奴だったかもしれないな、なんてクサクサ考えてたら、またまたセブン・イレブン。この地区はやけにセブンが密集してないか？ と思いつつ、こここの匂いも確認し、自分の不毛な行動に倦怠しながら、またあてもなく歩き始めた。

さすがに普段の運動不足がたたたり、相当両足が重くなって来た頃に、ダメ押しの様にもう一件セブン・イレブンがあり、もう解つた、と心で囁きスルーする。気がつけば、景色は

だいぶ都心チツクになつていて、あ、ここ知ってる、と思つたら、新宿中央公園。へえ、新宿つてこんなに近かつたんだ、と、きもち感激し、熊野神社と段ボールハウスの群れを抜け、公園の茂みの中を抜け、中央にかかる橋からオレンジ色に煙る新宿方面を眺めつつ、：わかつたよ、と呟いた。

その日は歌舞伎町のマン喫で、浅い惰眠を貪った。

遅めの午前中、歌舞伎町はいつきにやる気をなくしたみたいに気が抜けている。十二時間以上、携帯電話を持っていない状態つてのがすごく久しぶりだったことに気がついて、これってなんて爽快なんだろう、と再認識。夏子はもうとつくに出かけているはずなので、とりあえず家に帰る。シャワー浴びて歯も磨いて、うっすら筋肉痛は残るものの、だいぶスッキリした。目玉焼きを作りキャベツをきざみトーストサンドにして、遅いブレック

ファーストも楽しんだ。さて…。

二代目の電話番号は知らないので、波さんに連絡してみる。

波さんはおれからの連絡にやけに喜んでくれて、二代目のうちのアトリエ云々、事情を話してみると、いつものあの行動力で強引にナシをつけてくれたのだ。

10月31日の残金 ¥456,426

「こんにちは」

いつもの様に、勝手に引き戸を開ける。いつもの様に鍵は空いているけど、二代目は出てこない。勝手にアトリエに入って、絵を描き始める。描き始めて、三十分くらいすると、きまつて二代目は気配を匂わせる。

「こんにちは！ 絵、描かないんですか？」

「……」

これも全くいつも通り。全く無関心ならともかくも、何だかんだ気のあるそぶりを匂わ

せつつ、決して素直になれない。二代目の行動パターンはだんだん読めて来た。ホント面倒臭い爺さんだ。

喧嘩した晩は、夏子もだいぶ心配してくれてたみたいで、翌日真剣に話し合った。

平行線ではあるものの、おれがちゃんと絵を描きたいっていう話しには、とりあえず理解を示してくれて、お金が続く限りは、頑張って…、と、そう言ってくれたのだ。

二代目の家のアトリエは、夏子にも手伝つて貰い、一日で使える程度に片付けた。昭和初期の建物は昨今じゃありえない余裕のある贅沢な造り。自然光の入りが考え抜かれているのか、本当に心地良い。部屋の整理は心の整理につながるとよく言われるけれど、この静寂な空間にいと、混乱していた頭がクリアになり、あれも描きたい、これも描きたい、楽しいインスピレーションが沸々湧いて来る。そんなアイデアを整理して、逸る気持^{はや}

ちを抑えつつ、ラフスケッチばかりに時間を費やして、しばらくはそんな風に創作意欲を高めてた。

十二時になると、二代目に声をかける。

「お昼、頂きませんか」

夏子が作ってくれている二人分の弁当を、結構楽しみにしているのか、二代目もお茶を入れてくれたりして、正午に差し込む心地よい木漏れ日にあたりながら弁当を食べるこの

時間が、今のところ、彼と交流出来る唯一の時間帯になっていた。所場代も払わずアトリエを使わせてもらってるので、この弁当があると、おれとしてもちよつと気が楽で、夏子には本当に、感謝している。

「鈴掛の絵、描かないんですか？」

おれは、自分だけアトリエを使うのも気が引けるので、たびたび聞いてみるのだが、大抵返事はない。

「あのプラタナス並木って、映画のワンシー

ンみたいって思ったものの、結局何の映画か具体的に憶いだせないんですよね。なんか思
いあたる映画ってあります？」

「：映画は、見ない」

「どうして？」

「あんなもん、嘘っぱちだ。くだらん」

「そうなんですけど：。それを言ったら芸術
だのなんだの、全部嘘っぱち、ですね」

「：だから、嫌いなんじゃない」

「でも、たまに、真実よりも感動したりしま

せん？」

「……」

「例えば……お父さんの唄っていた歌の内容と、実際のお父さんのとられた行動、どちらかを思い出として残すとしたら、おれだつたら嘘っぱちでも歌の方をとるんじゃないかと」

「……。いらん世話だ」

「……すいません」

「……卵がうまい」

「は？ あ、卵焼きですか？ 夏子の卵焼き、旨いんですよ。甘さがちょうど良いでしょ？」

「……」

だいたいこんな感じの会話が続く。基本的に、こっちが話題提供しないと終止黙っている。なので最初はしんどかったが、これでも徐々に喋る様になったのだ。おれはアトリエを掃除して遅くとも六時には帰る。そして、夏子と一緒に夕飯を食べる。こんなきちつとした

生活も、やってみるとだいぶ清々しかった。

大まかなテーマを幾つかしぼったところで、図書館やネットで資料を漁り、いよいよ作画に取り組み始めた。

ところが、いざ描き始めてみると、長年締め切りに追われて来た弊害か、何を描こうとしても、適度に具合の良いところで、見せるものに、仕上げてしまう癖が抜けないのだ。おれの手は、いつの間にか、良質な商品

を、丁度良く、仕上げるマシーンに変わってしまっていた！ 学生の頃にはあたりまえに出来ていた、絵画作品を描く、という、極凡庸な行為が出来なくなっていることに愕然とし、しばらくは、そうじゃない、そうじゃないでしよ、と念じながら、画材をとつかえひつかえし、一人ジタバタと七転八倒し続けた。

二代目は、弁当を喰いながらおれの絵を横目でチラチラ見る。大抵何を言うでもないの
で気に留めなかったのだが、ある時、虫の居

どころが悪いのか、おもむろに彼は口を開いた。

「…なつとらん」

「……」

まだ、途中なんだよ、あんたに何が解る、
と思いつつも、…少し傷つく。

「鬼畜米英の猿真似！ や、弥生の腕には、
ま、まるで及ばんっ！」

ああ…、また何かパフォーマンスが始まっ
たよ…、とげんなりしつつも、ここで相手に

してもしようがないので、はいはいはいと聞き流す。

「弥生さん、美大とか行かれたんでしたっけ？」

「…び、美大なぞ、下らんっ！　そこにはっ！　行かせん！」

あゝあ、かわいそうになあ。おれも親には猛反対されたけど、最終的には承諾してくれたもんね。

「今おいくつなんですか？」

「…そろそろ、四十」

…ってことはおれとたいして変わらんのか。

「なんでそんなに反対されたんです？」

「芸術…なんて！…無用の、長物ちようぶつっ、だから、…じゃっ！」

あ、やべやべ、興奮させちゃまずい。話題、変えなきゃ。

「金造さんは、いつお亡くなりになったんです？」

「…や、弥生が、まだ中学生の時、じゃ」

「ご病気か何か？」

「……………」

ん…？　まずいこと…、聞いたか…？

「…………卵がうまい」

「は…!? あ、卵焼きですか？　夏子の卵焼き、旨いんですよ。甘さがちょうど良いでしょ？」

この会話、こないだもしたよな。ま、いいや。どうせボケてんだし。

「…嫁と息子は、来んのか」

「え？ 息子？ ああ、昌弘？ あれは、国府田の息子で……」

「来んのか」

「あ、ええ。嫁なら、近いうちに……」

「……」

このじじい、どこまでボケてんのか、ボケてるフリしてるのか、時々解なくなる。最初に夏子を見た時、弥生さんと勘違いしたけれど、あれも本気だったのか、時々疑問に思うのだ。どこか確信犯で、わざと幻想を見て

るんじゃないかという気さえする。

ある日、波さんが遊びにやって来た。

「ああ、やっぱり描いとらんかったかあ」

波さんは、ひどく落胆してそう言うのと、

「いや、先生のお力添えで、今度ばつかしは
絵を描いてくれるんじゃないかと、一縷^{いちる}の望
みを繋いでおったんですがのう……」

例の老人絵画グループで作品を持ち寄って
の品評会だが、もう来週に迫っているらし

い、のだが、…おれは何も聞いていなかった。
「すいません…。いろいろして頂いたのに、
全然お力になれなくて…」

「いやいや、先生のせいじゃございません
よ！こいつの心がけが悪いんです」

さすがの波さんもだいたいぶ腹が立っているの
か、結構マジな目つきで二代目を睨みつけた。
「毎回毎回、次は必ずって約束しておいて裏
切るのですから、まったくもって言葉も出
ませんな！仲間たちだって業を煮やしてて、

メンバーから外せってさんざん言うてきとるんですわ！ わしがどんなに必死で、もう少し待ってみようってみんなに言い聞かせとるか、解つとるのか!？」

「……」

黙り続ける二代目に、おれは溜まりかね、「まだ、あと五日くらいありますよ？ 何か描いたらどうです？」

「わしは……」

珍しく弁明か？ と思つて二人で耳を傾け

ると、

「わしはっ！ほ、本物の、芸術家っ！じゃ
いっ！気が乗らん時はっ、か、描かんっ！」

おれと波さんは目を見合わせて、嘆息した。

「もうダメですよ。このヒト。メンバーから
外しちゃった方がいいんじゃないですか？」

「やっぱりダメかのう……」

波さんはため息混じりに呟き、

「二代目、あんた、ここらで、お父上の弔い
合戦っちゅーことにはいかんかの？絵を描

いてみたら、あんたもお父上の気持ちを少しは汲んで見れるのと違いますかな？」

「……」

「あんた、絵を描いたら娘さんが戻って来るゆうとったじゃないか？」

「あの、それ、前も言っていましたけど、どうしてなんですか？　なんで二代目が絵を描いたら、娘さんが戻ってくるんです？」

「あれ？　先生はその話し、聞いとらんかったですかの？　いや、なんでも娘さんが出て

行かれた後に贈り物をしてきたらしいんですわ。それが、油絵の具のセットだったとか」

「え!? そうなの? それは初耳。なんで、そんなもん送って来たんですかねー?」

「……あの子は、ここで、よう、絵を描いとった」

「へえ、お祖父さんと一緒に?」おれが聞くと、しばし、二代目は黙り込んで、

「……あそこにある絵は、じ、爺さんの遺作、なんじゃ」

「へえ〜！ 亡くなる直前？ 未完の大作つてやつですか？」

「あれを描ききれず、爺さんは心残りじゃったんじゃない。それで、……弥生に、あとを頼む、そう言い残して、死んだ」

「……!? 続きを描けって!? そんなこと、出来ないですよ、普通」

「…弥生は悩んだ結果、パリのモンマルトルに絵の修業に旅立った」

本当かよ……？ だって、その頃弥生さん、

中学生だろ？ だいたい、喧嘩して家出したんじゃないかったっけか？ おれは話し半分に聞き流しながら、前に夏子がチラ見した、佐原氏の遺作の絵にかかる布を全部捲つてみた。「そんな大事な作品を、こんな風に放置しておくのも勿体ないですね」おれが言うのと、「未完は未完なんじゃないっ！ 芸術に妥協はないんじゃないっ！」

：自分で描いたんかよ、とツツコミたくなるが、まあいい。無視無視。

波さんも寄つて来て、

「いやゝ、立派な作品ですわい。完成が見たかったですなあ。他の絵はないんですかいな？」

「：他の作品は、爺さんの生前に、だいたい美術館に寄贈したんじゃ。私利私欲のない立派な人柄じゃった」

おれは、その遺作をまじまじと眺めた。埃を被ってしまったって解りにくいけど、八十パーセントくらい描き終わっているのであろう、

モダンな街並のその絵の線は細やかで、衒てらいがなく清々しい。俯瞰で見下ろす視点で描かれていて、街への愛着がしみじみと伝わって来る。見ていると、心の澱おりが濾過ろかされて行く様な恬淡てんたんとした絵だった。方向性こそ違うけど、おれもこんな絵が描けたらいいな、なんて、素直に思ってしまう様な……。が、しかし、そんな死に損ないの爺さんが描いたにしては八十号くらいの意欲溢れる大作で、おれは佐原金造の絵なんて代表作くらいしか知らない

のだけれど、：旺盛な人だったのだろうなあ。

「金造さんってどんな方だったんですか？」

「：洒脱しゃだつで、社交家で、客もよう来とつた」

「奥さんは？ 金造さんに似てたんです？」

「：綺麗な女じゃった。男性社員の憧れのマドンナじゃった」

「へえ。どうやって口説いたんですか？」

「：わしが、口説かれたんじゃ」

「えゝ!! な、なんで!？」

「このスケコマシ！ 二代目もなかなか隅に

置けんわい！」

波さんは嬉々としてつつこんでるけど、そんな話しか……？

「当時の女性で男を口説くなんて、よっぽど進んでるんじゃないですか？ 金造さんには、反対されなかったんですか？」

「さすがに芸術一家だから、やることなすことハイカラだったんじゃないですかいの？」
波さんが言うと、

「爺さんも、暖かく迎え入れてくれた……。爺

さんには親切にしてもろうた……。憧れの父親
だった……。なにもかもが。優しくて、よく
気がついて、家族にも一切迷惑かけんかった。
贅沢もさせて貰った。ホテルでの食事なんて、
わしには到底想像もつかなかったんじゃ」
二代目が時々吹いているホテルの食事の話
し、扇千景とかなんとか。あれも実際の話し
だったのか……。

「でも、……わしは死んだ弟にすまない様な気
持ちがずっとあった。あいつも、父親にそん

な風に振る舞れたら、どんなに嬉しかったかと……。自分の父親と同じことをしている人間が、何故こういう暮しが出来るのか、どんなに考えても、……答えが出なかったんじゃない」

おれも、波さんも、口籠くもった。それに関し

ちゃ同情する。確かに世の中では、同じ業種でここまでピンキリなものもないだろうと、よく思う。芸術家は金持ちか貧乏人のどっちかしかないんじゃないか。つっても、ほとんど貧乏人だろうけど……。でもたぶん、こんばん根本

のところ、理由が潜んでいるんだ。ハンダ
リー精神ってよく言うけど、金を得たら終わ
り、みたいな神話。この神話が芸術って概
念を支えていたりする。実際のところ、お
れだって、金は関係ない、とか言っちゃって
んだもの。でも、それ以前のレベルで頑かたくなに
蔓延はびこっている。お金アレルギーは正当化し
たくない。金は汚いとか言う奴に限って、最
終的に金にまみれてふんぞり返っている気が
するのだ。あれは、独り占めするために言っ

てるんじゃないか、とさえ思う。

一方で、観賞する側からしてみたら、値段が高いからこそ有り難い、みたいな神話もあつて、両極でメビウスの輪の様に捻れている。結局、金と芸術は切り離せない。

あたりまえだけど、金がなければ生きてけない。かといって、金だけあつてもやつぱり生きてはいけないのだ。

「まあ、もう昔のことじゃ。あんたがそんなに悩むこともあるまい。あんたが精一杯、幸

せに生きることが弟さんの供養になるんじゃないのかの？」

二代目は、またも黙りこんでしまった。

波さんは、今回の品評会も仕方なく、二代目不参加で遂行することにした。とはいえ、納得してのことではない。その濁りのない目を一層ギラリと光らせて、念を押したのだ。

「次回こそは、信じておりますぞ！」

描かぬなら、描かせてみよう、ほととぎす、ゝか。波さんも気が長い。何だかんだ言

いながらも、この捻ひねくれた爺さんと懸命につき合っ
てあげているんだもの。幸せ者じゃん、このじじい、
と思つて二代目を見ると、きもち顔を俯そむけたりして、
こころなしか反省している様にも見えたのだ。

第6章 絵の具と手紙



「あんだあ、どうしょーるん？ 仕事大丈
夫ーなんか？」

「：まあ、なんとかやつとるよ」

「このあいだ夏ちゃんに聞いたら、えらい暇
そう、いいよってんよ」

内心、余計なことを言いやがって、と思い

つつも、「大丈夫だつて」

「あんたがそげな甲斐性なしじゃ、夏ちゃんにもすまんけえのお。いつまで、そがいな絵なんか描いて遊んどるん？ 孫の顔もはよ拝ませてくれんと、うちらも先も長くもなかるうも……」

「……………」

「ともかく、正月にでもじっくりその話し
せんとな。ほいで、今年はいつ帰つて来る
ん？」

……すごく、帰りたくない。

おれは、約二カ月、ほぼ毎日二代目の家へ通っていた。ようやく最近脂が乗って、満足のいくものも幾つか描きあげることが出来たのだ。そう。母親の言う通り、おれは、絵を描いて遊んでいる。それが何か？　そう開き直りつつも……。

11月30日の残金 ¥300,858

先月はほぼ金を使わないで二代目の家に通っていただけだから、それほど一気に貯金高は下がらず少しほっとする：が、そろそろ先が見えて来た。昔のクイズ番組『タイムショック』みたいな時計の音が、心でカチカチカチカチ秒を刻み、不吉なファンファーレが鳴り響く。：もう時間がない。少し、ピッチを上げなければ：。

十二月に入ると、古い家の板の間はだいぶ

底冷えした。石油ストーブを物置から引っぱり出させて貰って炊くと、静かな板の間でやかんがシュンシュン音をたてて響く。最近では、夏も冬もエアコンばかりだったから、この感覚は久しぶりだった。小学校の教室や大学のアトリエを憶いだし、懐かしく、とても落ち着く。それに誰からかかってくるんだか、最近よく鳴る黒電話のリリンという音。これも懐かしい。描いてる間はいろんなことが頭をよぎる。そういえば、実家も昔は石油

ストーブだったから、よくミカン温めてみたりしたつけ。こんな音聞きながら、年賀状を作ったよなあ。年賀状は毎年木版に凝っていた。プリントゴッコが出る前の、あの手彫り木版年賀状、楽しかったなあ。

今年は年賀状を出さない。

フリーで仕事を始めた当初は、何枚出したつけ？ 夏子と二人で、三百枚くらいは出してたかな。ほとんど営業年賀状だから、戻ってくるのは百枚もなかったな。あんなの

も、どんどんバカらしくなった。

ホームページには、新しく描き上げた絵をとりあえずアップしたりしているけど、なんの反応もない。そんなもんだと解っているけど虚しくなる。あれも、バカらしい。もう閉じるか。フリーになって初めて持った携帯電話、これも、もうウンザリだ。もう、解約するか。もう、廃業するか。誰にも求められないのに、なんでこんなに必死に描いているのだろう。そんな想いが駆け巡る。苦しい。

苦しい。こういう時って、どういうきつかけでみんなやめれるのだろう。おれはききわけが悪すぎる。どうしたら、三島みたいにききわけがよくなれるんだ。おれは、成功者の遺作を一瞥。時代が違えばおれだって：、そんな気持ち^{よぎ}が頭を過り、軽い自己嫌悪をもみ消す様に、おれは二代目に聞いてみた。

「金造さんは、どうやって成功したんですかねー」

すると……、

「資本があつたからだ」

……実も蓋もない答え。まあ、そうなんだろうけど、それだけじゃないだろよ。このあいだ、ウイキペディアで彼の事を調べてみた。そりゃ当時の日本で二十代で洋行出来るなんてのは、よほど良いところのボンボンなんだろうけれど、それでも、大成したのは、わりと中年になってからみたいだったし……

「若い時は売れてなくて、それなりに苦勞してたんじゃないんですか？」

「それがなんじゃいつ！一番の資本は親の理解、じゃいつ！」

……どの口でほざくよ？このじじい。

「じゃ、弥生さんは、やはり苦労されたんでしょうね」

「……かもしれん」

「後悔してます？」

おれは、半ば自分の親に尋ねる気分で二代目に聞いてみた。

「……」

「どうせ何も後悔してないんでしょ？」

この糞じじい、と心で思う。すると、

「：わ、わしは……弥生を応援っ、しとった、わいっ！ や、弥生はっ、げ、芸大を主席で卒業して、パ、パリへ行つて！ 絵を、描いとるん、じゃいっ！」

「はあ！？ もう、言ってる事、支離滅滅ですよ。いい加減にして下さいよ。美大は反対して行かさなかつたんでしょ？ それに、出て行つたんでしょ？ どっかの外人と！」

おれは、このところきもち鬱気味で、あまり二代目の出鱈目話しにつきあう余裕もなかった。うんざりして、しばらく黙って弁当を食べていると、二代目は、少し上目遣いにおれを見て、

「：あんだ、最近元気がないな」

え？ 二代目が心配してくれてる？ おれは耳を疑った。

「ああ、はい。もう廃業しようかなあ、とか、考えちゃって…」

「……懸命な判断だ」

ム力つくなあ……。ちつとは慰めろよ。

——一番の資本は親の理解、この言葉はおれえぐの心をするどく決る。夏子の親だって、別に芸術なんて理解出来てはいないのだけど、夏子の作った絵本を楽しむ気に見せびらかしたり、夏子のデザインした広告が駅なんかに張り出されると、わざわざ出かけてデジカメで撮影したりする。そんな親バカ丸出しな行動でも、おれには羨ましかった。美大に行

かせて貰ったのは感謝しているけど、おれの親の場合、おれが何を作ろうがまったく興味が無い。たまに、イラストが掲載された雑誌を見せたところで、キョトンとして、これなんぼ儲かるんじゃ、くらいのことしか聞いてこないんだから。その度に、なにか失望する……。結局基盤が気弱なんだ、おれなんて、どこかそんな恨みがましい気持ちにも時々なってしまう。

おれはアトリエを虚しく眺め、昔の画家は

幸せだよなあ、こんな家を建てたらどんなにいいだろう、赤字申告だらけの自営業者なんて信用ゼロだからローンさえ組んでももらえないし……、そんなことばかり脳裏をよぎる負のスパイラルに嵌り込み、^{はま}さもしい気持ち振り切る様に、おれは激しく首を横に振った。そして、乱れた心を静める様に、この部屋で佐原金造がどんな風に制作していたのか、彼の姿を心に描いてみようとした。

……。

でも……、実はピンと来ない。いや、前から疑問に思っているのだが、おれが今使わせて貰っているこの机もイーゼルも、……やけに新しい。それに片付けた時にも思ったのだけど、古い画集なんかはあっても、この部屋にある画材道具全般に統一感がなくて、彼がどんな風に制作していたのか、いまいち見えてこないのだ。

「金造さんは、いつもどのあたりで描かれてたんですか？」

「……窓際じゃ」

おれは窓際によつて想像してみてから、荷物をごそつと纏まとめた壁際の画材の段ボールを覗き込む。ぺんてるクレヨン。中学生の使う様な黄色い筆洗。……これって、娘さんが使ってたってこと？　なんか、いまいち迫力にかけるんだよなあ。こう、なんていうか。例えば、岡本太郎記念館なんかだと、道具の一つ一つなんかにも拘りが感じられ、こんな画材を使ってたんだ！　なんて、発見があつたり、

壁や机に画家が頻繁に使いそうな絵の具の色
なんかが染み付いていたりすると、彼がどん
な風に制作していたのかが目に見える様で感
動するのだが、ここの画材の場合、あまりそ
ういうフェティシズムが感じられないし、机
も絵の具なんてついていないし、なんか全部、
……安っぽい。

「金造さんの使っていた画材って、もうあん
まりないんですか？」

「だいぶ片付けた。……あとは、弥生がフラ

ンスに持って行きよった」

「へえー、勿体ないですねー。ここ、記念館にでもすれば良かったのに……」

こんな偏屈な老人一人住ませておくんだったら、本当に記念館にでもしていた方が周りの住民も喜んだろうになあ、と思う。

すると、段ボールのとなりの隅に、埃を被っているものの、まだ新品同様の外国製油絵の具のセットがあつた。手に取って、それを開くと、そこには、封筒が一枚、

「お父さんへ」

慌てて閉じて、二代目を見ると、彼は弁当とお茶を片付けて引き上げようとしている。おれは、油絵の具セットを咄^{とっ}嗟^さに隠し、

「あ、弁当箱、うちで洗いますから置いとい
て下さいね」

二代目は、こくつと頷いて、アトリエを出て行った。さて…、幾分悪趣味だけど、ごめんなさい…。

「お父さんへ

お元気ですか？こちらは十月だというのに、もう冬支度です。

街路樹は黄色く色づいて、通りを埋め尽くしています。

夏が短くて寂しい気もしますが、私はこの季節のデュッセルドルフが一番好きなんです。こちらに来て一年たちました。季節が一回巡ると、浮き足立った心も少しは落ち着き、

やっとお父さんに手紙を出す気持ちになれたところですよ。

アルベルトにも彼の家族にも、とても優しくしてもらってます。彼の姪っ子たちがよく遊びに来てくれたりして、だいぶうち解けて、楽しい日々を過ごしています。彼は、なぜかお父さんのことが気に入ったらしく、お父さんの真似ばかりしています。

仕事の方は、まだ駆け出しで、失敗ばかり

ですが、やりがいのある仕事なので、頑張つて行こうと思つてます。

それと、このあいだ、お母さんとお兄ちゃんが遊びに来てくれました。お母さんにとつては、はじめての海外旅行で飛行機をすごく怖がつていました。でも、ヨーロッパの街並には憧れがあつた様で、ひどく感動していましたよ。本当は一度くらい、家族全員で海外旅行をしてみたかった。

こつちに来るときは、何も告げずに出かけてしまつてごめんなさい。

本当は、ちゃんと挨拶して、晴れ晴れしく渡航したいと願つてました。

日本を離れて暮らすにあたつて、お父さんとの間にもしこりを残しておきたくなかつたんです。

でも、やはり無理でした。その原因は…、ここに書くまでもないですよ。

いい結婚式になる様、願つていたので、あ

のことは本当に残念でした。

私は、お父さんを恨んではいません。

でも、お父さんのことを思うと悲しくなります。

私はこれでも、お父さんの気持ちを他の家族の誰よりも汲めているのではないかと自負しています。他でもない私自信、お父さんに良い夢を見せてもらったと、今では感謝しているところも、ちよつとだけ、あるのですよ。

でも、人は現実の中で生きて行かなければならないと、私は強く思っています。私はお父さん似で、すごく脆い人間だけれども、それでもなんとか頑張って、自分のやりたいことを見つけ、愛する人を見つけることが出来ました。そんなこと一つ一つが糧となつて、遠い異国で逞しく生きて行くための力を育んでくれている様に思います。

お父さんは、たくさん苦勞をしてきたので、

苦しい気持ちも多々あると思います。それは、理解しているつもりです。

でもどうぞ、まだまだ人生は長いのですから、お父さんにとって真に自分だけの人生を掴み取ってもらえないかと、私は折に願っています。

私にとっては、絵を描いたことが、その手助けになりました。今となつては、思い切つて美大に行つて、本当に良かったと思つています。

先日、こちらの画材屋さんで、とても素敵
な油絵の具セットを見つけたので同梱します。
もし、気が向いたら、絵を描いてみて下さい。
絵を描くのはとても楽しいですよ！良い
絵が描けたら、一番に私に見せて下さい。飛
んで帰って辛辣な批評をしてあげます。

それでは、またいつか、会える日を願って。

1996/10/27 Düsseldorf

弥生」

：お母さん!? お兄ちゃん!? 何だこれ？

おれは頭が混乱して、二代目の言っていた
あらゆる話しが一から解らなくなってきた。
彼の話しは支離滅^{しりめつ}だけど、基本は押さえてる
つもりだったのだ。が、しかし、この時点
で奥さんが生きてた!? どーいうこと!? それ
とも離婚? であれば、なんで今現在、その
奥さんの実家にのうのうと住んでいる? も
う! わけ解らん…!

翌日、おれが行くと、二代目は廊下の電話にでている。耳をそばだてると、うん、とか、すん、とか、しらん、とか言ってるだけで、この電話の相手も相当しんどいのだろうなあ、と、冷ややかに思いつつアトリエに入る。

すると、まもなく電話をきった二代目がアトリエに入ってきて、おれの二メートル後ろにじっと座りこんだ。これゝ、最近多いのだ。絵を描いてるのに興味があるのか、自分が描きたいのか知らんけど、気になって集中出来

ないから止めて欲しい。

「あの、なんか用ですか？ 絵、描きたいんですか？」

たまらずに、おれは聞いた。

「……………」

「弥生さんに貰った絵の具で描かないんですか？」

といつても、もう十三年前の油絵の具がカピカピに固まっつてて使えないことは、昨日確認済みだけど……。

「……………」

無反応。やっぱり聞くだけ損なのだ…。

「こんなお父さんだったら、弥生さんも出て行きたくもなりますよね！ 実は、奥さんだって亡くなっただんじゃなくて、出てったとかだったりするんじゃないんですか？」

「……………」

鎌掛けたつもりだったけど…、やっぱりダメか。

「弥生さんからは、一度も連絡ないんです

か？」

「……ある」

「え!? あったんですか? いつ?」

おれは、てつきりあの手紙のことだと察して聞いてみたのだが、

「……最近は、頻繁に」

ひ・ん・ぱ・んー!? もう、何なのよ、このじじい!

「あの、はぐらかさないでもう教えてもらえませんか? 喧嘩して出てって絶縁状態じゃない

かったんですか？」

「……………」

「佐原さん!!」

「……電話がかかってくる」

「……もしかして、さっきのもの？」

二代目は黙ってコクンと頷いた。

「なんて仰ってるんです？」

「会いたい、と」

「で、なんて答えてるんです？」

「会いたくない、と」

「……………。おれが言うのもなんですが、あなたね、いいかげんにした方がいいですよ。どこまで素直じゃないんですか？ いい年こいて駄々っ子じゃあるまいし。会ってくださいよ。おれ、もう、つきあいきれません」

「……………」

「いつから、電話があるんですか？」

「ここ、五年くらい…。毎年、年末年始に…」

……………呆れた。もう知らん。勝手にしろ。バ

からしい。

絵は描かせて貰いたいが、この爺さんにつきあわされるのはもう嫌だ。こんなくだらないメンタルヘルスやらされるんだったら、家賃払った方が何ぼかマシかも。それから、その日はもう一度も二代目と口を聞かなかった。

夕飯を食べながら、夏子にそんな話をすると、夏子はその手の煮え切らない話が大っ嫌いなので「もうつきあってらんないよ

ねー、弥生さんの話しなんて今後一切しない方がいいよ！」と、怒り心頭。

「それはそうと、さつき二島さんから電話あつたよ」

「三島？　なんて？」

「何か用があつたみたいだけど……。あと、正月、いつ帰んの？　向こうで会おう、って」

実家……。どうせ、いろいろうるさいこと言われるだけのために帰るのか……。しんどいなあ。三島と会うのも、しんどいなあ。

「今年は金もないし、帰るのやめよ」

「でもいいの？うちの实家には寄るのに」

「うん。いい。三島に会うのもしんどいし」

「最近、佐原金造の家でずっと絵描いてるって言っただけど……」

「三島、知らんでしょ？佐原金造なんて」

「何でか知ってたよ。で、すごいびっくりしてた。ぎよっとするくらいの声で。何であいつが!?だって」

「あいつ、って、おれ？」

「だから、なんか知らないけど、そんな有名な家で、なんで浩ちゃんが？　ってことでしょ？　あの人、ネームバリューとかに弱そうじゃん」

くだらねえ。三島はなんでそんなくだらない奴に成り下がっちゃったんだろう。本当にくだらねえ。

「あ、そういや、もう一本電話あったよ」
「だれ？」

「なんか、…シューハイマー？　シューマツ

ハー？ たぶん、あの坂崎さんのレセプションの時いた人だと思うんだけど…、変な外人の奥さん、いたじゃん、綺麗な人」

「えー!? あのパンパン外人の美人妻!?」

「そうそう、あの、奥さんの方から」

「なんで!?」

「なんか、浩ちゃんのホームページ見て興味持った、とかって。私もよく解らないから電話してみたら？」

「今、日本にいるの？」

「一月五日までこっちにいろつて言つてた。
そこに携帯の番号メモつてあるよ」

時計を見たら午後九時半。まだ、大丈夫か
と思つて電話をかけると、どこか外に居るら
しく、雑音がうるさかつた。彼女は手短かに
捲し立て、おれのホームページを見て興味を
持ったので是非一度お会いしたい、と。会わ
ないことには解らんし、二代目にも辟易へきえきして
たので、これもいい気晴らしか…。

おれは彼女と明日会ふ約束を取り付けて、

電話を切った。

シューマツハー夫妻は六本木のホテルに宿泊していた。ロビーで待っていると、あのおかしな夫婦がニコニコしながらやってきて、「師走のお忙しい時に、御呼びだてしてすいません！」

輝く様な笑顔で夫人は言ってくれたけど、全然お忙しくない師走だよ、と心で呟く。年は結構いつてそうだったけど、気品と快活さ

がそれを感じさせない。ダンナの方はあいかわらず会釈するだけでろくに日本語は喋れないらしい。おれは二人と握手をし、言われるがままにホテル付属の喫茶店に入って行つた。「改めまして、私、シューマツハーと申します。よろしくお願いします」

先日貰つた名刺を紛失してたので、内心、良かった、と思いつつ改めて名刺交換。彼女は自前のファイルをテキパキ出して、展示の企画書や候補アーチストの資料を元に至極事

務的に説明し始めた。

おれは、ギャラリーでの企画展示の打ち合わせは初体験でいまいちピンときていない。

「あの、シューマツハーさんのギャラリーについていうのは、どういう作品を扱われているんですか？ ぼく、ドイツつて行ったことないんで、さっぱり読めないんですけど……」

「ドイツでは、日本で言うところのレンタルギャラリーというものはないので、基本、ギャラリーのオーナーが企画したり、コレク

シヨンの中から展示したりが主流なんです。私のところでは、特にジャンルの制限はしてないんですが、今回は、日本におけるイラストレーシヨンの範疇で、数点ピックアップしていきたいと考えておりました：」

「日本では、ギャラリーはイラストレーシヨン専門とか、現代美術専門とか、結構限定さ
れている様で、お客さんもわきまえてやつて
来ると思うんですけど、ドイツではそういう
感じではないんでしょうか？」

「最近じゃ、日本でもそういう括りくくつていうのは緩くなつて来ているのではないかしら？ 私も、作品重視で特にジャンルに拘こるだわつもりはないんです。それに橋本さん、海外での展示は初めてですよ？ 特に色もついていない状態でしたら、やり易いと思いますよ」

そりゃそうかもしれないけど……、そんな曖昧な話しでわざわざ海外に作品持ち込むのも大変そうだし……。いまいち腑に落ちない顔をしてると、彼女はそれに気づいて尚も続けた。

「日本では、優秀な商業美術の作家さんが正
当に評価されていない様に感じてます。そん
な想いもあってギャラリーの開設に踏み出し
たのです。私の場合、世間の評価よりも自分
の目だけを頼りに見てますが、橋本さんの作
品の中では、最近頻繁にアップされてるアー
トワークに興味を持たせて頂いております」
それは、嬉しい。あんなの、何の反応もな
いと思っていたから。嬉しいけど、そんな
でうまくいくのかねえ？ おれは、向こうの

事情もさっぱり解らないし、と思つて、
「あの、ギャラリーのホームページとかある
んですよね。そちら拝見して、また検討させ
て頂いても、よろし…」と、彼女の名刺を見
ながら言いかけ、……!! 目を疑つた。

Gallerie Platane

Yayoi Schumacher-Sahara

Galleristin

ヤヨイ・シューマツハー・サハラ……!?

つい一昨日読んだばかりの、あの手紙の主!? ま、まさか…、こんな偶然あるものなのかと、アドレナリンが出捲り、脳内でいろんな情報が交差してから、鼓動が激しくなつて…、おれはマヌケに吃り^{ども}ながら聞いたのだ。

「…あ、あ、あの、シューマツハーさん、ご出身はどちらで?」

「え? 東京です。…?」

「ま、まさか……、浜田山、ですか……？」

「：！？そうですけど！？何故ご存知で！？」

「!!!! あわ、あ……、あの、も、もしかして、

……佐原茂吉さんのお嬢さん？」

その名前を耳にした途端、彼女の顔は一瞬にしてサーツと青ざめて、眉をひそめながら神妙な面持ちでこう言った。

「父を……、なぜご存知なんですか？」

第7章

鎮魂歌^{レクイエム}

月末が迫っている。駅前の銀行で家賃の振り込みをしたものの、そろそろ直視出来ない残高になってきてるので、憂鬱な気分を引きずったまま二代目の家に向かった。

シューマツハー夫妻は先に到着していて、弥生さんは強ばった面持ちで、自分の育った

家の外観を懐かしく眺めていた。

「何年ぶりですか？」おれが聞くと、彼女は指折り数えて、「……十四年ぶりになります」

おれは、いつものごとく、自分ちの様に勝手に引き戸を開けた。

「こんにちは。佐原さん。橋本です」

いつものごとく、ガン無視されたので、勝手に上がりこむ。

「あ、どうぞ、こちらへ。今、お茶、入れますから」

かつて知つたる我が家を、つい最近あつたばかりの他人に案内される奇妙な事態に違和感を感じてか、彼女はこの凶々しい四十路男に微妙に怪訝けげんな視線を投げているけれど、もうそんなのは気にしない。彼女は十四年ぶりの実家の端々を確かめる様に眺めながら、慎重に敷居またを跨いだ。

お茶を差し出すと、戸惑いながら、あ、どうも、と受け取り、亭主のアルベルトとともに日本茶を啜った後、茶の間をきよろきよろ

見回して、惚けた様に呟いた。

「何も変わってないです……。時間が止まったみたい……」

すると、奥の寝室の方から音がしたので、おれと弥生さんは目を見合わせて頷き合い、二代目の登場を待った。

茶の間の敷居にゆらりと現れた二代目はうつろな目でこちらを確認。そして、しばしおれたちを凝視。

「お父さん、弥生です！」

弥生さんが口火を切ると、何を思ったのか
二代目は、抑揚のない口調で呟いた。

「……なにしに帰って来た」

弥生さんはキツと奥歯を噛んで、

「橋本さんに謝って！」

「……」

寸黙っている。いつものボケ。いや、ボケ
じゃない、トボケだ。

「未だにそんな出鱈目なことばかり吹聴し
てるのね！ そんなことばっかりしてるから、

誰からも愛想つかされるのよ！」

おれは黙って二代目を眺めていた。もはや何も言う気はしない。

「私が見放したのだって、それが原因だって理解出来てる!？」

二代目は、敷居に立ち尽くしたまま、尚も無表情に黙り続けてる。

「今度会える時は和解する時だって、ずっと信じてたのにつ！だから、お父さんが自分から会いたいって言うてくれるまで、じつ

と待っていたのよ！ 橋本さんは私にとって
は大切な仕事上の作家さんなの！ 私がどん
なに恥ずかしいか解る!? 結婚式の時だって、
友達の手前、どんな恥ずかしかったか……！
お父さんに解る!？」

弥生さんは、反応のない二代目に溜まり兼
ね、どんどんヒステリックになつていった。
アルベルトは、でかい体を持て余し、小さい
ちやぶ台に不自然に頬杖をつき、半ば笑みを
浮かべながら、二人のやり取りを見守ってい

る。

二代目はゆらりとちやぶ台の前に座り、おれのお茶を勝手に吞んで、眩し気な目でフウと一息ついた。この期に及んで、牧歌的なボケ老人の風体を装っている、のか……？

「お母さんが亡くなった、なんてっ！ よくも又ケ又ケと……!! さんざん迷惑かけといて、最後には平気で殺しちやえるのね！ 酷すぎない!? お父さんのために世界は動いてるわけじゃないのよ！」

おれは、昨日の午後三時に彼女達に会ったのだけど、結局終電までまるまる九時間も、六本木で過ごすハメになったのだ。

弥生さんが幼稚園の頃まで、二代目は至って真面目な普通のお父さんだったらしい。でもある時を境に、彼はどんどん狂っていった。ホテルの喫茶店で彼女は、ぽそりぽそりと彼の歴史を語り始めた。

「私達がまだ団地住まいだった五歳の頃です。

父は家族サービスをしようとして奮発ふんぱつしてくれたんでしょうね。ホテルニューオークラに食事に連れて行ってくれたんですよ」

二代目の一家は団地住まいだった…!!

「もう記憶の隅にしかありませんが……。気品溢れるホテルマンや回転扉、何もかもが初めて見るものばかりで、すごく嬉しかったのを憶えています。あんな豪華な食事は初めて

でしたし、意地汚いので、食べ物のことだけは忘れないですよ。でも一番嬉しかったのは、母が本当に嬉しそうにしてたのが伝わって来て、それがすごく嬉しかったんです。埼玉の農家の貧しい育ちでしたから、一張羅を着て高級ホテルで食事なんて、夢の又夢だったんだと思います」

二代目の妻は、埼玉の農家の生まれだった
：！！

「でも：」彼女は少し顔を曇らせながら、「帰り際、赤い絨毯の広いロビーで、父は立ち止まってある人を見ていたんです」

おれは、もう察しがついていた。そこにいたのが：、「佐原金造氏です。彼の周りには数人の著名人が集まっていて、一緒に写真撮影なんかをしていて：」

「それが、扇千景とか？」

「そうです」

佐原金造氏はまっ赤な他人だった：!!!

「私が小学校に入る頃、浜田山に引越して来たんです。まだ土地も安かったので、ローンで買えたんでしょね。あとで母が言っていましたけど、母は多摩市あたりのニュータウンを希望していたらしいのです。でも杉並に中古の一軒家があるから見てみようって。それがあの家です。以前、画家の方が住んでらしたそうで。父は取り憑かれた様にあの家に

執着してしまつて、勝手に決めちゃつたそうなんです」

浜田山の家は、全く別の画家の家だつた
…!!

「その頃からです。会社ではしつかり仕事をこなすのですが、方々でおかしなことを吹聴する様になりました。父は私に、ここはお祖父ちゃんの家だと吹き込んだんです。母は必

死に否定しましたけど、父が言うには、お母さんは遠慮深いから誤摩化ごまかしてるんだって。信じちゃいましたよ。母が嘘ついてるんだって。私は絵を描くのが好きだったんで夢を見ちゃったんですね。父と母の板挟みで随分混乱もしましたが。それから数年後、母はそんな父に耐えられなくなつて離縁したんです」

二代目と妻の別離の原因は離婚だった…!!

「父の語ることのなかで唯一の真実は『鈴懸の径』の話だけです。父の実父が画家で、戦争中によくあの唄を口ずさんでいた、というのはたぶん嘘ではないと思います。時々あの唄を歌ってる時の父だけは、素の状態の様に思えました。父は一人っ子で、誰も確証してくれる人はいないから、実際のところは解らないけど、おそらく父は画家のお父さんに懐いていたんだと思います。そういう楽しい思い出があったからこそ、捨てられた現実を

受け入れたくなかった」

二代目に弟なんて、飢え死んだどころか、最初っからいなかった…!!

「だからこそ、私と同じで芸術家に対する憧れは、元来、強く抱いていたのでしょいうね。否定していいのか肯定していいのか解らないまま、大人になっちゃって。ただ、お金にしつかりしなければって確信だけはあったの

だと思っています。祖母の苦勞を見て来ましたから。家族を捨てたり、我をつき通す芸術家っていうのは我が侂すぎる。ろくに売れなくて自業自得だって、当初は納得してたんだと思います。共感や憧れは心の隅にしまいこんで、芸術家は社会不適應者、という烙印を押して。なんとか否定出来てたから、必死の努力で大企業に就職出来たんだと思います」

……ここまで聞いて、おれは目眩を憶えた。

とてもじゃないけど情報整理が追いつかない。
二代目は、確かにいつも支離滅なことばかり吹いていたけれど、ボケも加味されてのこ
とだろうと高たかを括くくっていた。ここまで来ると、
虚言癖？ 身分詐称？ いや、ほとんど分裂症
なんじゃないかとさえ思う。これを、波さん
が知ったら、どう思うのか…？

「結局、引き金になったのは、佐原金造氏な
んですね。ホテルで著名人に囲まれている画

家の優雅な世界を垣間みてしまった時に、なぜ自分の父親と同じ名字で、同じことをやっている人間が、これだけきらびやかな世界の住民で、なぜ、これほどまでの落差が生じるのだろうって、整理出来なくなっちゃったんじゃないでしょうか。画家の祖父によって、父は多大な負を背負わされたのに、なぜ、この人は負を感じさせないのだろうって」

そこからは、二代目にとって、いわば父親

に對する鎮魂歌レクイエムが流れ始めたのかもしれない。
佐原氏に成功したバージョンの自分の
父親像を重ね、優しく優雅な芸術家の父とい
う虚像をでっちあげた。実父でも義理父でも、
何でも良かったのだろう。しかも、その空想
の父親を認めていいのか、認めたくないんだ
か……。葛藤し続ける。空想なのに……。

「幾重にも捻曲がつてますよね……」最後に弥
生さんは呟いた。

二代目は動揺も見せぬまま、平和な面で日本茶を啜り続けていたが、

グ、キュルル、ル

腹の虫を鳴らすと、恨みがましい目でおれを見て一言。「…弁当」

「ないですよ」

「…」

「寿司でも奢って下さい。金造さんの遺産で」

「…」

弥生さんは、何を言っても無駄だと悟り、ため息をついた。

二代目が、まじまじとアルベルトを見ると、アルベルトも嬉しそうに見返して呟いた。

「パンパン？」

弥生さんは、更にでかいため息をついて、
「お父さんのせいなんだからね。なかなか日本語憶えてくれないのに、方々でこればかり……」

もしや、これが、お父さんの真似……!?

すると、二代目はゆらりと立ち上がり、茶の間を出て行った。

「：どうにもならないですね」

「：すいません。本当に。お恥ずかしい」

弥生さんは、そう言ったかと思うと、ぱつと顔を上げ、「本当にお寿司、とりません？」そう言つてそそくさと廊下に出た。

「やっぱり、あつた！」黒電話の傍らに、電話番号、上三ケタ時代の寿司屋のメニュー。「時代物、ですなー」

「これ、この番号の前に〃3〃とか〃5〃とかつけばかかるのかしら？」

「〃3〃じゃないですか？ おれんところはそうだった」

「かけてみます？」

「かけてみましょう」

無事繋がると、弥生さんは迷いもせず「特上、四人前お願いします」。電話を切ると「ここのお寿司美味しいんですよ。何年ぶりだろう！」

「あの、おれ、今日あまり持ち合わせてなくて……」

「あ、大丈夫。父に払わせます。どうせ、退職金も年金もがっぽり貰ってますよ」

あ、そ、それならと喜んで、楽しみに待つことにして、三人でアトリエを見に行つた。弥生さんは懐かし気に窓や壁に手を当てて、想い出を手繰^{たぐ}るかの様に目を閉じた。

「母は兄とともに私も引き取ろうとしたのですが、私はこの家が大好きだったんです。特

にこのアトリエにしていると心が弾んで……。父にも懐なついていました。だから、母と兄が出て行つた後も父と一緒に住むことになつて……」

「離婚されたご家庭つて、母親がお子さんを引き取るケースの方が多かつたんじゃないですか？」

「ええ。母方の伯父にも随分説得されました。お父さんの言つてゐることは嘘だからつて。どこかで……私も解つてたんです。でも、結局畑ばかりで何もない母の実家で暮らすより

も、嘘でも夢の方を選んじやったんです。子供だったから、弱かったんですよ……」

そう言う和一息ついて、

「このアトリエが大好きでした。父の帰りを待ちながら、いつもここで絵描きの真似事をしていたんです。父はそれをととても喜んでいました」

「でも、お父さんが働いてたんじゃ、夕飯とか大変だったでしょ？」

「いや、その頃、まだ祖母が生きていたんで。

祖母が作ってくれてました」

「え!? 茂吉さんのお母さん!?」

「そうです」

「∴息子が変わなことばかり言う様になって、
∴心配してなかったんですか?」

「うゝん、ちよつとクレイジーなヒトでした
からねえ∴。桁外れに大雑把で、全然細かい
こと気にしないっていうか∴。気にしろ
よ、って感じですが。祖父が、妻子を捨てて
出て行ったのも、その辺に原因があるんじゃない

ないかと、秘かに踏んでいるんですけど：」

：聞けば聞く程、価値観が逆転していく。
もつと無駄に苦労を背負^{しよ}い込んだ可哀相な人
なんだとばかり思ってた。片方だけの言い分
なんか聞いていても、物事なんて解りやしな
い：。

「最初のうちは、そんな感じで楽しかったん
ですけど：」

弥生さんは、少し目を伏せて、

「ある時友達に言われたんです。弥生ちゃん

のうちに住んでいたのは、全然違う画家の人だ、弥生ちゃんは嘘つきだってお母さんが言っていた、って。……ものすごいショックでした」

そりゃそうだろう。親に言われたこと素直に信じていただけで、いきなり嘘つき呼ばわりだもの。小学生には堪え難いトラウマだよ。「その頃から反抗期に突入ですね。私は杉並にある女子美付属中学に憧れてたのだけど、どうしても受験出来なかった。父が洋画家の

偽の息子を語っていることに、ものすごく罪悪感があつたんです」

「：でも、誰にも言わなきや問題なかつたんじゃないですか？」

「それでも、なんか後ろめたくって、美術に詳しい人がたくさんいるところに乗り込んでいく勇気がなかつたんですよ」

「……」

「辛かったです。絵を描くことが好きだったのに、もう素直な気持ちで描けない……。結局、

どこかで、絵描きの孫だからってという裏付けに頼って自分の才能を信じていたってことなんです。だから、それが嘘だって解ってから、自分の自信とか気持ちまでも、全てが一気に信じられなくなってしまうて。絵が好き、と口にするのも憚はばられる様な、言うだけで嘘になっちゃうんじゃないかって、そんな気持ちにさいな苛いらまりました」

……。何かの裏付けにすがって自分を信じる、という心理は解らないでもない。おれに

だつて、どこかそういう気持ちはある。そう
じゃないと、心許こころもとない、時もある。

「だから、中学入学を転機に母と兄のいる埼玉に越すことに決めたんです。でも向こうの暮しも決して楽しくはなかった。慣れない環境な上、東京から来たっていうだけで、いじめられたりなんかもして。それでまた、現実逃避。子供の頃に父に吹き込まれた嘘の話しが本当であつたなら、どんなに嬉しいだろうって。私のお祖父ちゃまは杉並に住む洒落

た洋画家なんだって。そんな虚しい空想の世界に耽っては、また罪悪感を感じたり。本当に苦しかったです。

でも、そんな時にふと考えたの。父もそんな気持ちだったんじゃないのかって。現実には耐えられなかったから、絵空事の世界をでっちあげたんじゃないかって…。

サンタクロースのお話しは嘘ですが、夢があるというだけで、どこの親御さんも平気で嘘を言いますよね。それと同じで、ある意味、

父は私に夢を持たせてくれた。その夢を、父も一緒に見たかったのではないのかと……」

おれは、二代目の捻曲がつた心情を推しはかりながら、壁際に目をやった。例の〴〵未完の大作〴〵が、無造作に置かれながらも、静かに威光を放っている。

「あの、この絵は……？」

そうなのだ。これの正体は何なのか、それだけがまだ謎として残っていた。

「解らないんですよ。誰が描いたのか。父が

あちこち出向いて不振な行動をしていた頃、
どこかの画廊でカモにされて、高値でふつか
けられたみたい。バブルが弾ける直前くらい
じゃないでしょうか」

「じゃ、贋作……？」

「おそらく。私、大学卒業後、ギャラリーで
バイトしてたので、その頃おつきあいのあつ
た鑑定士さんに見て貰ったんです」

「なんて仰ってたんです？」

「明言は避けてらしたけど、遠回しに、本物

ではないでしょうって。これも何かの縁です
から大切にして下さいって、体ていの良い決め台
詞で営業スマイルされちゃった」

おれはまだ混乱していた。二代目と関わつ
たことでこの数カ月間、佐原金造という人間
に急速に興味を持つてはみたけれど、今まで
長いこと興味の対象外であつた彼に、急に関
心を示すことには、少しかりの違和感も感
じていた。でも、この作品を良いな、と思つ
たのは揺るぎない事実であつて、この作品に

騙されたという意識は全くないのである。

誰しも、多かれ少なかれ偶然の縁に意味を求めたりするけれど、この作品を良いと思った理由が、そういうこととは関係なかった。てことに、どこかで安堵を感じていた。

「結局、贋作かどうかなんて、解らないものは解らないんですよ。佐原氏の遺族に聞いても解らなかつたんです。本人のサインもないし市場的な価値はゼロですよ。でも……」

一息おいて彼女は言つた。

「市場の話しなんて関係なく、これはいい絵だと思います。だから、私も父を怒れませんでした。良い絵を買ったねって思ってます」

作品にまつわる背景にしか価値を求めない人もいる。本当は、作品そのものの発するメッセージのみにしか、価値はないのだけだ。

「父もそうかもしれないけど……。世の中って、芸術家の人生や背景にばかりファンタジーを求めて、芸術神話を支えがちだから、混乱し

てる。けど、背景なんて本当は関係ない。これを描いた人だって、実は贋作専門の作家か、高名な作家か、素人の日曜画家かも解らないけれど、それでもこれだけ訴えて来る作品がここにあるのだもの」

作家の出自がどうであろうと、見る人が見れば、正当な評価を下してくれる。そう願いつつも……おれは、どこかで見る人を信用出来ていなかった。

「これって新作ですか？」

描きかけのおれの絵を見て彼女が言った。

「え？あゝ、はい。そうです」

正直、自分の絵のことなんて、とんと忘れていた。

「拝見してもいいかしら」

「どうぞ」

弥生さんはアルベルトと一緒に何やらドイツ語で盛り上がりながら、離れたり近づいたりして、一枚一枚丹念に見て言った。

「やっぱり良いですね！ アルベルトもね、

素人目に見てもすごく楽しめるって。ロードムービーか何かのワンシーンみたいだって」
：この外人、そんなまともなこと言えたのか、と思いつつ、

「そう言って貰えらると一番嬉しいです。難解なものにはしたくなかったから」

「まとまった形で完成したら、うちで展示なさらない？」

曇りのない目で彼女は言ってくれたのだけど、おれはどこかストレートに喜べなかった。

「嬉しいですけど……。正直なことを言うと、渡航する金もないし、もつと言うと、……展示しても意味があるのか？　なんて、どこか思ってしまうんです」

心外であろう返答に弥生さんはきもち口籠り、そして思い直したかの様に、再度おれに問いかけた。

「……仰る様に、ギャラリーで展示したところで、内輪で終わってしまうことは多いかもしれない。でも、依頼された仕事と関係なくこう

して独自の創作に走られたのは、何か溢れる
想いがあるからなんでしょう？」

「そうです。だから今は、描き終わらない
と次のステップが解らないんです。それに、
純粋^{フライングアート}芸術の世界にも、どこか抵抗があつたり
して……」

「なぜ？」

「独りよがりでいたくないし、サービス精神
を持つていたい……」

「純粋^{フライングアート}芸術は独りよがりのマスタベーション

ン？」

「いやっ!! マスターベーションで何が悪い!? っていうか、何で〃オナニー〃じゃないくて〃マスターベーション〃?」

「えあ? な、何ででしょう? そういえば! : すいません」

「あ、いや!! おれこそ、: すいません! なんか、そういうこと言う人が、何でかいつも、〃マスターベーション〃って言葉使うんで、気になってて」

：な、なにを言っているんだ、おれは。：しばし、気まずい沈黙が流れる。確かに：、オナニーで何が悪い、全ての原点はオナニーだ、くらいにおれは思ってる、のだが：。

「あの、おれ：、音楽とか映画とか、すごく好きなんですよ」

「はい：？」

「そういうもので育って来たし。そういうもののにいつも助けられて来た」

「ええ：」

「おれみたいな貧乏人でも手の届く間口の広さつてのが、エンターテイメント大衆芸能にはあつて。だから、おれは自分で作るものも、そういう敷居の低いものでありたいんです。金のない兄ちゃんにも届くものでありたいんです」

フライングアート純粹芸術の世界に群がる奴らなんて、上辺の価値でしか判断出来ない思考停止野郎ばかりだと、おれはずっと思っていた。でも、自分はどうよ？ 自分だつて時には、何かの裏付けに支えられなければ自分の才能さえ信じ

ることも出来やしない。誰か自分じゃない別の人に、価値を認めて欲しいと思ってる。おれが廃業出来ないのだって、何者でもない市井の人間になってまっさらの状態でただ絵を描くのが、どこか怖いのだ。ろくに誰の目にもつかないところで、独りごつ様に描き続ける……。誰が見てくれる？ 誰が相手にしてくれる？ どうやって喰って行く……？ けれど信頼していたはずの商業美術の世界でさえ、既におれは信用出来てないんじゃないのか……？

寿司が届いた。

三人でいそいそと茶の間へ向かうと、いつものまにか二代目がちよこんと正座して座っていて、ちゃぶ台の上には大きめのお菓子の缶。銀色の蓋に「佐原茂吉」想い出の品物」と、わざわざ筆ペンで書かれた紙が貼つてある。おれは、だんだん可笑しくなってきた。

「なに？ それ？ 今度はなに始めるの？ お寿司食べるんだから、それ、どけて」

弥生さんは、顎あごでしゃくつて冷たくあしら

い、大きな寿司桶をドンとちゃぶ台に置いた。
アルベルトは嬉しそうに寿司をつまみ、ド
イツ語で弥生さんとなにやら喋っている。

「彼はね、なんでか、お父さんのこと大好き
みたいなの」

「どのくらい交流あったんですか？」

「それが、結婚式の時だけだったんですけど
ね。…しかも、最悪の結婚式」

「何しでかしたんです？ お父さん」

「……憶いだしたくもない、です」

晴れの舞台で、二代目はがどんな爆弾落としたのか、ものすごく興味があつたけど、彼女の苦々しい顔を見るとさすがにあまりっこめない。

「で、結局弥生さんは美大行つたんですよ？」

「だীব葛藤したんですよ。私、結局父似なんですよ。母とも兄ともあまり性が合わなくて…。二人とも、現実を見据^すえられる人だから。学校ではいじめられてたし、埼玉には嫌

な思い出しかなかったんです。だから、やっぱり絶対にここを脱出したいって強く思う様になって、一大決心で美術予備校に通い始めたの」

「何科に？」

「虎穴^{こけつ}に入らずんば虎子^{こじ}を得ず、との思いで、油絵学科。そしたらもう、ものすごいトラウマだって、実感しちゃいました」

「というと？」

「もう一人の自分がいちゃもんつけてくるん

ですよ。百姓娘が何様気取りで絵を描いてる？おまえは偽者だ、って」

なんかちよつと…、自意識過剰な気もするんだけど…。

「その声と戦って素直な気持ちになれるまで必死に描き続けました。他のみんなは受験のプレッシャーと戦ってるんですが、私だけ別のものと戦ってるんです。邪心を捨てなくちゃ絵に歪んだ心が透視される。なんてね。もうほとんど修業僧の域ですよ」

「おれ、そんなこと考えて絵描いたことないですよ」と、言ってから、はたと気づく。いや、最近のおれっぽくないか？ それ…。

「大学に受かってからも、その悩みは続きました。同級生たちが現代美術的なことを初めても、私だけどうもズレていて、あらゆるものを地味に写生し続け、心頭滅却にばかり務めてたんです」

おれは、ふんふん、と聞きながら、最後の楽しみにしておいたイクラに手を伸ばす、と、

ない!! そんな無体な! っと思つて顔を上げると、二代目とアルベルトがむしゃむしゃ喰らつていた。

「ちよつと! 二人とも! イクラ何個食べたんです!？」

半泣きになりながら問い詰めると、二代目は無言。弥生さんがアルベルトに聞くと、悪びれもせずピースマークで「Zwei」^{ツヴァイ}と答え、弥生さんは「うそー、私も食べてない!」

「この二人、似てるんじゃないですか!？」弥

生さん、結局ファザコンですか!？」

「いや、そう仰られても……。それだけは認めたくないです」

周囲のことも顧みない満足な食事を終えた二代目は、日本茶を啜ってから、嬉々としてお菓子の缶の蓋を開けた。

弥生さんは眉間に皺を寄せつつ、おれとアルベルトは興味津々に、箱を覗き込んだ。そこには数枚のポケットアルバムとビデオテープ。アルバムを手にとると……、

「これ！ 扇千景ですよ！ 若い！」

「あれ？ 誰だっけ？ この人！ 歌舞伎役者ですよね？ 名前憶いだせない……」

「こっちは永六輔！」

他に、元プロ野球選手、元関脇、元ニュースキヤスター、日本画家、等々、まるで蕎麦屋に飾ってあるサインかのごとく、統一感のない微妙な著名人と二代目のツーショット写真集……。日付は、だいたい'80年代後半。

「こんなのいつの間に……!? どうしたのよ!?」

これ！」弥生さんがひきつりながら聞くと、
「：金造爺さんに、いろいろ連れて行っても
らったんじゃない。おまえさんも、一緒に連れ
て行きたかった：」

弥生さんはグツと目を細め口を固く結んだ。
少し泣きそうになったのか、緩んだ涙腺がバ
レない様に俯いた。せつない：。おれは彼女
を見ない様にして、箱の一番下にあるビデオ
テープに目をやった。

『Hochzeitszeremonie von Alberto und

Yayoi』

「これ！もしかして結婚式ビデオ!? 見た
い！見せて！」

二代目が手にとろうとすると、弥生さんは
必死の形相で奪い取り、

「絶対ダメ！見たくない！こんなの！」

すると、アルベルトがポンツと彼女の肩を
たたいて「Lass es uns anschauen!」。しばし
ドイツ語でのやりとりが続き、アルベルトが
なにやら説得している様子。彼女は諦めた様

に嘆息すると、ふいつと二代目にビデオテープを差し出した。

すると、二代目は手渡されたテープをそのままおれにパス……。『?』おれが戸惑っていると、すぎる様な目で言った。

「見方が解らん」

見れば、'90年代のものであろうビデオデッキが置いてあるものの、テレビにつながっていない！そこからセッティングかよ、と思いつながらコードを繋ぎ始めるも、ふと疑問

に思う。二代目が番組を録画したがるとも思えんし、ましてや映画なんぞ見るわけない。

「もしかして、これ見るためにデッキ買ったんですか？」

「……」

：たぶん、そうなのだろう。つてことは、二代目にとっちゃ、この結婚式は相当良い思い出なんだろうが、しかし、今日まで見れなかったって、わけだ。

デッキは簡単にセット出来て、テープを回

した。

『Alberto und Yayoi, September 1995, Nogi Schrein, Tokyo, Japan』

タイトルカットに続いて、邦楽の笛の音、神社の参道を歩く和装の外国人と十二単の美しすぎる花嫁が映し出された。参道には、祝福の人ばかり。アルベルトの仰々しい三三九度やツツテンテンの袴姿が笑えるが、趣のあるいい映像が続いた。

「いい雰囲気ですよ。どなたが撮ったんです

か？」

「アルベルトの友人で、映像作家なんです」
昨日聞いた話しでは、アルベルトも映像の
音響技術の仕事をしているらしいので、そう
いう友人は多いのだろう。確かにそんじょそ
こらの結婚式ビデオとはクオリティが違って
る。外国人好みのエキゾチックな視点で仕上
がっていて、いい感じだ。

二代目はやつと見れた映像に釘付け。映像
の中の彼は、まだ現役らしい若さが漲って

いて、しっかりとした普通の父親に見える。
やっぱりしかめっ面ではあるけれど……。弥生
さんの母と兄は、少し二代目と距離を置きつ
つも仲の良い家族を装っている。お母さんは、
顔立ちは整っているけれど、朴訥^{ぼくとつ}としていて
いかにも遠慮深そうなおばさん。お兄さんは、
小太りで堅気な社会人といった趣きだった。

場面は披露宴会場へ移された。

「ああ、もうダメです。もうダメです」

弥生さんは怯^{おび}えまくってるけど、友人らの

当たり障りのない祝福のコメントや、楽し気な宴が繰り広げられているだけで、そんな恐ろしいなにかが始まる気配は全く感じられない。普通のほのぼのした結婚式……、じゃん？

「さて、皆様！ 新婦によるご両親への感謝を込めた花束の贈呈が行われます！」

司会者が声高に唱い上げると、スレンダーなドレスに身を包んだ弥生さんが、はにかんだ表情で両親に向かって歩み始め、会場は拍手で湧いた。

「ああ！もうダメ！絶対見れない……！」

弥生さんは悶える様に目を背け耳を塞いだ。

映像の中では「お父さん、お母さん、今まで大変なことも沢山あったけれど……」たぶん、これまでの人生を想い、寝ないで考えたのであろう、花嫁の感動のセリフが流れ始め、結婚式では一番涙を誘うクライマックスシーン。おれもちよつとウツとくるくらいの健気なセリフが続き、ここで普通なら、父親が涙ながらに花束を受け取り鼻水グシユグシユで言葉

に詰まり、それがまた観衆の涙を誘うはず、
：なのだが、しかし、二代目にそんな予定調
和は通用しなかった。

彼は、花束を受け取ったと同時に、一言だ
け貰うつもりでマイクを向けた司会者から、
マイクを奪取。動揺する司会者を尻目に声高
なアジテーションを飛ばし始めたのだ。

「本日はあ！娘、弥生のためにい！ご足労
頂き！ご来場の皆様にはあ！誠に！感謝の
言葉がつきませぬ！！」

会場はざわめき、元妻の顔はあきらかに青ざめ、弥生さんも目が点になっている。

「しかしながらあ！　うちは三代芸術家であり！！私、佐原茂吉はあ！　二代目佐原金造であり！！花嫁の父親である前に！　この人生を芸術に捧げた身なのであります！！」

会場は一気に静まり返り、日本語の解らない外国人客さえも、そのただならぬ空気を肌で感じとった。

「我々は代々！　由緒正しい芸術家の血筋で

ございます!! 先祖は! 徳川御用達!! 金屏風
を任せられ! 明治維新に於いては! 皇室御
用達!! 昭和天皇が崩御ほうぎよされるまで一線で!
輝かしい功績を残し! 淋巴りんぱの末裔として恥
ずかしくない偉業を! 成し遂げて! 参りま
した!! かしながら! 不肖! 我が娘弥生
は! 国賊こくぞく! 毛唐けとうの妾めかけ! パンパンと成り下
がり! この淫売いんばい!! 売女ばいた!! かしながら!
芸術家たるもの淫行いんこうの一つや二つ! ついて
廻るものであり! 芸術の目指すところは自

由の獲得!! 体の一つや二つ軽々と売れるくらいでなければ! 女流画家は成功しないのでございます!! 男性諸君には得難い子宮感覚とやらを存分に發揮する為にも!! フリーダ・カーロの如く奔放で、淫らでなければならぬ!! 弥生の祖父佐原金造は! その様にこの娘を育てました!! 女流画家の宿命! どうぞ皆様、暖かい慈愛の心で! 三代目弥生に行く末を! 見守って頂きたく存じます!!」

……弥生さんは、耳を塞いで床に突っ伏している。二代目は、やっと視聴出来た自分のアジテーションにうつとり。アルベルトは仕方なさそうに笑みを浮かべ。おれは……想像を遥かに超えた二代目のパフォーマンスに压倒されて、言葉も出ない。……最悪だ。

映像の中の弥生さんも耳を塞いで立ち尽くしている。……痛ましい。こんなことされたら絶縁してもおかしくない。なのになぜ、この人はこんなに二代目を気遣ってやってんのか、

おれにはさっぱり理解出来ない。

外国人客のために用意されていた通訳係のお友達も、さすがにこんなもん、通訳出来るわけもなく、ただおろおろするばかり。そのあと、アルベルトの父親の挨拶が続いたものの、会場の空気は先ほどまでと、うって変わっているわけで、ひどくやりにくそうだった。弥生さんは涙をこらえる様に俯いて、そんな彼女の肩をアルベルトが固く支えている姿で映像は終っている。

おれが硬直していると、

「…だから言っただでしょ？」

心中を察したかの様に弥生さんが呟いた。

「あの…」おれはおもわず、「…殺したい、とか、思わなかったですか？」

彼女は俯いたまま尚も低い声で、

「……思いましたよ」

そしてもう一度、念を押す様に呟いた。

「……もう一生会うものかと思いました」

実の娘に何を言われてるのか、本当に解つ

ているのか？と思つて二代目を見ると、何も動じていない。

「……しばらくは立ち直れませんでした。楽しみにしていたドイツでの新生活にも、暗い影を落としました。アルベルトがいなかったら、私は、……どうなっていたか解りません」

ずっと俯いたまま、床に両手を真っ直ぐついで、長い黒髪をだらりと下げて、髪の毛の隙間からブツブツと語る弥生さん……、たぶん漫画だったら、今、彼女の体から青白い怒り

の炎がゆらりと立ちのぼっていたりして、すごい迫力なんだろうな。…怖い。

すると、いきなり彼女がガバツと顔を上げ、おれはビクツと仰け反った。彼女は髪をかきあげ、淡々とビデオテープを巻き戻し、イジェクト。ケースにしまい、他のものと一緒に缶にしまい、蓋をした。

「アルベルトのおかげです」蓋に手を置いたまま、すっきりした眼差しで彼女は言う。

「私は父と同じで脆い人間なんです。…だか

ら、問題が生じると一つ一つクリアにしていかなければ気が済まないんです。一種の強迫神経症です」

：昨日からずっとこの人と話している。彼女の言葉尻はしつかりしていて、何か一つ伝えるのにも、怖いくらいおれの目をまつすぐ見据えて話す。その仕草の節々に賢明さが漂うのだけれど、それはどこか彼女の神経症的な資質に裏付けられている様な危^{あや}うさを、おれもどこかで感じ取っていた。

「家族が見捨てて、祖母も亡くなった。父の妄想がここまで肥大化した責任は私たちにもあるんです。そのことに、大学生の頃には薄々気づいていたのに、何も出来なかった」

「あの…、理知的な構えは立派だけれど…、そこまで自分を追いつめるのは、ある種、自虐の域じゃないですか？」

「そうなんです！ だからアルベルトのおかげなんです」

彼女の神経症的な過剰反応とは裏腹に、ア

ルベルトは至極大らかだった。彼は何でも笑
い飛ばす。どんなに迷惑な人間だろうと観察
することによつて笑いに転じてしまう天賦^{てんぷ}の
才能を持っているらしい。その傾向は家族ぐ
るみの様で、後^{のち}に二代目の演説の翻訳を聞い
た彼の家族は、翻筋斗^{もんどり}打って大爆笑。それか
ら、家族中で二代目の真似が流行^{はや}り、ビデオ
を見ながら全文を記録。面白い単語をピツク
アップ、マスターした結果、家庭内では「パ
ンパン」「インバイ」「バイタ」に始まつて

「ケトウ」「コクゾク」等々の日本語だけが、シニールに飛び交い始めたとか…。

「お義父さんなんか、カタコトですけどほとんど全文暗唱出来るんですよ」弥生さんは、呆れた様に笑って言った。

「最初は、嫌がらせかと思ったんですが、みんなの笑ってる顔を見てたら、序々に私も笑えて来ちゃって。救われました。今日は久々にオリジナルを聞いちゃったので、さすがに刺激が強かったですけどね」

こんなパフォーマンスぶちかましたら、嫁ぎ先次第では後世まで難癖つけられても不思議じゃないわけで。おれは、得体の知れない怪しい外人、くらいにしか認識していなかったアルベルトのことを、ちよつとだけ見直したのだ。結局は、笑うが勝ち、か。

「あ、いけない。もう五時。私たち、六時から人と会う約束してしまつてて」

二代目は、そんな彼女の言葉を聞いても表情一つ変えず寸黙っている。

「でも、久しぶりの再会、こんなんで終っちゃって良いんですか？」

良いわけではない。それは彼女自身が一番解ってる。彼女は二代目に問いただした。

「お父さん、これでいいの？ 私達、帰っちゃっていいの？」

「……」

「また来る？」溜め息混じりに彼女が聞くと、二代目はこくつと頷いた。

「じゃあ、一緒に年越ししよう。大晦日大丈

夫？」

再び、二代目が頷いた。

「あの：、良かったらおれも一緒にいいですか？ 家族水入らずのところ、申しわけないけど。一人、誘いたい人がいるんです」「もちろん！ 橋本さんさえ良ければ私もその方が助かります」

おれが気になっていたのは、波さんのことだった。波さんは、娘さん二人とも地方に嫁いでいて、毎年一人で正月を迎えると言って

いたし。なにより、二代目のことをいち早く伝えておきたかったのだ。おれ自身も、まだまだ整理出来ていないけど、なんだかんだいって二代目に一番真摯のどかに接して来た波さんのことを考えると、長閑のどかに正月を迎える気分になれなかったのだ。

二代目の家を出て、波さんに電話してみた。そして、了解を得るや否や、波さんの家に直行したのだ。

第8章

何も呑込みやしない穴



「…なるほどの！」

おれの長〜い説明を聞いて開口一番、波さんが言った。

「あの…、びっくりしませんでした？」

おれは、驚愕と怒りの波さんを想像していたので、きもち拍子抜けして聞いた。

「まあ、そりゃあ……、ちよつとやるせん気持ちもありますかね」

波さんは濃く日本茶を注ぎながら、至極冷静に答えている。

「それだけ……？」

「どこかで、そういうことも想定してました、かなあ……。私らくらいの爺さんだとね、いろんな変わった人も仰山見て来とるんでね」

：変わった人、で、片付く話し？ おれが腑に落ちないでいると、

「けっこうおりましたよ。戦後はね。ハツタリだけで生きとる有象無象だらけでしたわ。最近はすっかり、そんな人も見かけなくなつたもんだから、まあ、私も油断しとったわい」そう言つて、「あいつには、お互いにいっぱい喰わされましたな！先生！」おれの肩をポンツと叩いて、ガハハと豪快に笑ひ出す。待つてよ……。そ、それだけ!?なの？

「まあ、同情も出来ますわい。私らの若い時には受け入れがたい現実が多過ぎたんです

よ」

「かといって……。ここまで嘘つかれたら、何を信賴していいのやら……」

おれが口籠っていると、波さんはグリグリの目をギラツと光らせて、「そんじゃ、私も一つ告白させて貰いますわ」と、凄む。

なに：!? 波さんもなんかあんの!? おれが小動物の様にビクビク構えると、

「ふみえさんが空襲で亡くなっただちゅうのは嘘なんですよ。本当は寝取られたんですわ

い」と言つて、またカハハと笑い飛ばした。
：ちよつと待つて。

「事情はともあれ：、長年許せんかったから、向き合えんかったただけですよ。でも先生方の美術展でね、あの怒張どちようした、男根の彫刻を拝見した時に、それが長年ワタシの心に剥はがし難く膠着こうちやくした澱おりの様にも感じられましてね。長年誤摩化して来たけれど、もう目を背けて死ぬことは出来んと、七十齡よわいにしてようやつと思うことが出来たんですわい。憎むつてこ

とは愛情の裏返しでね、未練があるのと同じですからね。私なりに、許すってことが出来たんですよ。本当に感謝します」

：解った。解ったから、：一時停止する時間をくれ。たいした嘘ではない。そんなことで信頼を失いやしない。でも波さんの五十年分くらいの葛藤をリアルに想像するには早すぎるんだよ。この展開…。

すると、そんなおれの様子を気遣って、波さんが言ってくれた。

「ま、わしの嘘は小さい嘘のようで、人一人、勝手に殺しとるんですから、大きな嘘ですわ。嘘について申しわけない。でも、先生、私が申すのもなんですが、さつき、何を信頼していいのやら、と仰いましたね。私は思うんですよ。先生が二代目や私を信頼してくれた、その気持ちを信頼出来れば、それで良いんじゃないですかね。私はね、自分の信じるつて力を信じ続けることしか、最後にはないんじゃないかと思つとるんですわ」

「……………」

…咀嚼する時間が欲しいだけかもしれない。それぞれの人生に敬意を払いたい。いろいろと想像を巡らせたい。そして相手を信頼する自分を築きたい。でも、それはどこか全て自分勝手なエゴイズムでしかない。

波さんの言葉は、自分で自分の才能を信じ続けるしかない今のおれの状態を、そのまま表現する様な言葉にも聞こえてきて、おれの心中で深く響いた。だからおれは、何も言わ

ず、有り難くその言葉を胸中深く受け止める
ままでに留めたのだ。きょうちゆう

気の抜けた様な心持ちで家路についた。

——二代目の語る「死んだ弟」ってのは、
もしかしたら、過去に置き去りにして来た、
自分の分身なのかもしれないな——。

そんなことを想いながら、ふと空を見上げ
ると、冬の澄んだ空気の中で星が煌めいてい
た。いつの間にかどっぷりと夜がふけている

ことにはたと気づき、あ、そうだ、夏子に連絡しなければ、と携帯を取り出すと、着信やメールがごっそりと届いていた。

「国府田昌男【フーミン復活！ 垂れ乳見たぜ】

……。読まずとも、メールの内容はほぼ想像がつくので、着信の方をチェックする。

三島から、四回：!?!? こんなに何度も何？
そう思っただけ直すと、彼は焦った様子で電話にでた。

「橋本!? ごめん! メール見た?」

「: : ? 見てないよ。何?」

「いや、実は: :、ちよつと: :」言いづらそうにそう言った後、彼は一気に捲し立てた。

「おまえの: : ヤフオク ID さ、拝借させてもらっちゃったんで、変なメール行っていると
思うけど、気にしないでな!」

「は? ID!? 何やってんだよ、勝手に! パ
スワードなんて教えた覚えねえぞ」

「: : : : その、: : おまえの好きなバンド名、入

れてみたら…」

「……………」

リトル
フイート

Little Feat —— ジャケットのイラストの
かつこ良さに魅せられて、おれがこの道を目
指すきっかけともなったロックバンド。その
名前を、おれはパスワードに設定してた。

「何だか知らねえけど勝手な事すんなよ！」

「すまん！ 本当にすまん！ 入札されたはい
いんだけど、全然値段上がんなくって…。こ
ないだ、入札頼もうとして、電話したんだけ

ど留守だったし……。橋本のID知ってたもんだから、つい！出来心で……。会社のパソコンから入札しちゃったのよ。競わせようと思つて。そしたらそれで落札になっちゃつて。もちろん請求なんてしないから！ただメール見てびっくりしない様に、連絡しなきゃと思つて。本当にすまん！」

「：何売ってんだか知らねえけど、パスワードまで勝手にコソコソ探りやがって。人の預金勝手におろす泥棒みたいで陰湿すぎやしね

え？それって犯罪行為じゃない？」

「いや！本当にわりい！ちよつと最近、生活費に困ってて…」

……生活費？安定したサラリーマンが何言ってるんだ、と思いつつ、煮え切らない気持ちで電話をきった。

高校時代、おれと三島は音楽に夢中だった。何ヵ月分かの小遣いを溜め込んで、長い休みになる度に近隣都市のレコード屋までレコードを買いに行くのが、二人の楽しいイベント

だったのだ。帰りの長い車中でさえ、その日の収穫を披露し合って盛り上がっているうちに、あつという間に時が過ぎてった。あの頃は、本当に唯一無二の親友だったのだ。おれが、リトル フリート Little Feat に夢中になっていたのもその頃だ。そんな楽しい思い出を、無惨に踏みにじられたみたいで、おれは酷く腹立たしく、やるせない気分になった。

帰宅後、苦い気持ちでパソコンを開くと、

確かに、身に覚えのない「オークション落札者」のお知らせメールが届いてる。

「おめでとうございます！」

商品「お買い得！ 佐原金造【小径】20号肉筆油彩画 渡仏巨匠」を落札しました。」

……なに？ ……これ？

一瞬、何が何だか解らなくなる。

「終了日時… 12月 28日 15時 16分

希望数量… 1

落札数量… 1

落札単価… 132,171円」

どこかで見た様な聞いた様な文字の羅列が、おれのパソコンに並んでる…。頭が真っ白になつて、二分くらい呆けてから、ハッと閃いて今朝記入したばかりの通帳を咄嗟に鞆から掻き出し、まるで宝くじの当選番号を確かめ

るかのごとく、その数字の一字一字を目で追った。

	お支払金額	差引残高
21-12-28	振込セコハウス	85,000
		132,381
21-12-28	振込手数料	210
		132,171

…息をのんで、慌てて商品詳細ページの画像を見、そして、更に目を見張った。

答えは既に用意されている。おれは三島の

携帯に速攻で電話をする。選択肢はそれしかなかった。

大晦日。師走の街はどこか慌ただしい。人並みの新年を迎えられる様に、おれも夏子と恒例の大掃除。とは言っても、狭い住まいは、大掃除をするには少し張り合いがなく、昼過ぎにはすっかり片付いて、

「よし！ スッキリした！」とおれ。

「そお？ あんまり変わんないよね」と夏子。

それでも心持ちクリアになつた部屋の中で、
飲む紅茶はいつもより旨い。

「しっかし、浩ちゃんも二代目には振り回されたもんだよね」

「まあね。もう、面白がるしかないけどな」

「それってどうなの？ 私、そこまで大らかになれないよ」

「そりゃ、毎日弁当作ってやってた夏子にしてみりゃ、心中穏やかにはなれんわな……」

「さつき、お義母さんからまた電話あつたよ。」

自分の親、ほつといて、そんな爺さんのところ
行くつてのもどうなの？正月なのに」

「うん……。ま、そうなんだけど。今年はそう
しないわけにいかんのよ……」

おれがそんな煮え切らない返事をする
と、夏子は半ば呆れて言った。

「いいけどさ。お義母さん、寂しそうだった
よ。様子見て近いうち、一回帰ろ」

「……わかったよ。でもどうせ、うるさいこと
言われるだけなんだけどな。理解ねえもん」

「そう？うちの親より理解してるよ」

「何言ってるの!? 夏子んちの方が全然理解あんじゃん。絵本だつてあんなに喜んでんだし」

それを聞いた夏子はカッと目を見開いて、
「冗談でしょ!? あんなのね、理解じゃなくって、私の成長止めてるだけ！ 赤ちゃんが何やっても、きやわいい〜って言われてん
のと同じだよ！ 浩ちゃんの方が立派に人格認められてるだけ、有り難いと思いなよ！」

：赤ちゃん、か。そうは考えなかつたけど、
言い得て妙：、かも。ともあれ、夏子には夏
子の葛藤もあるわけ、だわな。いずれにして
も親なんて、多少理解ないくらいで良い案配、
くらいのものなのかもしれない：。

宵の口、おれは夏子と波さんと連れ立って、
二代目の家を訪ねた。

「お初にお目にかかります！ あなたが弥生
さんですか！ いやあ、お噂は予々！^{かねがね} お会い

出来て光栄です！ 二代目の娘さんとは思えない程、お美しい！ いや、お美しい！」

弥生さんは戸惑いながら、

「あの…、二代目…って父のこと、ですか…？」

「いやこれは失礼。でもま、この際、無礼講で結構ですな。いろいろとしてやられましたもんですね」

彼女は、カッと赤くなつて、

「いつも、父が、多大なご迷惑をおかけし

てるようで……。本当に申し訳ございません
……！」

「ま、ま、そんな大仰な！面白いお父上を
お持ちで、ご苦勞も絶えんでしようが、ま、
あまり気にしなさんな！」

きまり悪そうに身を竦すくめた弥生さんに案内
されて応接間に行くと、目を見張る様な立派
な御節料理がところ狭しと並んでいた。

「アルベルトと二人でこしらえたんです」

「へえ」。アルベルト、こんなことも出来る

の!？」

おれがビックリして聞くと、

「ナマス、キントン、テイクゼンニ。オイシ
ネ」

：どうもこやつは、音響技師だけあって、
なのか、変なイントネーションの日本語が好
きなのかも。

「彼、料理好きなんです。食材が手に入れば、
向こうでも時々和食作ってくれるんですよ。
私のなんかより全然、美味しいの！」

すると！波さんがいきなり流暢な英語でアルベルトと会話し始めた。

「アルベルトは、御節料理は初挑戦だけれども、日本食の盛りつけの美しさにはいつとも感動する、日本食は芸術だ、言うとりますわ」

おれは呆氣に取られ、

「波さん、すごい！英語出来るんですか!?」
「いやなに、現役時代にね、アラスカで貿易の仕事してたこともあったもんですから、英

語だけはチラと。全くの独学ですがね」

「へえーっ!!」

聞けば聞く程、波さんの人生って量り知れない。いくら放出しても間に合わないくらい興味深い話題をふんだんに持っていて、無粋な二代目や、お互い交わす言葉を持たないアルベルトやおれたちの間に、あつという間に楽し気な和を図ってくれた。

アルベルトと弥生さんはドイツ仕込みの勢いでガホガホにビールの瓶を空け、波さんは

しつぽりと焼酎を嗜^{たしな}んでいる。紅白歌合戦の
ジエロに感化されたアルベルトが演歌のこぶ
しを真似すると、夏子と波さんがそれを見て
はしゃいでいた。二代目はあいかわらず無口
だけれど、満足げに御節をつまみ、至極穏や
かそうだった。

「ところで、お父さんと積もる話しは出来た
んですか？」

頃合いをみて、弥生さんに耳打ちすると、
「うーん…、話しも何も…。結局この調子で

すもん。でもね、私達が料理してるの気になるみたいでずっとウロチヨロ！何だかんだ言って嬉しかったんだと思います。長い間、こんなに大勢で年越ししたことなんてなかっただろうし、橋本さん、本当にありがとう！」

「いえ、おれ別に何も……。でも、佐原金造のことは置いとしても、お父さんも弥生さんもこの家が気に入った気持ち、解りますよ。ここだったから、おれもクリアな気持ちで絵が

描けた。おれの方こそ感謝しなくっちゃ」

すると、弥生さんは矢庭に頭を抱え込み、

「でも私ねえ…、このあいだ橋本さんに言われて考えちゃいましたよ。純粹^{フアインアート}芸術をとつつきにくいものにしてるのつて、ようするに私達、ギャラリストのせいって言いたいんでしょ？」

あれ？ 結構酔ってる？ このヒト、と思いつつ、

「いや、そんなつもりは…。作家にも鑑賞者

にも、責任ありますよ。結局、みんなで供託して、よく解らないものに仕立て上げてるんだと思います。芸術を」

「よく解らないくせにさ……。なんで有り難がるんですかねえ」

人差し指で、テーブルについたグラスの水滴をグルグル回しながら、目はうつろ。あ、だめだ……。完全に酔っぱらってんだ、このヒト。いつの間に……。？ おれは平静を装いつつ、「よく解らない方が神話をでっち上げ易いん

じゃない？ 思考停止出来るんですよ。自分の目で判断する、なんて自由、みんなそれほど求めてないですよ」

「でっしょお？ 誰かに判断してもらった方が楽ってことでしょお！ 自分の目で判断しろよっての、ほんとにつ！」

「：おれだって、どっかでそんな気持ち、ありますよ。一人で描いてると何やってんだか解んなくなつて、誰かに判断してもらいたくなりますもん」

「橋本さんがあゝ!? 我が道をゆくゝ、橋本さんがあ!? ウフフツ♪」

〈信じたく、この道をゝ、私はゝ、行くだけゝ♪〉

折しも、テレビで布施明がマイ・ウエイを熱唱し始め、それにあわせて彼女は、

「アイデイデイト、マゝイウエゝイ♪」

と、シナトラバージョン。……いつの間に、こんなに酔ってんだよ。美人なだけに、大振りな酔い方されると、妙に嵩張^{かさば}るんだけど……。

「褒められたい！とか、認められたい！とか、橋本さんでも思うんですか？」

「…思いますよ」

そう。そんな気持ちまで、否定出来やしない。イラストや文を描いていても、クライアントや、夏子や、友人や、親にでさえ、別に褒められなくっても、驚かせたり面白がらせたり、共感してくれるかなって思ったり、いろんな人の反応を想像しほくそ笑みながら、そんな些細なことを糧に、おれは絵を描いて

きた。

「い疾やましいゝっ！ 嘘！ 疾しくない！ 大丈夫！ 橋本さんの絵は媚びてない。そういうあざとさ、出てないから！ 媚びとか銜いとかね、ねらってる絵はすぐ解る！ 私ね、人の絵見るの楽しいの！ 描いている人の人間性が、クククツ、透けて見えて面白いんですよ」

：大丈夫か？ このヒト。おれはちよつと退きながら、

「意地の悪いギャラリストですね。見透かされてるみたいで怖いですよ」

「でも、描く方も見る方も、如何に騙し騙されるかの世界ですよねぇ。その駆け引きが恋愛みたいで色っぽいじゃない？ そんなこと堂々と出来る業種って他にないのに、ビジネススライクに、だとか、真面目に構え過ぎてる人多いと思いませんか？ 何でわざわざこの世界で？ バッカミみたいって思いませんか？」

相当絡んで来てる……。どうにかしろ、と

思つてアルベルトを見ると、慣れた様子でこつちを眺め、ほくそ笑んでいた。

「でも：、あまりピユアなこと言つてても、賢い奴らに騙されて、食い物にされるだけじゃないですか？」

バンツツ!!

「ピユアなことなんて！ 弥生は言つてませ
〜ん!!!」

いきなり机を叩き、雄叫びをあげる彼女に皆がギョツとして、おれも一気に酔いがひく。

「騙されたら騙し返すっ!! それぐらいの氣迫ないとやってらんないって言ってるのっ!!」

アルベルトに窘め^{たしな}られても、一向に止^やめる氣配はなく、大きな深呼吸に次いで、彼女は更に捲し立てた。

「芸術はっ! 心の鏡!! 人格がっ! 自^{おの}ずと滲み出るのがあります!! ピュアな絵!? そんなものはないっ!! 邪心まみれっ! それでこそ芸術!! ピュアなフリする作家ばかりが世間に横行しっ! 自ら葱しよってカモにな

るっ!! そうやってカマトトぶっててもっ!
何も生み出しやしないっ!! 私達はっ! 世間
と別の価値観で生きていることをここに宣言
する!! その心意気っ! 場末のスナックのマ
マぐらいの凄みを持って証明していかない限
りっ!! 惨めなワーキングプア状態からっ!!
一生っ!! 這い出せないのですますっ!!」

……ほ、本当の二代目って、こいつのこと
か? 酔ってるとかいう話じゃない…、マ
ジで怖いんですけど、このヒト…。一瞬、

シヤレにならないぐらい、二代目とだぶって見えた。

すると、

ピン、ポーン

玄関のベルが鳴り、皆が訝^{いふか}し気に時計に目をやった。

波さんが「こんな時間に誰かいの？」

「あ、すいません。おれの友人です」

「え？」

皆の怪訝な視線を尻目に、玄関に行き引き

戸を開けると、不機嫌極まりない表情の三島が、でかい荷物を持って立っていた。

「：正月、田舎帰る予定だったんだぞ」

「おれのＩＤ勝手に使ったバツ。まあいいじゃん。入金確認したろ。少し喰ってけよ。御節、旨いよ」

「何で：？三島さんが？入金って？」

夏子是不審な顔でおれを見て、三島は大きく溜め息をつきながら、見知らぬ家の住民に挨拶をした。

「はじめまして。大晦日のこんな時間にすいません。ちよつとお邪魔します。これ、橋本からの届け物なんで」

おれは、神妙に差し出された荷物を受け取り茶の間に運んだ。皆、戸惑いながら、おれの行動を見守っている。

ちやぶ台をどかし、広い畳の上で荷物の梱包を解きながら、おれは三島に言った。

「しっかしなー。三島が美術品の収集とはねー。参ったよ」

「：同僚に勧められたんだよ。これからは株なんかより美術品だつて」

「それで儲かったわけだ」

「……。言ってくれるなよ。去年はじけたろ、美術バブル。それで大暴落。全部二束三文で売り飛ばしてるよ」

「：哀れな美術品。でもま、こうやって必然性があつてここに届いたわけだから、あながち間違つてもいなかつたつて訳だよな」

そう言いながら、最後の黄色い布を捲ると

小品ながら丹念に描かれた、深緑のプラタナス並木の絵が顔を出した。

「……！ 佐原金造!?」

まさか、とでも言わんばかりに弥生さんが声を上げた。あんだけ酔っぱらってても、さすがにこれは解るらしい。

「さすが！ 解ります?」

おれは彼女にそう言ってから二代目の顔を見て、少し驚いた。あの濁ったうつろな目を、信じられないくらいまるまる見開いて、額に

は心持ち汗をかいている。呑込んだ生唾で喉仏が大きく上下に動いていて、こんな表情の、二代目を見たのは初めてだった。

「これ…、差し上げます。アトリエ使わせて貰ったお礼です」

二代目は、確かめる様におれを見たので、おれが頷くと、小鳥の様に目をぱちぱちさせた。かと思えば急に目を瞑り、しばらくそのまま瞑りつづけ、そして、夢ではないのを確かめる様に、もう一度ゆっくり目を開き、そ

れからおもむろに、大粒の涙をこぼしたのだ。

「トウチャン…」

弥生さんは、我が父の、ありえない言葉にギョツとして振り返った。

「ど、どうしたんですかいな、これは…」

波さんも状況が掴めず珍しく動揺している。常に余裕をこいているのはアルベルトだけ。言葉が解らなくても、状況を読むのに長ける様で、ずっとニヤニヤと見守っている。

「どうしたもんか、おれもよく解らないんで

すよ…」

でも、これでいいのだ。

「入金って…」

夏子は尚もそこに拘っていて、ひとり、納得のいかぬ顔、蛇の様におれを睨んでいる。

「大丈夫」

おれは、夏子にそう言つて微笑んだ。そう。大丈夫。これでいいの。万事OK。

「飾るんなら、やっぱり応接間ですよね」

そう言つて壁に目をやると、ドンピシヤな

場所に古びたフックがついていた。大昔の住民であつた画家がつけたのかもしれない。そのままそこに掛けてみると、色も大きさも、全てがピッタリと部屋の雰囲気^{ふんいき}に調和して、皆を黙らせるに充分だつた。

ああ、この絵は本当に、ここに来るのを待っていたんだな。これほどまでにピッタリと納まりの良い必然というものが、この世に存在するのかという想いに感極まり、おれ自身も嘆息した。極^きまりが良い時は、迷う余地

がない。

これで、二代目の嘘は完成した。

「経緯いきさつはよう解らんが…、良かつたのう。二代目。あんたのお父上の気持ちが見事に描かれとりますよ…」

波さんがそう言くと、二代目はごく素直に、うんうんうん、と頷きながら、尚もぼろぼろ涙をこぼしてた。

幾多の葛藤を乗り越えて、父親の気持ちを押し量れる様な立派な青年に育った二代目が、この鈴掛の径を父親と共に語り合い、肩を並べて歩いてく——、パソコンの画面で初めてこの絵を見た時に、おれはそんな光景を想い描いた。それは二代目が掴み得た未来であり、過去であつたはず。佐原金造氏が何を想つてこの絵を描いたのかは量り知れないけれど、この際何が嘘だか本当だかなんでどうでもいい。この絵を通して、おそらく二代目

は父親と対話出来たんだ。それだけは、確かなことなのだ。

ボーン…、ボーン…、ボーン…

気がつけば、遠くから除夜の鐘の音が響き、三島は慌てて時計を見て言った。

「かみさん、一人でおいて来たから怒ってんだよ。そろそろ帰んなきゃ」

「うん。本当にありがとうな。助かったよ」

おれは、三島に心から感謝しつつも、もうひとつ付け加えた。「おかげで、三島の言つたことも、よく理解出来たよ」

「……なにが？」

「この絵が十三万そこらで、ヤフオクで叩き売られてんだから、そりゃ、絵なんか描いて生活できるわけ、ないわな」

おれが意地悪くほくそ笑むと、三島はクワツと赤くなり、

「おれは七十万で買ったんだから、有り難く

「思えよな！」そう言ってから、皆の視線にハッと気づいて「あ、いや、でもこうやってご家族の方に喜んでもらえて光栄です！」

みんな、一瞬、え？　て顔でおれを見たが、おれは指を口にあて目配せした。いいんだよ、騙しておけば、この男は。

明けましておめでとう、の言葉がテレビの中で飛び交い始め、あ、年が明けたんだ、と、はたとみんな気がついた。つられる様に、各々が新年の挨拶を口にして、またいつもと

同じ年が明ける。

大晦日から元旦の時空を繋ぐ、おめでたい様な、どうってことのない様な、この瞬間。そこには例年の如く、漆黒の大きな穴があんぐり口を開けていて、でも開いてるだけで何も呑込みやしないのだ。どこで誰と過ごそうが、この間抜けな瞬間だけは、皆に平等にやってくる。

「10年代になっちゃいましたね」
弥生さんが言った。

「良い時代になりますよ！」

波さんが言った。

「だと、いいんだけどね」

夏子が言った。

9が0にまた戻って、おれも0に戻ったばかり。以前、おれを生きさせていると信じて疑わなかった紙切れの数字も何もかも。

ぽっかり空いた穴の様な〃0〃から何かが生まれるのか、そんなインド哲学みたいなことは解らない。さつき弥生さんに叱咤激励さ

れた様に踏ん張れるかどうか、おれには解らん。明日の食いぶちさえも見えないけれど、どんなに未来が見えなくなつて、世紀末からはや十年。もう、ノストラダムスなんて永遠にやって来てくれやしないのだから：

「永遠にこんなマヌケな正月を迎えられます様に」

おれは一人、新年を祝った。

12月31日の残金帳〇